平成８年度　考古学講座

かながわの弥生時代の社会

ー後期の環濠集落から考えるー

日　程

神奈川県立かながわ県民活動サポートセンター　２階ホール

開場	9:15		
開会	9:30	挨拶	
入門講座			
	9:40	かながわの弥生時代後期の社会を考えるにあたって（主旨説明）	伊丹　徹
	10:20	西相模の弥生時代後期の社会	西川修一
	10:50	東相模の弥生時代後期の社会	田村良照
	11:20	川崎・横浜市域の弥生時代後期の社会	安藤広道
	11:50	三浦半島の弥生時代後期の社会	中村　勉
（休憩	12:20）		
	13:20	高地性遺跡からみた弥生時代後期の社会	岡本孝之
	13:50	土器の移動からみた弥生時代後期の社会	立花　実
事例報告			
	14:20	厚木市　宮の里遺跡について	小山裕之
	14:40	横浜市　赤田地区遺跡群について	渡辺　務
（休憩	15:00）		
質疑	15:10		パネラー・司会・進行全員
討議	15:30		パネラー・司会・進行全員
閉会	16:40	挨拶	

司会　曽根博明・近藤英夫

進行　伊丹　徹・諏訪間順

1997.3.9

神奈川県考古学会

平成８年度　考古学講座

かながわの弥生時代の社会

ー後期の環濠集落から考えるー

日　程

神奈川県立かながわ県民活動サポートセンター　２階ホール

開場　9:15

開会　9:30　挨拶

入門講座

9:40	かながわの弥生時代後期の社会を考えるにあたって（主旨説明）	伊丹　徹
10:20	西相模の弥生時代後期の社会	西川修一
10:50	東相模の弥生時代後期の社会	田村良照
11:20	川崎・横浜市域の弥生時代後期の社会	安藤広道
11:50	三浦半島の弥生時代後期の社会	中村　勉
（休憩 12:20）		
13:20	高地性遺跡からみた弥生時代後期の社会	岡本孝之
13:50	土器の移動からみた弥生時代後期の社会	立花　実

事例報告

14:20	厚木市　宮の里遺跡について	小山裕之
14:40	横浜市　赤田地区遺跡群について	渡辺　務
（休憩 15:00）		
質疑 15:10		パネラー・司会・進行全員
討議 15:30		パネラー・司会・進行全員

閉会　16:40　挨拶

司会　曽根博明・近藤英夫

進行　伊丹　徹・諏訪間順

1997.3.9

神奈川県考古学会

目　次

開催にあたって
今回の講座の目的

入門講座

かながわの弥生時代後期の社会を考えるにあたって（主旨説明）　伊丹　徹　1
西相模の弥生時代後期の社会　西川修一　6
東相模の弥生時代後期の社会　田村良照　10
川崎・横浜市域の弥生時代後期の社会　安藤広道　15
三浦半島の弥生時代後期の社会　中村　勉　19
高地性遺跡からみた弥生時代後期の社会　岡本孝之　23
土器の移動からみた弥生時代後期の社会　立花　実　27

事例報告

厚木市　宮の里遺跡について　河合英夫　32
横浜市　赤田地区遺跡群について　渡辺　務　36

資 料 編

用　語　集　40
遺跡の消長と東海系土器出土遺跡の類型　43
遺跡分布図地名表　44
旧国名地図　44
遺跡分布図　45
遺跡分布図　45
土器編年表　46
土器分布図　46
鉄器・青銅器出土遺跡分布図　47
遺跡全体図　48

1. 臼久保Ａ遺跡　4. 倉見才戸遺跡　7. そとごう遺跡　10. 大原遺跡
2. 海老名本郷遺跡　5. 原口遺跡　8. 四枚畑遺跡　11. 赤田地区遺跡群
3. 神崎遺跡　6. 赤坂遺跡　9. 殿屋敷遺跡

環濠集落の大きさ比較図　57

今回の講座で討議されたことにつきましては、今秋を目処に「成果の記録」を何らかの形で刊行して行きたいと考えております。皆さんが本日吸収された成果と比較検討の材料としていただければ幸いです。

開催にあたって

今会場でこの冊子を手に取り、ここから読み始めた皆さん。皆さんはこの時点でもう素人ではありません。ある事柄に関心をもち始めることは研究者への入口です。

この講座は神奈川県考古学会会員の皆さんに考古学のことを広く知っていただくために開かれたものです。これまでの講座を通して会員の皆さんからはいろいろなご意見をいただきました。もちろん「もっとわかりやすく」という声が多いのは確かですが、アンケートを拝見して共通して感じることは、皆さんが考古学にたいへん関心をもっていて、もっと自分を高めたいという強い意識あることです。

会といたしましてはこれに十分なお答えをしなくてはなりません。今後ともこの方針が変わることはありません。今回の入門講座においても、現在の考古学が主要な研究課題としているテーマの一つを取り上げ、どこまで明らかにでき、またどのような問題が残されているのかを皆さんとともに考えていくことをねらいとしています。考古学を学ぶ糸口はたくさんあります。この講座をとおしてそのようなものの一つを発見してもらえたらと思います。

考古学の対象は全地球という空間であり、人類誕生から現在にいたる時間一切です。この膨大な時・空間を一気に学ぶことはとうてい無理です。どこでもいいのですが、小さいながら大きな一歩をまず踏み出さねばなりません。その一歩を今回は神奈川の弥生時代後期に選んでみました。そして県内で活躍しておられる若手の方に登場していただき、最新の発掘成果と研究に裏づけられたお話をしていただきます。入門講座だからといって10年も前の教科書に書かれているような通り一遍の話では、お忙しい中おいでいただいた皆さんに失礼です。やや固い話になるのはお許しください。用語や遺跡の名前は後でいくらでも調べられますから、そんなことは気にしないでください。邪馬台国がどこかにあった時に、「神奈川はいったいどんな状態だったのか」という歴史の大きなうねりを感じ取っていただければと存じます。

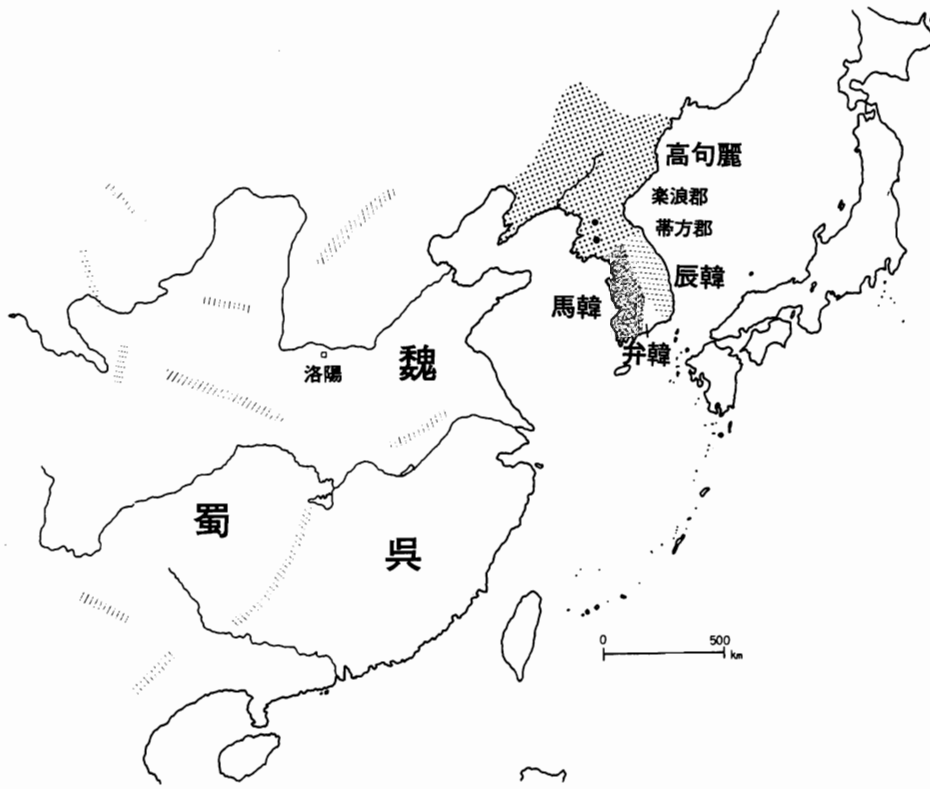
１９９７年3月9日

神奈川県考古学会

今回の講座の目的

弥生時代＝戦乱の時代とよく言われます。その象徴として環濠集落・高地性集落があります。今までは環濠・戦乱と言えば大塚遺跡を代表として中期に焦点が合わされることが多くみられました。近年相模湾沿岸を中心として後期のさほど大規模ではない環濠集落の調査事例が増加しています。これらの集落からは東海系土器が多く発見されていますが、その出自は三河・東遠江・西遠江などさまざまです。邪馬台国にまつわる問題も奈良県唐古・鍵遺跡や佐賀県吉野ヶ里遺跡を始めとしてかまびすしく、近年では狗奴国が尾張だ駿河だ上野だという声も聞かれます。

今回は以上の現状に鑑みて、東海系土器の移動と環濠集落の在り方や環濠をもたない集落と環濠集落の対比から後期の神奈川における社会動向を捉えるということを主眼に置いて検討します。



第1図　東アジア略図

入門講座１

かながわの弥生時代後期の社会を考えるにあたって（主旨説明）

伊丹　徹

１．はじめに　本日の主旨

弥生時代後期の神奈川は「不安定」で「緊張感」にあふれ「ダイナミック」な動きがあり、大変「面白い」時期であると言えます。

関東で環濠集落といえば大塚遺跡を始めとする中期後葉（１世紀頃）の大集落をすぐに思いおこされることでしょう。しかし神奈川では小規模な環濠集落が後期になっていたるところに作られます。大規模な集落はあまり見かけなくなり、県内を四分する程度の土器の違いも認められるようになります。また集落ごとに土器の顔つきがちょっと違って見えるのもこの時期からです。そしてこれらの集落には量の違いこそあれ、他地域の土器が出土します。そのほとんどは愛知県東部から静岡県にかけて見られるものです。これが何を意味するのか、その一部でも明らかにすることが本日のテーマです。

ここでは本日の発表を聞いていただく上で、予備知識として知っておいていただきたいことを簡単にまとめさせていただきます。

２．時代背景　　列島と大陸・半島

弥生時代後期は、西暦でいう２世紀から３世紀の中頃（ほぼ101～260年頃）までです。中国では後漢（25～220年）、三国時代（魏220～265年、呉222～280年、蜀漢221～264年）を経て晋（西晋265～316年）の建国の頃までにあたります。また朝鮮半島では楽浪郡（前108～313年）が置かれ、三韓（馬韓のちの百済、辰韓のちの新羅、弁韓（弁辰）のちの加羅（加耶））および高句麗などの国が割拠した時代でもあります（前頁　第１図）。このように多くの国が興亡していた不安定な時期でした。

中国の史書には日本列島に関連する記事が時折見られます。紀元前１世紀のことは『漢書地理志』に「夫（そ）れ楽浪海中に倭人有り、分かれて百余国をなす」とあり、１・２世紀のことは『後漢書東夷伝』にいくつか書かれています。建武中元2年（57年）には倭の奴国が朝貢し、光武帝が金印を授けたこと、安帝の永初元年（107年）に倭国王帥升等が遣使したこと、桓帝と霊帝のころ（147～189年）に倭国が大いに乱れたということなどです。そしておなじみの『魏志倭人伝』には詳細な記述があります（第１表　年表参照）。

弥生時代を教科書風に数行でまとめてしまうと、「紀元前３～後３世紀に金属（青銅・鉄）、水稲耕作、機織（はた）物・ガラスを受容し、富の集積が階級の発生を呼び、戦争を生じせしめた時代」と言えましょう。しかし実体は、とてつもなく均質でない社会でありつつ（マンションの世帯ごとにまったく違う生活があるような）、同時代性ということには敏感な社会（マンションの世帯ごとで同じテレビを見ているような）であったと考えています。

３．ものさし

本日はある時期・地域を特定するために「○○式」といったいろいろな土器の型式名がでてきますのでちょっと説明をしておきます（資料編45頁の編年表および土器分布図参照）。

考古資料でもっとも一般的なものは土器です。縄紋時代以来今日まで、人々は大量の土器（土器・陶器・磁器）を作り、壊し、捨ててきました。土器も多かれ少なかれ社会的な産物です。時

期・地域に大きな制約を受けていました。つまり時代性・地域性が製作者を通じ、模様として、形として土器に表わされました。土器に表わされた模様や形、大きさなどには「時代」「地域」という鍵が隠されているのです。これらを解きほぐしてゆけば、この土器はあの土器より古い・新しいということが分かり、突き詰めてゆけばこの土器は○○地域の□□頃の土器だということが分かります。これが型式学的研究法に基づいて作り出された土器の編年網です。

Ａ地域で製作された土器がＢ地域で出ることがあります。また逆の場合もよくみられます。この比較によってＡ地域のどんな土器とＢ地域のどんな土器が同じ時期に作られたかが分かります。この繰り返しが細かい編年網の整備につながります。こういった方法を交差年代決定法（クロスディティング）と呼んでいます。さらに実年代の分かる資料（製作年代の書かれている鏡や、製作年代が短期間であることが分かっている貨幣（新で王莽が作らせた貨泉など））や、年輪年代法で切り倒された年代が判明する柱材・井戸枠・木棺などによって、一緒に出た土器のおよその年代が把握できます。

このように土器は「いつ」「どこ」を示すものさしなのです。日本全国で弥生時代に限らずこの編年網は整備されていますが、もっと細かく「いつ」「どこ」を知るための研究は休みなく続けられています。

４．集落と墓地

弥生時代の集落を構成する要素について触れておきます（第２図）。

人々は基本的に定住を指向し、**竪穴住居**に居住していました（第5図）。このほかの建物としては、一部に倉庫としての掘立柱建物が認められます。県内約8000箇所の遺跡のうち弥生時代のものは約1000箇所です（1000遺跡の全部に調査の手が及んだわけではありません。未調査のものも多くあり、他の時代の遺跡と重なった複合遺跡も少なくありません）。調査の成果が公表されているものは129遺跡で、そこから発見された竪穴住居は2277軒ほどです。内訳は中期前葉以前０軒、中期中葉（須和田式）10軒、中期後葉（宮ノ台式）532軒、後期1106軒、末期（庄内式併行）455軒、不明174軒となります。129遺跡のうち中期後葉の竪穴住居が見つかった遺跡は40あり、1遺跡あたり平均で13.3軒、後・末期では114遺跡で13.7軒です。規模は中期後葉で大形のものが目立ち最大で101㎡、最小では6㎡、平均で27㎡、後期では最大で190㎡というもの（15頁第5図参照）がありながら最小は4㎡で、平均すると20㎡とやや小ぶりになる傾向が認められます。

掘立柱建物は10遺跡から40棟ほど見つかっています（第4図）。1×3間・1×2間のものが半数を占めていて、中期後葉と後期のものの数もほぼ同じです。竪穴住居に比べて一般的なものとは言い難いようですが、見つけるのが困難なこともあり、もうすこしたくさんあったのかもしれません。

居住域の外側は**環濠**を巡らしたり、崖などの自然によって遮られていることがよくあります。集落全体を調査できるようなことは希で、遺跡の範囲は落ちている土器や地形から推定するしかありません。

長期定住であれば必然的に構成員の死に見舞われることでしょう。その場合、一般的な墓は**方形周溝墓**です（第3図）。中央の主体部には家長を埋葬したかも知れませんが、周囲の溝にも多くの埋葬例が確認されていますから家族墓と言ってもよいでしょう。方形周溝墓は120遺跡から約800基ほど見つかっています。内訳は中期後葉で約250基、後期240基、古墳前期80基、時期不明230基です。方形周溝墓は単独で築かれることは少なく、ある程度の規模をもつ集落では、居住域に近いところに設けました。

5．神奈川の地域区分

神奈川は旧国でいうと相模と武蔵の一部（久良岐郡・都筑郡は横浜市の大部分、橘樹郡は川崎市に相当します）からなっています。今回の講座では、相模を西相模・東相模・三浦半島の三地区に分けたものに横浜・川崎を加えた四区分としました。西相模は酒匂川流域の足柄平野と相模川右岸の平野部および大磯丘陵・秦野盆地と起伏に富んでいます。一方東相模は相模川左岸の平野部と高座丘陵からなっており、弥生時代中期・後期を通じて海老名・綾瀬より北側には遺跡はほとんど見られません。三浦半島は房総半島とのつながりが古くからあり、弥生時代後期でも極めて類似した土器（東京湾沿岸様式＝弥生町式）を作っています。横浜・川崎は沿岸部では三浦半島・東京都臨海部・千葉県と類似した土器（弥生町式）を作りますが、北西部の丘陵では埼玉県北部や群馬県に通じる土器（朝光寺原式）を作った人々がいました。西相模では相模湾沿岸様式と呼ばれる土器を作っていましたが、東相模ではこれに加えて東京湾沿岸様式の土器も少なからず認められます。また朝光寺原式土器を使っていた人々の村には必ずといってよいほど弥生町式土器も出土します。このような状態の中でさらに遠隔地の土器がどのようにして入ってきたのかが本日のテーマの核心に触れる問題となります。

6．まとめ

縄紋から弥生へとか、弥生から古墳へとか、時代の代わり目・節目には、「なんで時代が代わったのか解明してごらん」と私たちに訴えるものが多くあります。

２・３世紀の東アジアは揺れていました。倭国大乱で日本列島も揺れていました。近畿・東海地方で弥生時代中期に見られた土器の小地域分布圏という様相は、関東では若干遅れて後期になって認められます。「アメリカがくしゃみをすると日本は風邪をひく」などとかつて言われましたが、まさに大陸・半島の荒れた動向が玉突き現象として関東にも押し寄せてきたのです。

歴史を考えてゆくにあたって、世界とかアジアとか東アジアといった大きな枠を持つのは重要なことです。考古学においてこのような枠組みを作り上げてゆくのは、小さな１遺跡の調査の積み重ねにほかなりません。

多くの遺跡が調査されてきました。そしてその資料を注意深く観察し、比較検討を行なってきた方々がいます。それにのっとって社会復元の仮説が提示されるようになります。地道な作業の積み重ねといってよい研究方法です。一方で、一歩退いて、やや広い地域を対象とした研究を汲み取り、地道な研究成果に方向性・彩りを加えて行くことも大切なことです。

神奈川においては「邪馬台国」という響きは天使の誘惑であり、悪魔の囁きでもあります。一足飛びに邪馬台国に至る道はありません。何事も一片の土器から始まるのです。本日はこれから登壇される方々によって一片の土器から始まった物語の途中経過を皆さんにお聞かせできることと思います。

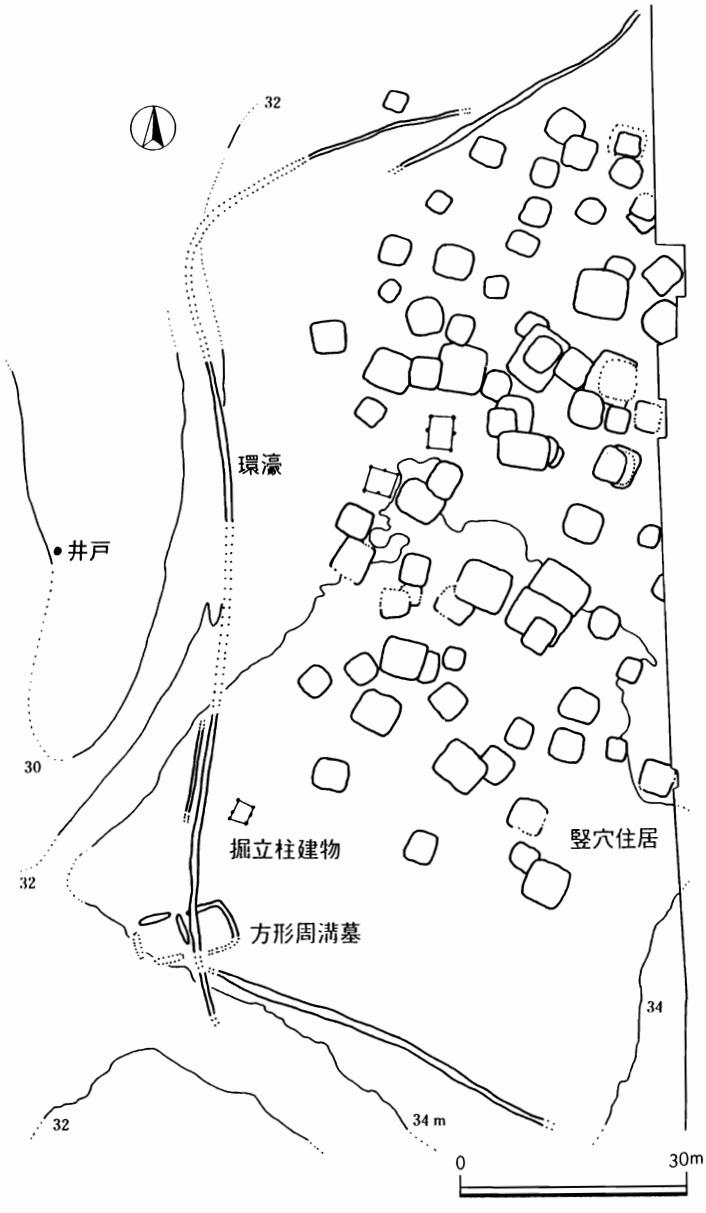
関連文献

西谷　正編　1984『季刊考古学 6 特集：邪馬台国を考古学する』
都出比呂志・山本三郎編　1990『邪馬台国の時代』木耳社
国立歴史民俗博物館編　1991『歴博フォーラム 邪馬台国時代の東日本』六興出版
王　金林　1992『邪馬台国と古代中国』学生社
甘粕　健・春日真実編　1994『東日本の古墳の出現』山川出版社
神奈川県立埋蔵文化財センター　1990～1995『かながわの考古学』1～5

第1表　年　表

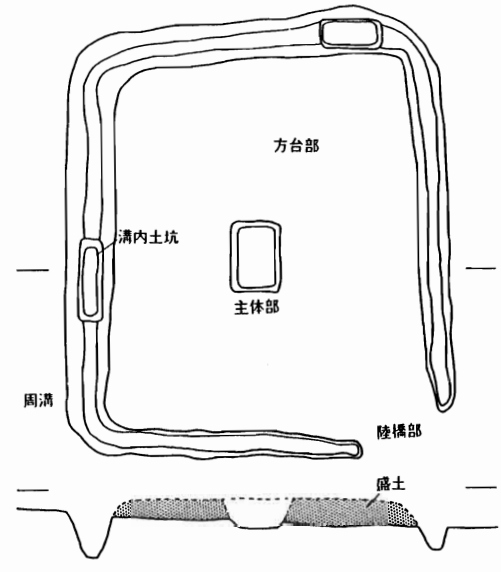
世紀	西暦年	日本列島	朝鮮半島	中国大陸	その他の地域
紀元前3	202			劉備（高祖）、漢建国～8	
紀元前2	195		衛氏朝鮮～108		
	154			呉楚七国の乱	
	128		漢、蒼海郡設置		
	108		衛氏朝鮮滅　漢、楽浪・真番・臨屯郡設置		
	107		漢、玄菟郡設置		
紀元前1	97	この頃から弥生中期		司馬遷『史記』	
	82		真番・臨屯郡廃止		
	75		第二玄菟郡設置		
紀元1	8			王莽、新建国～23	
	12		高句麗、下句麗と国名変更される		
	25			劉秀（光武帝）、後漢～220	
	27				ローマ帝政
	57	奴国王に光武帝より金印			
	96				ローマ帝国全盛（五賢帝）～180
紀元2	105～6	この頃から弥生後期	第三玄菟郡設置		
	107	倭国王帥升等遣使			
	147～189	倭国大乱			
	184			黄巾の乱	
紀元3	201			曹操、華北支配	
	204		公孫氏、帯方郡設置		
	208			赤壁の戦	
	220			三国時代～265	
				曹丕（文帝）、魏建国～265	
	221			劉備（昭烈帝）、蜀漢建国～263	
	222			孫権（大帝）、呉建国～280	
	226				ササン朝ペルシャ
	234			諸葛亮（孔明）没	
	238		公孫氏滅		
	239	卑弥呼、最初の遣魏使			
	240	帯方郡使梯儁訪日　帰りに遣魏使（2）		魏正始年間～249	
	242		魏、高句麗攻		
	243	遣魏使（3）			
	244		魏、高句麗攻		
	245	魏帝より黄幢授与	魏、高句麗攻		
	246		三韓の反乱		
	247	帯方郡使張政黄幢を渡しに訪日　遣魏使（3）　邪馬台国、句奴国と交戦			
	248	卑弥呼没、邪馬台国乱れる、壱与即位　張政帰国に際して壱与最初の遣使			
	260頃	この頃から古墳前期		竹林の七賢人活躍	
	265			司馬炎（武帝）、晋（西晋）建国～318	
	266	壱与？、西晋に遣使			
	280			呉滅	
	300			八王の乱	
紀元4	316			五胡十六国時代～439	
	318			司馬睿（元帝）、東晋建国～420	
	320				インドクプタ朝

参考　礪波　護・武田幸男 1997 『世界の歴史 6 随唐帝国と古代朝鮮』中央公論社

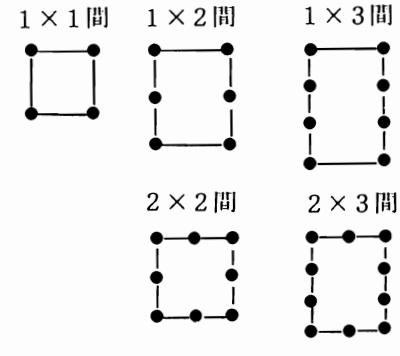


第2図　環濠集落の例 [S : 1/1,000]

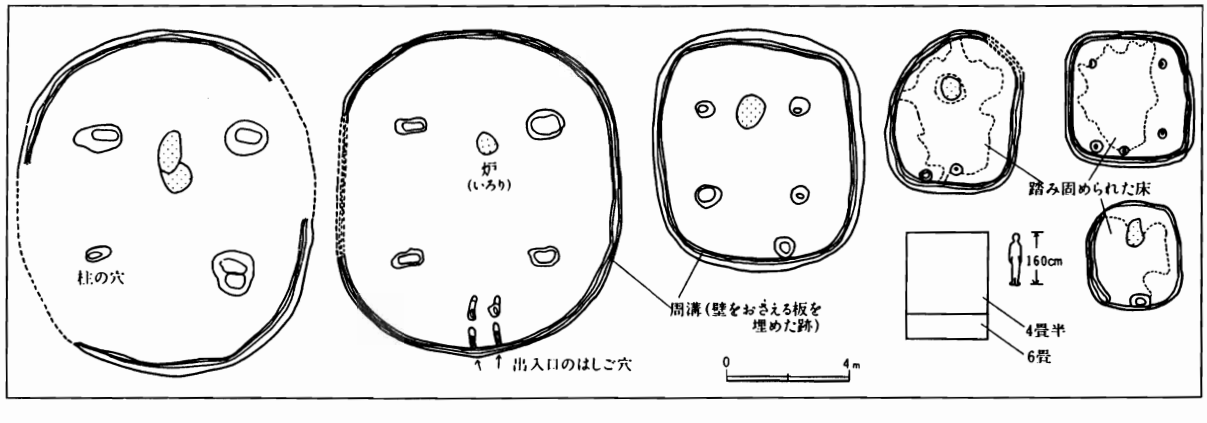
（慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡）



第3図　方形周溝墓模式図



第4図　掘立柱建物の類別



第5図　竪穴住居址模式図

入門講座２

西相模の弥生時代後期の社会

西川修一

１．はじめに

弥生時代は列島において基幹産業として農業を志向するようになった時代ですが、別の視点では縄紋時代の「東高西低」傾向が反転し、「西高東低」傾向が確立した時代とも言うことができます。弥生時代以降の列島の歴史は、この農業志向が産業の第一の座を明渡す近代社会に至るまで、常にこの構造的特徴を持続してゆきますので、これは列島の歴史上重大な変革であったとも言えそうです。

ただしこの事は「列島の東半分の歴史解明はなおざりにしても良い」ということを意味しないと思います。列島西半分の社会にとって、大陸・半島の情勢に敏感である必要と同時に、背後の東日本といかに係っていくかが、大切な案件だったと推定されます。

魏志倭人伝に、本県のことはきっと描かれていないのでしょう。しかし邪馬台国がどこにあったか？狗奴国はどこか？と、前記の問題は次元の異なる事柄です。未だ発見されていない遺構・遺物が見つかり、考古学的に所在地論争に決着を付ける日はいつか来るかもしれませんが、それでこの変革期の問題が全て氷解するわけではありません。考古学の採るべき態度は、古い文献の解釈に遺構・遺物を都合よく合せることではないはずです。

弥生・古墳的社会の東日本への波及。その過程において前期には伊勢湾岸、中期には鬼怒川水系、後期には天竜川に大きな考古資料の「文化的ヒアタス＝断絶」があります。そして次にくる「ある大きなインパクト」を受けた地域こそ、ここで問題とする２世紀代頃の相模湾岸であると思われます。

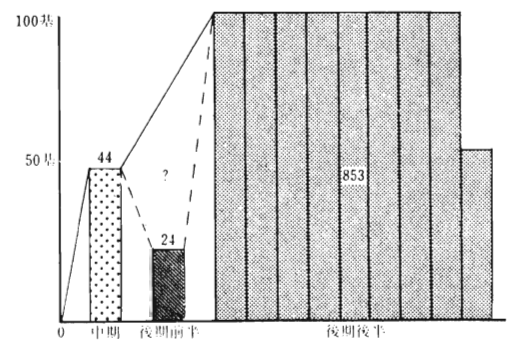
２．遺跡分布の傾向

縄紋から弥生時代への「発展」、弥生から古墳時代への「転換」は、決して右上がりの単純な「成長」であったのではありません。時代が新しくほどムラの数が増えるといった図式も当てはまりませんし、まんべんなく広がっているわけもありません。大磯丘陵・秦野盆地・相模野台地には、ほとんど弥生～古墳時代の遺跡は見つかっていませんし、住居の増加も時期より強弱があります。

本県では縄紋時代の終末ころの遺跡数は極めて少なく、それに続く弥生時代の前半期も人の生活痕跡は極めて希薄です。弥生時代中期後半期には、大規模な農耕集落が忽然と姿を現しますが、後期以降には「人口爆発」としか理解しようがないような遺跡・遺構の増大傾向が確認できます（第１図）。

相模湾岸後期以降の集落の増大は、前代のムラが発展していったのみでは理解できないと考えています。再び「人の流入」があったと考えられます。

相模低地に面する台地先端部に、新たに次々と集落が営まれていった光景が想定されます（第２図）。ここに大きなエポックがありそうです。



1980年代までの資料に基づいていて、いささか古いデータである。例えば多くの中期後半の住居を調査した秦野市砂田台遺跡は含まれていないが、同様に後期以降の遺構数も報告例が増えており、自然増のみとは判断し難いという大勢は変化していないだろう。（西川1991より転載）

第１図　県西部の弥生時代住居数の増大

3．土器様相と環濠集落の分布

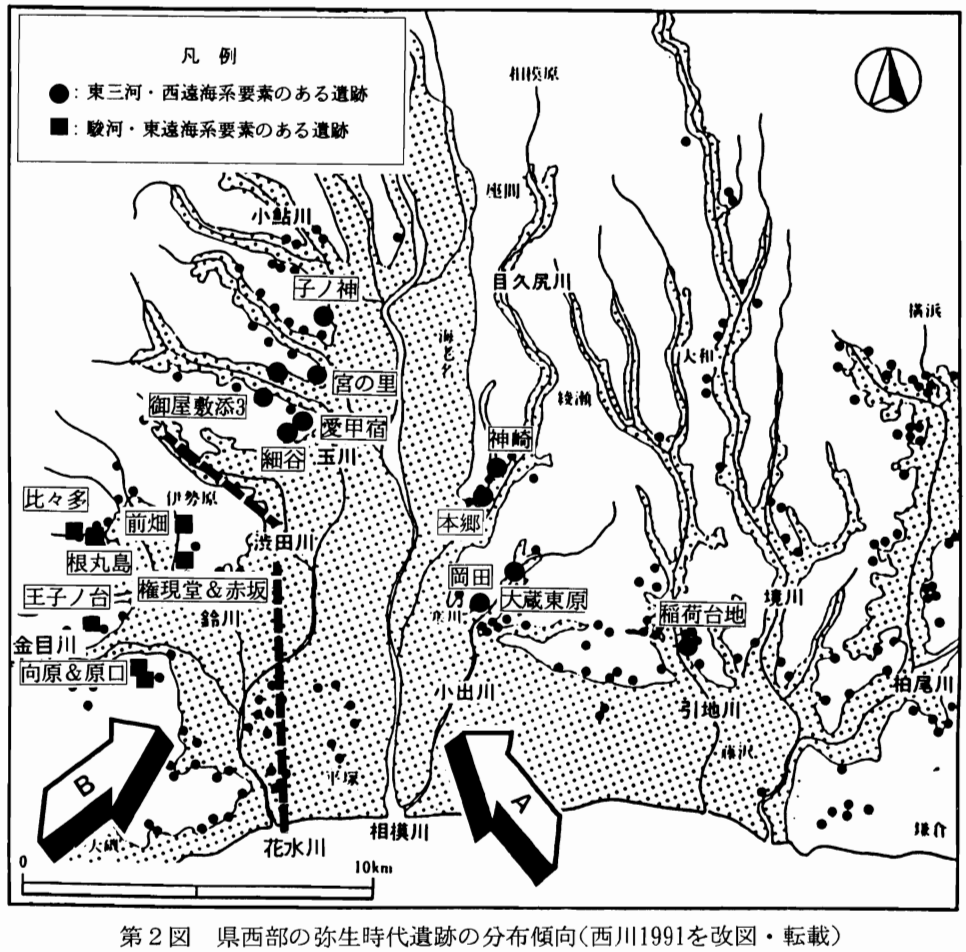
このような後期の集落から出土する土器には、一定の傾向があります。まずは愛知県の弥生後期の山中式 (新段階) と類似性の強い土器群である寄道・伊場式という愛知県東部から静岡県西部 (東三河～西遠江) の土器そのものや、類似品を少なからず出土する遺跡 (**タイプ①**・第３図)。西相模で普通に存在する「ように見える」土器がほとんどの遺跡 (**タイプ②**・第４図)。次に両者が混在し、どちらとも言いかねる遺跡 (**タイプ③**)。この三とおりに大別可能でしょう。

そしてその土器による集落タイプの分布にも、一定の傾向が見えてきています。タイプ①の遺跡は相模川の両岸 (第２図の**矢印Ａ**) に、タイプ②の遺跡は金目川水系に偏っているようです。厚木市子ノ神遺跡は③に類別できるでしょうか？

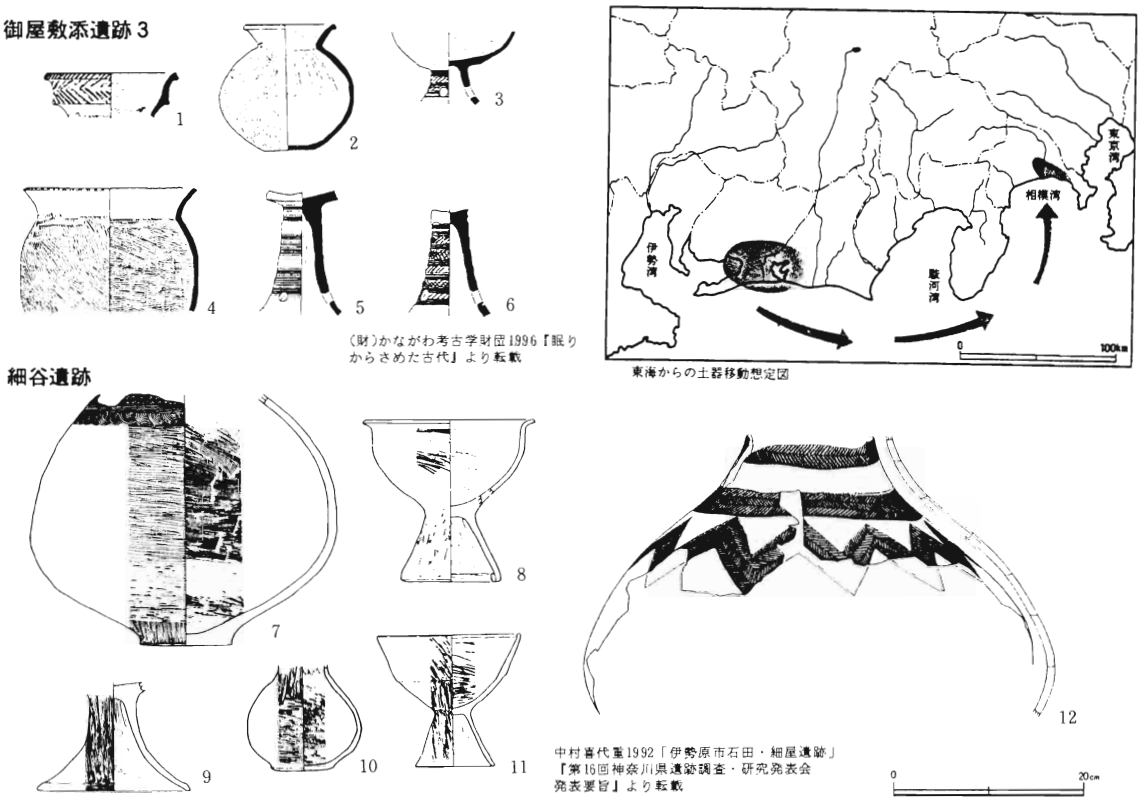
環濠の有無はどうでしょうか。傾向としてはタイプ①の多くは環壕集落であるようです。タイプ②の多くは非環壕集落であることも動かし難い事実です。しかし例外もあります (平塚市原口遺跡など)。少なくとも現段階の事例からは、環濠集落が大規模で求心的 (母ムラ的) で、非環濠集落は小規模で衛星的 (子ムラ) とは、言い難いのが実情です。むしろその逆の傾向が指摘できます。

まずタイプ①の土器を出す集団は「他所者集団」(移住者) で、見知らぬ土地に侵入した集団が防衛のため環濠を掘削したという仮説も浮上します。その場合はタイプ②が地元発展集団で、他所者が環濠を掘削したのは、これに対する「防御」であったと解釈するのも一案でしょう。

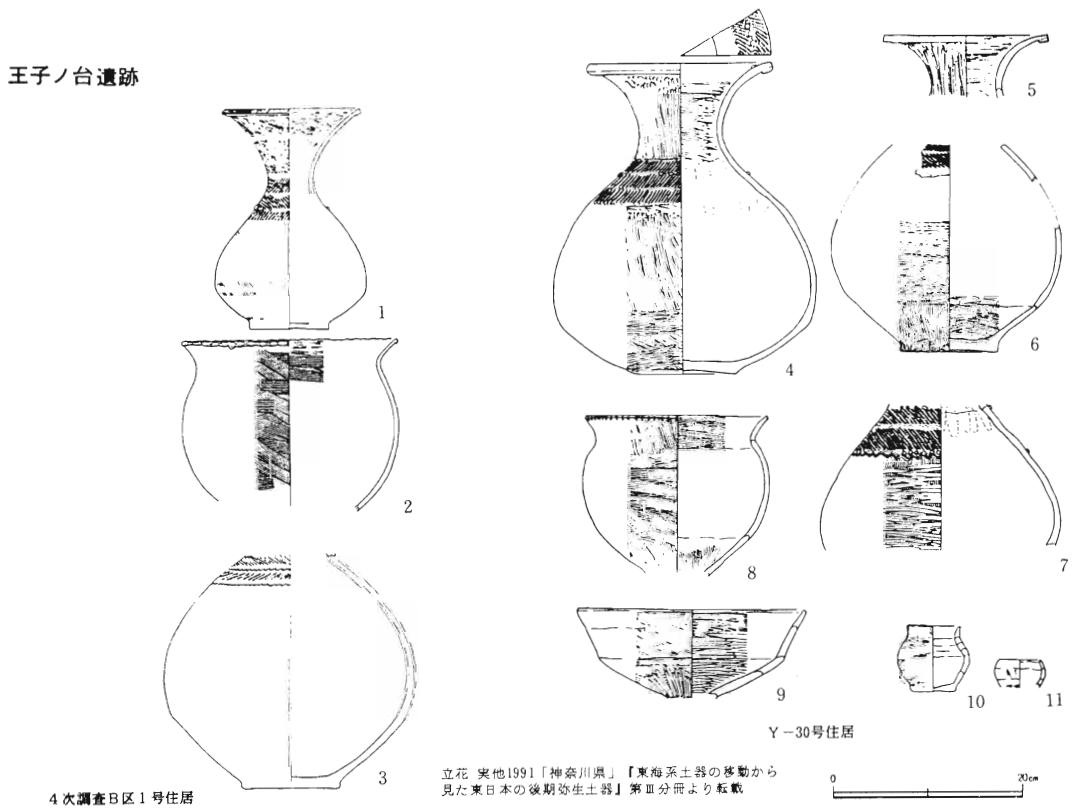
しかし事はそう単純ではありません。問題点の一つ目としてタイプ①には意外に三浦・東京湾西岸～藤沢・鎌倉あたりの土器 (広義の久ヶ原系土器) がリンクしている事実があります (例えば第３図 12)。２点目にはタイプ②も「単純に地元」と割り切れる存在ではないことです。前記の西相模で普通に存在する「ように見える」土器とは、実は天竜川以東の沿岸部から駿河湾までの



第２図　県西部の弥生時代遺跡の分布傾向（西川1991を改図・転載）



第３図　愛知県東部～静岡県西部系と関係深い土器群(タイプ①)



第４図　西相模在地あるいは静岡県東部と関係深い土器群(タイプ②)

静岡県東部地域 (東遠江・駿河) と強い共通性をもっています (具体的には菊川(きくがわ)、登呂(とろ)・飯田系。無論まったく同じではありません)。こちらにも相当数の「外来的要素」が関与しているのは、動かし難い事実です (第２図**矢印Ｂ**)。この土器様相は東京湾西岸～奥部から神田川・石神井川・荒川などの水系を遡り、武蔵野台地東縁～大宮台地南辺の遺跡群とも深く関わっているようです。

４．西相模の後期弥生社会

弥生時代後期後半には、多様な集団が西相模に関与しているらしい事は、ほぼ確実だと思われます。

ただし次の様な点で、世襲的・組織的な権力を備えた階級に君臨する者いて、軍事的に進出してきたとは考えられません。まずこれらの集団は、集落に近接して方形低墳丘墓(方形周溝墓)を営んでいますが、群集して累々と築かれており、集団から突出した権力者の墳墓と思われるものは、墳丘規模・副葬品からは窺い知ることができません (ただしタイプ①集団の墓域で、明確なものは未発見)。

また多くの環濠がその初期に開削され、短期間のうちに機能しなくなっている点も重要です。

武器・武具の発達も積極的に認めるだけの要素はありません。むろん金属器は繰り返し再利用されたと考えられますが、皆無なものをもって論じるには躊躇せざるを得ません。ただし３世紀代に入ると少数例ながら、墳墓の副葬品に短い鉄剣が見られるようになることは、「武器崇拝」の萌芽とも評価でき、見逃せない事実でしょう。

この段階の集団関係に、ある種の「緊張」はあったとしても、「侵略」「制圧」といった形容は相応しくないと私考しています。東海各地の集団の一部は、何らかの社会的要因により、人口圧の低い土地を目指し、再び東に展開してきたと考えられます。ある時期、相模湾岸はそのフロンティア (辺境) だったのではないでしょうか。環濠はその集団のもつ元々の文化的要素のひとつに過ぎないように感じられます。逆にタイプ①の遺跡では青銅製装飾品 (銅製指輪・腕飾等) が希薄な点も指摘できます。

西相模は東海西部集団と関係の深い東半分 (相模川右岸) と、東海東部と類似性の強い伊勢原台地以西 (金目台地～大磯丘陵) とが接する、「最前線」である可能性が高い地域とまとめられそうです。

(1997年１月６日)

主要参考文献

神沢勇一　1966 「関東」『日本の考古学 Ⅲ 弥生時代』河出書房新社
立花　実　1993 「相模おける東海系土器の受容」『転機』第４号
立花　実 他 1992 「資料紹介 平塚市春日原遺跡採集の遺物」『東海大学校地内遺跡調査団報告』３
西川修一　1991 「相模後期弥生社会の研究」『古代探叢』Ⅲ　早稲田大学出版部
比田井克仁　1993 「山中式・菊川式東進の意味すること」『転機』第４号

入門講座３

東相模の弥生時代後期の社会

田村良照

１．はじめに

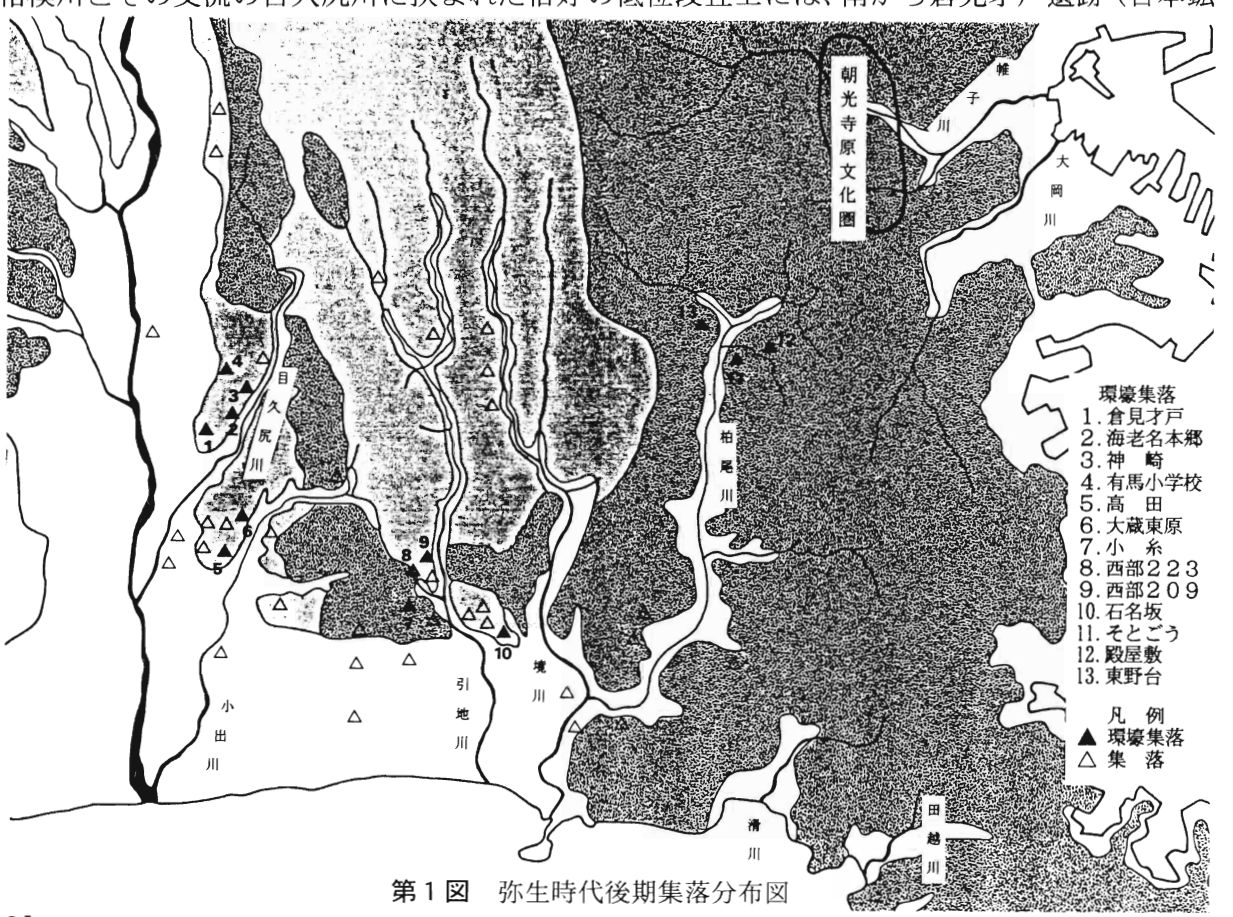
昭和59年の３月頃、私は今日の話の中にも出てくる横浜市戸塚区の殿屋敷遺跡の調査を担当していました。この遺跡では、弥生時代後期の環濠集落と方形周溝墓群で構成される墓域がセットで検出され、当時はまだ相模地域でこのような集落址の調査資料が少なかったこともあって、報告書を作成するにあたって大変苦労したことを覚えています。また、それまで弥生時代後期の土器型式は久ケ原式・弥生町式・前野町式という流れで極めて簡便に型式設定されていたのを、岡本孝之さんが「久ケ原式・弥生町式同時期論」を説かれたことから難しくなり、加えて、当時はまだ相模地域の土器様相が漠然としていたため、そこから出土した土器について考察する際に随分と悩んだものです。その後、相模地域では多くの後期集落が調査され、また若手研究者がリードする形で土器研究も進展したことから、10年前とは比較にならないほど弥生時代後期社会のあり方が分かって来ました。ここではそうした調査・研究成果を踏まえて、東相模地域の後期社会の動向を探ってみたいと思います。

２．集落の分布（第１図）

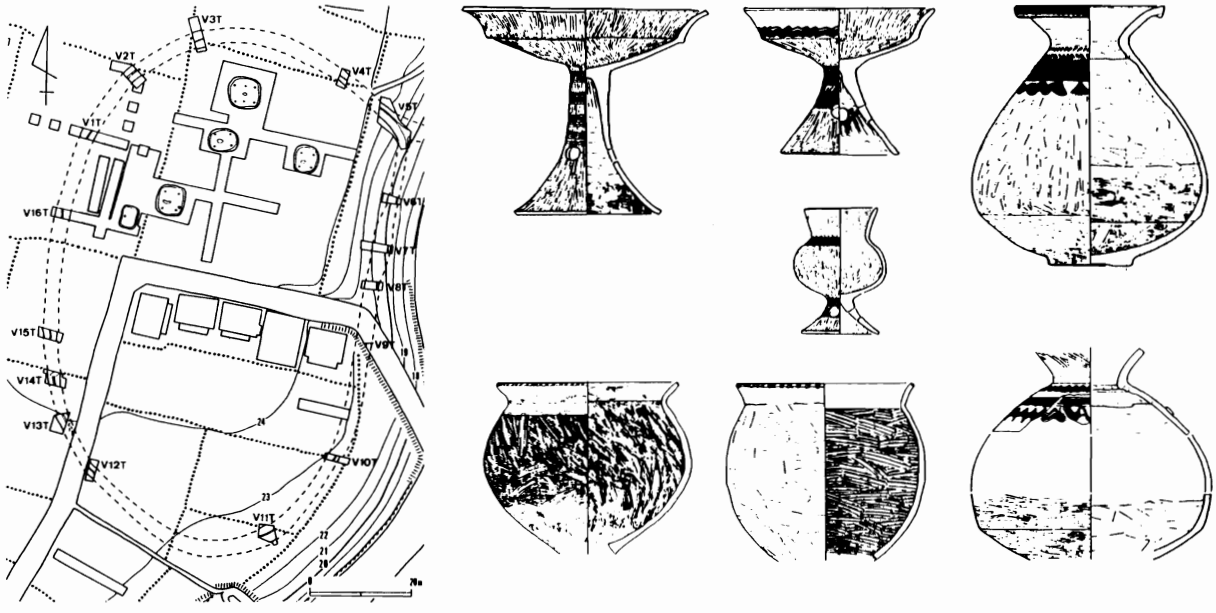
まず環濠集落を中心として、弥生時代後期集落の分布状況を各水系ごとに概観してみることにします。

①．目久尻川水系

相模川とその支流の目久尻川に挟まれた恰好の低位段丘上には、南から倉見才戸遺跡（日本鉱



第１図　弥生時代後期集落分布図



第２図　神崎遺跡

業ひかり社宅内遺跡)・海老名本郷遺跡・有馬小学校遺跡（本郷中谷津９次遺跡)・神崎遺跡　（第２図参照）といった東相模を代表する環濠集落が半径約1.5kmの範囲に分布しています。この他に相模川水系で４遺跡、目久尻川水系で１遺跡の後期集落が確認され、さらに両水系で８箇所の土器分布地が知られています。その中で相模川や目久尻川の自然堤防上に形成された海老名市社家3668番地遺跡・寒川町宮山遺跡・同大塚遺跡といった低地遺跡の存在が注目されます。

②．小出川水系

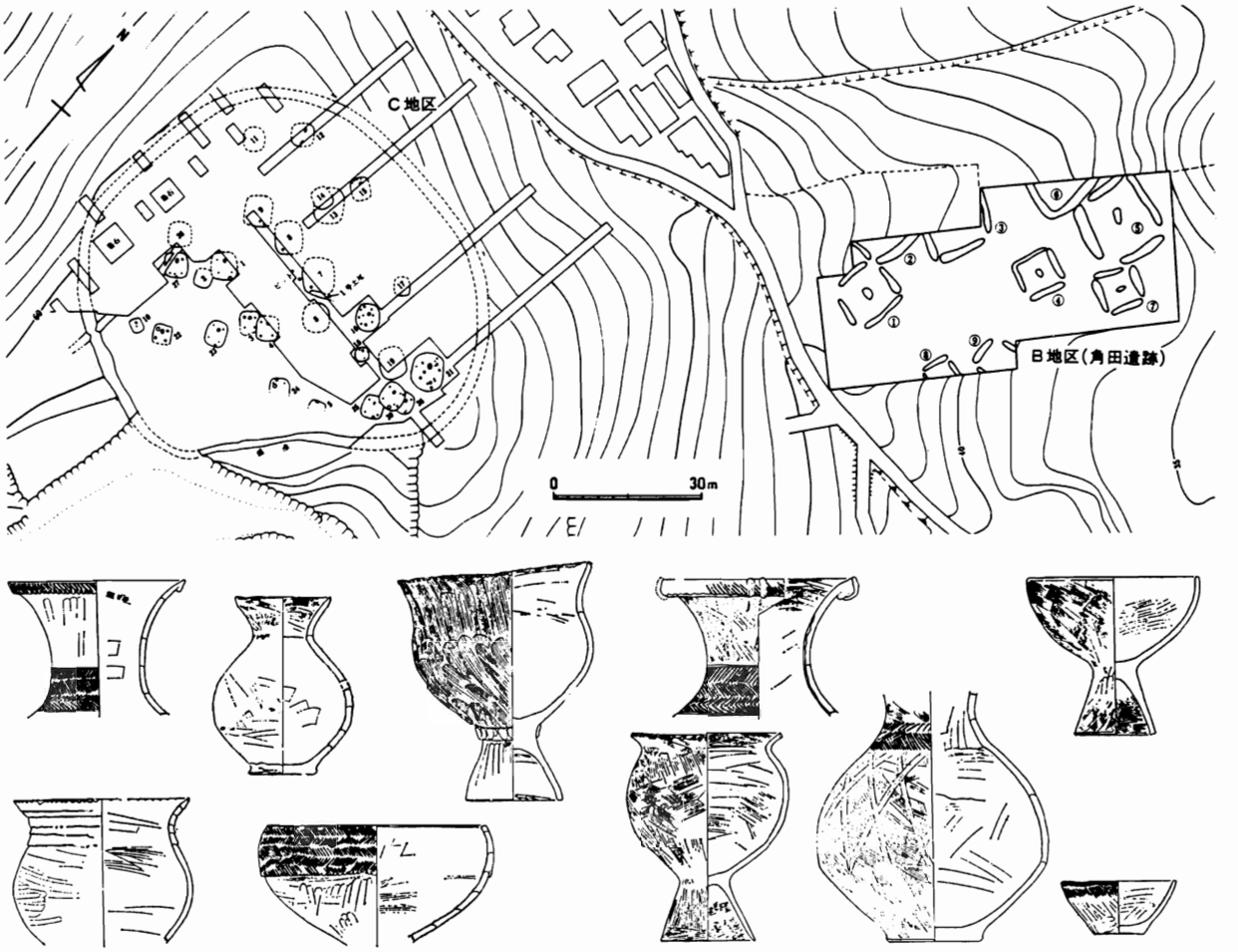
小出川と目久尻川に挟まれた相模川の氾濫原に突出する台地上には、寒川町岡田付近に高田遺跡・大蔵東原遺跡の環濠集落２遺跡が約700ｍの距離を置いて分布しています。両遺跡とも虫食い状の部分的な調査のため全容は把握されていませんが、環濠集落の北側に方形周溝墓群が検出され、集落と墓域の関係が捉えられています。特に高田遺跡は周辺域を広く包括した大規模な後期集落であると推測され、小出川水系の拠点集落と考えられます。また相模川の氾濫原に面した低位台地上には東海地方西部の土器が出土したことでいち早く注目された篠山遺跡などが分布しています。その他に、この水系では20箇所以上の土器分布地が知られていますが、その中の多くが寒川町岡田に集中しており、高田遺跡を核とする一勢力の存在したことがうかがわれます。

③．引地川水系

湘南砂丘に面した台地先端部付近に集中する傾向が見られます。まず右岸では小糸遺跡・西部209地点遺跡・同223遺跡などで環濠と見られる後期の溝状遺構が検出され、環濠集落になる可能性が高いと考えられていますが、実体は十分に明らかにされていません。この他に後期集落２遺跡が確認され、さらに15箇所の土器分布地が知られています。一方、左岸では稲荷台地と呼称される台地上に大規模な集落が展開しており、稲荷台地遺跡群と総称され、その中の台地南端部に位置する石名坂遺跡で環濠集落が調査されています。ちなみに、この稲荷台地上には1000軒近い弥生時代の竪穴住居址の存在が予想されており、相模地方で最大規模の弥生時代遺跡になるものと考えられています。その他には、上流の綾瀬市で２箇所、砂丘上で２箇所の土器分布地が知

④．境川・柏尾川水系

境川水系では上流の藤沢市高倉に２遺跡、柏尾川と合流する砂丘上に若尾山遺跡が存在し、その他に40箇所以上もの土器分布地が知られていますが、現在までに環濠集落は確認されていませられるだけです。



第３図　殿屋敷遺跡群Ｂ・Ｃ地区

ん。一方、柏尾川水系では上流に殿屋敷遺跡群Ｂ・Ｃ地区（第３図参照）・そとごう遺跡・東野台遺跡といった環濠集落３遺跡がまとまって分布しています。前二者はそれぞれ墓域を伴ったもので、特に殿屋敷遺跡群Ｂ・Ｃ地区は集落と墓域がほぼ把握された東相模を代表する環濠集落です。ところが中・下流域にかけては環濠集落は確認されておらず、下流の藤沢市・鎌倉市で手広八反目遺跡をはじめとして環濠集落をもたない小規模集落４遺跡が知られているだけです。これまで見てきた目久尻川・小出川・引地川水系とは少し様相が異なっていると言えるでしょう。ちなみに、低地遺跡である手広八反目遺跡は相模地域では調査例の少ない後期前葉の遺跡として注目されます。

⑤．滑川・田越川水系

後期集落は分布すると見られますが、調査例が少ないため実体は明らかでありません。

以上のことをまとめてみますと、まず目久尻川・小出川水系（相模川東岸域）と引地川水系では、相模川の氾濫原や湘南砂丘に面した台地の先端付近に集落がまとまっており、その中に環濠集落が形成されています。この２地域では、弥生時代後期を前葉・中葉・後葉の３期区分した場合、前葉の終わり頃にまず環濠集落が突如出現し、中葉には環濠の機能が停止して集落は解体へと向かう一方、中葉から後葉にかけて集落数は飛躍的に多くなり、海老名市・大和市あたりまで分布を広げます。そして後期終末から古墳時代前期にはさらに拡散するのです。ところがこの地域では、前葉の早い段階の集落は発見されていません。つまり、弥生時代中期と後期の間に断絶が認められるのです。研究者達はこの現象を進化論にならって「ミッシング・リンク」と呼び、

頭を捻っているわけです。しかし相模地域でも近年、沖積地や砂丘上の低地遺跡で予期しなかった発見が相次いでいるので、もしかするとこの時期の集落は調査のメスがほとんど入っていない低地部に隠されているのかもしれません。そうした点で今後は、低地遺跡の調査が大きな鍵を握っているように思えます。

次に境川・柏尾川水系では、特に集落の集中分布する傾向は認められず、柏尾川の上流域に冒頭で述べた殿屋敷遺跡Ｂ・Ｃ地区をはじめとする環濠集落３遺跡がまとまって分布するという、先の２地域とはだいぶ異なった在り方を示しています。何故、環濠集落がまとまってこうした所に存在するのか、実は13年前も現在もはっきりしたことは分かりません。しかし分布図を見ると東相模地域は環濠集落の分布を中心として３地域に分かれることから、それぞれが一つの地域社会を形成していたのではないかと考えられます。またこの地域では北東方向に朝光寺原式文化圏が存在していることも環濠集落成立の要因になっているのかも知れません。なお環濠集落の成立・解体、そして古墳時代に向かっての集落の動態は先の２地域とほぼ同様です。

３．土器様相

皆さんご承知のように、考古学では土器をはじめとする遺物が遺跡や遺構の時期を決める大きな手掛かりになります。特に土器は時代によって少しずつ変容するので、文献の無い時代ではタイムスケール（時間軸）として有効な手段となります。そうした意味で、集落の動向を研究する上で必須のものです。こうしたことから土器研究は昔も今も盛んに行われ、それによってここ10年で重要な成果が得られて来ました。冒頭に述べたように、殿屋敷遺跡の報告書を作成した時点では相模地域の土器について胸を張って語れる人はほとんどいなかったし、茅ヶ崎市篠山遺跡で出土した東海地方西部に出自をもつ土器について記載した1980年刊行の茅ヶ崎市史でも「もっとも近似した土器としては、遠江・三河地方のものをあげることができる。篠山遺跡出土の弥生時代土器が秘めた謎は大きい。」と、その後の調査・研究に下駄を預けた恰好でした。当時は弥生時代後期の相模の土器研究が緒に就いたばかりであったし、相模の土器に大きな影響を与えた東海地方の土器研究も進展していなかったので、必然的に限界があったのです。しかし現在では相模地方の土器研究が進展した結果、東京湾岸地域に分布域をもつ弥生時代中期の伝統を受け継いだ縄文施文土器（第３図参照）と駿河地方の土器が影響しあって相模地域に広く分布し、後期前葉の終わり頃になって新たに三河・西遠江地方から将来された櫛描文施文土器（第２図参照）と東遠江の縄文施文土器が新たに加わるという図式の描けることが分かって来ました。つまり東相模では後期になると東海地方からの新たな文化的影響を受け、とりわけ三河・西遠江地方の土器が顕著に認められるようになるのです。もっとも南関東の弥生時代文化はもともと東海地方の影響を受けて成立するのですから新たな文化が伝播したと考えることも出来るのですが、重要なことは相模川流域に後期の環濠集落が前葉の終わり頃に出現し、そこからは三河・西遠江地方に出自をもつ土器が主体的に出土するということです。東相模では目久尻川・小出川水系の環濠集落がこれに該当します。平成元年に調査された神崎遺跡では出土土器の90％以上がこの地方の土器で占められことから、この遺跡の調査以降、三河・西遠江地方から相模川流域に大勢の人々が移住し、その中心は目久尻川・小出川水系であると考えられるようになりました。またこうした相模川流域の動きに呼応するように、引地川水系と柏尾川水系でもほぼ同時期に環濠集落が造られるようです。ただし、引地川水系の環濠集落では縄文施文土器が主体的であり、さらに柏尾川水系では櫛描施文土器は全く認められません。したがって、この２地域では在来の集団が環濠集落を造ったと考えられます。

4．環濠集落から見た後期会

環濠集落は一般的に外敵からの攻撃を意識した防塞集落と言われていますが、東相模では環濠集落を調査しても集団間抗争の痕跡は全く確認されません。例え緊張関係はあったにしても集団間抗争の起こった可能性は低いと考えられます。それでは何故このような防御機能をもった集落が同時多発的に出現するのでしょうか。またどうしたことが原因で三河・西遠江地方の人々が集団移住して来たのでしょう。この点について近年、このような現象は相模地域に限らず、東海地方から近畿地方においても連動した列島規模の政治的な動きが背景にあり、しかもその発振源は近畿から東海西部にあるとして、「倭国大乱＝邪馬台国」を視座に入れた論考が考古学会を賑わわせています。こうした学会の動向は、もともと邪馬台国に興味を抱いて考古学の道に入った私から見れば大変興味深いのですが、すこし勇み足のような気がしないでもありません。

後期中葉に環濠集落は解体へと向い、後期後葉には集落から隔絶されたところに大型の墳墓が造られたり、古墳時代につながる首長の居館址が営まれるのです。柏尾川水系のそとごう遺跡では環濠の埋没が始まってから集落に近接した場所に、特定個人を葬ったと思われる大型の方形周溝墓が築かれるのです。つまり環濠が機能していた段階では集落外に集団墓地が造られていたのが、環濠集落の解体後に首長の台頭を象徴するような大型の墳墓が構築されるわけです。また同水系の東野台遺跡では環濠集落に近接する場所に古墳時代前期の古墳が築かれているもの、こうした社会動向と無縁ではないように思われます。

5．おわりに

東相模地域をまとめろと言われてにわか勉強したのですが、私には少し荷が重かったようで、雑駁で内容の無いものになってしまったような気がします。ここ数年、吉野ケ里遺跡・三内丸山遺跡といったところが脚光を浴びていますが、「相模地域の考古学も捨てたもんじゃないな、ひとつ自分も勉強してみようかな」と思っていただければ幸いです。

引用参考文献

岡本　勇　1980 『茅ヶ崎市史』３　考古　民俗編
松尾宣方・永井正憲 1984 『手広八反目遺跡発掘調査報告書』手広遺跡発掘調査団
田村良照・河合英夫　1985 『横浜市殿屋敷遺跡Ｃ地区発掘報告書』同調査団
小滝　勉・村上吉正　1992 『神崎遺跡発掘調査報告書』綾瀬市文化財調査報告２
比田井克仁　1993 「山中式・菊川式の意味すること」『転機』４号
立花　実　1993 「相模における東海系土器の受容」『転機』４号
合田芳正・及川良彦　1995 『海老名本郷遺跡』　同調査団
岡本　勇・小滝　勉　1996 『綾瀬市史』９　別編　考古
秋山重美・小山裕之　1996 『藤沢市稲荷台地遺跡群発掘調査報告書』同調査団
鈴木保彦　1996 『寒川町史』８　別編　考古

入門講座 4

川崎・横浜市域の弥生時代後期の社会

安藤広道

1．はじめに

「川崎・横浜市域の弥生時代後期社会について説明せよ」と一口に言われても、これはなかなかの難問である。我々人類の「社会」には、核家族から親戚一同、あるいは氏族・部族といった血縁的側面の強い社会、そして町内・村落などの地縁的側面の強い社会、さらにはそれらを横断する学校・企業といった、ある目的のもとに構成された社会など、実に多様な「社会」が存在している。我々が「我々」と思う人間同士の諸関係は、かくも複雑なものなのである。当然弥生時代にも、様々な人々のまとまりを作る諸々の関係が存在していたはずである。また、後で述べるように弥生時代後期の川崎・横浜市域に、どのような人々のまとまりが存在していたのか、あまりにもわからないことが多すぎる現状では、どのような性格・レベルのものであれ、当時の社会について説明することは難しい。

ただそれでは話が前に進まないし、講座にお集まりいただいた皆様にも申し訳ない。そこでここでは、一つの集落遺跡をムラという一つの居住単位とした上で、主催者側の要望でもあるムラを越えたより大きな地域社会、つまり弥生時代後期の川崎・横浜市域に、どのようなムラを越える人々のまとまりがあったのかという点について、現在わかる範囲のことをまとめようと思う。

2．集落群から見た弥生時代後期社会

ムラを越えた人々のまとまりを捉える方法には幾つかの方向性がある。ここではまずはじめに集落群そのものから読みとる方法から紹介したい。

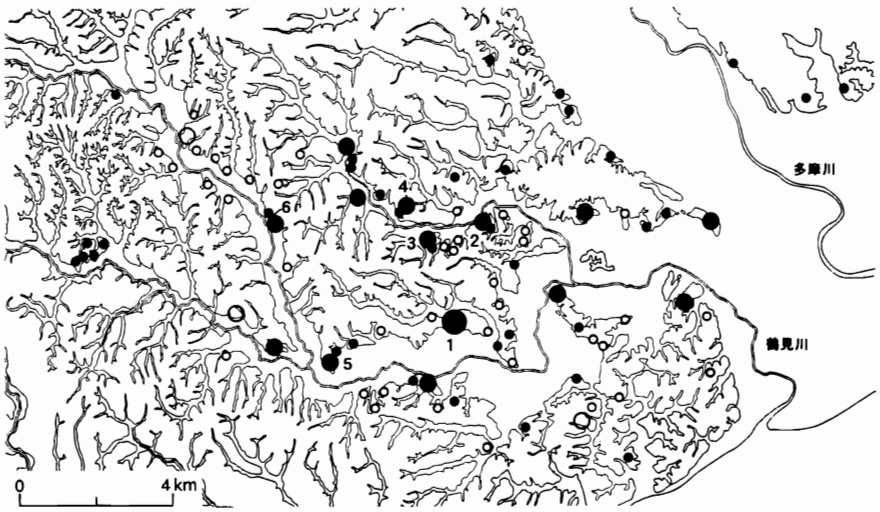
集落群の分析の第一歩は、同時に存在していたと思われる集落の分布を捉えることである。これは多くの場合、土器編年によって行われる。そして次に集落同士の内容を比較する。集落には規模の差ばかりでなく、環濠や巨大な住居跡などの特殊な遺構、希少性の高い遺物、さらには石器や金属器の製作に関わる遺物のある無しなど、内容による違いも数多く見られるはずである。

こうして描かれた集落遺跡の分布図が、人々のまとまりを捉えるための基礎データになる。例えば、特殊な遺構・遺物が集中する少数の集落の周りに、標準的な集落が多数存在するような分布が捉えられれば、特殊な集落を中心として標準的な集落が結びつく集落のまとまりを想定することができる。また中心となる集落に、特定の人物や集団の墓が存在していたり、石器や金属器の製作跡の集中などが見られれば、さらに積極的にその存在を評価することができるといった具合である。

筆者は以前、このような方法で、弥生時代中期後半の集落群の分析を行ったことがある（安藤1991）。そこでは、集落内外に大形の方形周溝墓を持つ集落を中心に、中小河川の流域程度の範囲に分布する集落群が、一つの社会単位になっている状況を読みとることができた。大形方形周溝墓を有する集落は、他にもその地域の中で最も大きな集落であること、最も古い時期から続く集落であることなどの特徴を併せ持つことが多い。

それでは、後期ではどうだろうか。川崎・横浜市域には500に近い数の後期の集落が存在するものと思われるが、結論から言えば、まだ中期のような集落のまとまりを見いだすには至っていない。

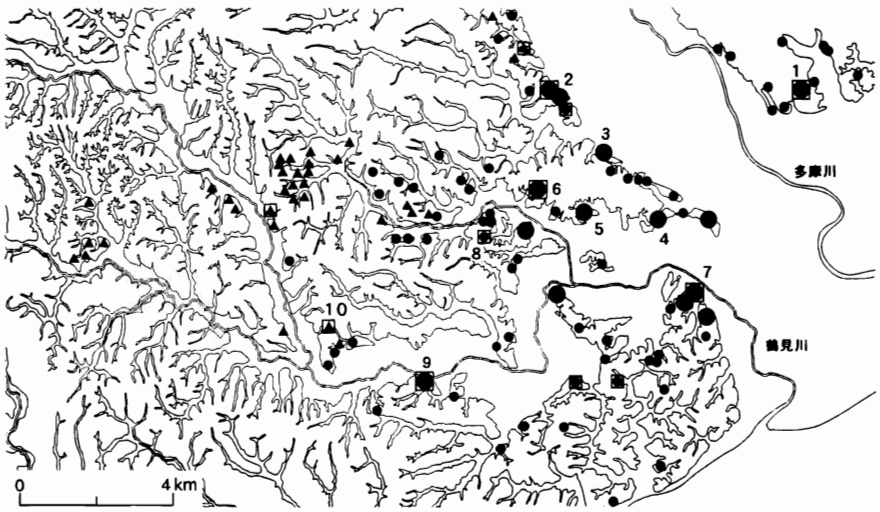
その原因の一つには、後期の集落遺跡の内容があまりにも不明瞭であることが挙げられる。例



●：環濠集落
○：環濠集落（未発掘）
●：小規模集落
○：小規模集落（未発掘）

1：折本西原遺跡
2：権田原遺跡
3：綱崎山遺跡
4：大塚遺跡
5：佐江戸宮原遺跡
6：朝光寺原遺跡

第１図　鶴見川流域・多摩川下流域の宮ノ台式期の遺跡



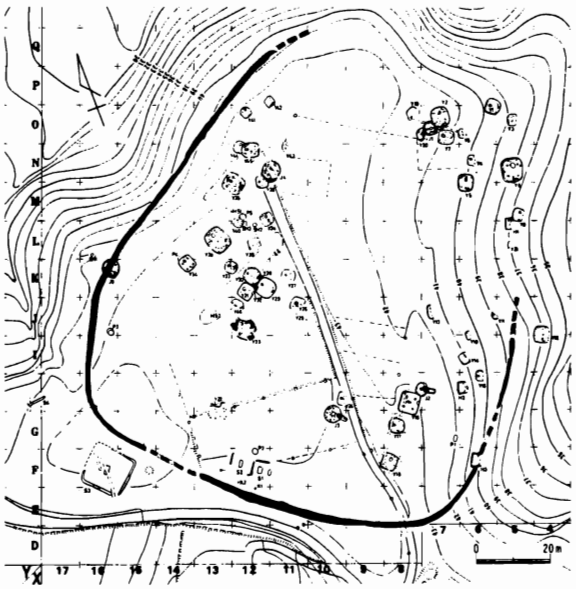
久ヶ原式土器主体の遺跡
●：大規模集落
●：小規模集落

朝光寺原式土器が目立つ遺跡
▲：小規模集落

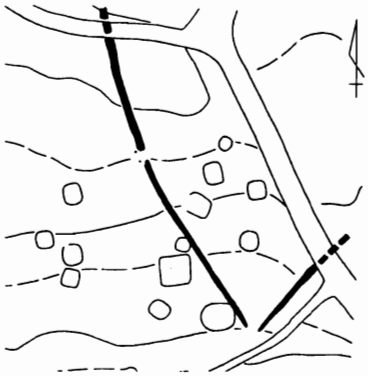
□：環濠集落

1：久ヶ原遺跡
2：影向寺・千年伊勢山台遺跡群
3：神庭・井田伊勢台遺跡群
4：日吉台・諏訪下遺跡群
5：森戸原遺跡
6：寺谷戸遺跡
7：江戸山・梶山遺跡群
8：大原遺跡
9：住吉神社・宿根遺跡群
10：四枚畑遺跡

第２図　鶴見川流域・多摩川下流域の後期の遺跡（後期終末を除く）



第３図　大原遺跡（1/2000）



第４図　四枚畑遺跡
（1/2000）

第５図　森戸原遺跡の
巨大な住居跡
（1/2000）

えば中期後半の集落の分布の中心は、広い範囲の発掘がなされた港北ニュータウン地域に重なることもあり、遺跡の内容が細かく捉えられたのに対し、後期の大集落が集中する多摩川・鶴見川下流域では、影向寺遺跡、梶山遺跡など、少なくとも後期後半には面積が数万㎡に達する巨大な集落が軒を連ねているにも関わらず、いずれも調査が部分的であり、その全体像を捉えるには至っていないのである。

また、川崎・横浜市域の後期の場合、弥生時代の集落研究において、集落群の中心・拠点として位置づけられることの多い環濠集落や巨大集落を、単純に地域の中心・拠点として扱うことができそうにない点も問題を複雑にしている。例えば中期後半の鶴見川・早渕川流域では、ある程度の規模を有した集落は全て環濠集落という形態をとっており、また折本西原遺跡のような中心的集落は、大規模というだけでなく、他の集落には見られない遺構・遺物の特徴を兼ね備えていた。しかしながら、後期になると大集落＝環濠集落という図式はあてはまらず、環濠集落あるいは大集落の中心性を際だたせるような特殊な遺物・遺構の存在も、現状でははっきりしないのである。もちろん特定の集落だけが何故環濠を巡らし、あるいは巨大化したのかという問題は残るが、現状において環濠集落・大規模集落の特殊性を強調しすぎることには慎重にならざるを得ない。つまり後期の場合、どのような特徴を持つ集落を集落群の中心として考えるべきか、この根本的な問題が未だ解決されていないのである。

ただし、多摩川・鶴見川下流域の巨大な集落群を見る限り、これらの地域に相当の人口が集中していたことは間違いなく、その地域あるいはより広い地域をまとめる中心がどこかに存在していたとしても何等不思議ではない。また、中期における鶴見川・早渕川流域の大集落群は後期初頭に突如として廃絶されるが、その背景には多摩川・鶴見川下流域への集団全体の移動も想定可能である。その場合、移住集団の規模は、2,000人以上に達していたものと思われる。そしてこのような大集団が一斉に移動したとすれば、移動前の社会関係が解体へ向かったとは考えられないだろう。

また、古墳時代前期になると、多摩川・鶴見川下流域には、観音松古墳・白山古墳といった大形の前方後円墳が形成される。このことはその前の時期に、その母胎となる地域の中心が存在していた可能性を示唆している。つまり、集落自体の分析からは未だはっきり読みとることはできないが、その直前・直後の状況を見るかぎりでは、やはり中小河川流域程度あるいはそれを越える範囲のムラムラが結びついた社会が存在していた可能性は高いように思われる。

集落の研究から筆者が言えることは、残念ながらこのくらいである。

3．土器の分布から見た弥生時代後期社会

ムラを越えた人々のまとまりを分析する材料は、集落遺跡だけとは限らない。例えば考古学者が様々な遺物・遺構に対して設定する「型式」は、その「型式」を製作あるいは使用する人々のまとまりを背景に持っている。つまり「型式」もムラを越えた社会関係を検討し得る手がかりの一つになる可能性を持っているわけである。

ただ、ここで注意しなければならないのは、そこで想定される人々のまとまりが、何らかの社会関係と接点を持つとは限らない点である。人々を取り囲む多くの文物あるいはそれを構成する諸属性の形を決定あるいは変化させる要因・背景は実に多様であり、当然中には社会関係を強く反映したものもあれば、全く反映しないものもある。しかし「型式」は、たいていの場合、このような要因・背景を考慮せず、あくまでも我々の尺度で分類した結果として設定されるため、「型式」が示す人々のまとまりをなかなか意味のある集団として位置づけられないでいるのである。

土器型式は「型式」の代表選手とも言えるものであろうが、土器という一つの言葉にまとめられるものであっても、その形や模様を決定あるいは変化させる要因・背景は多様だったはずであ

る。したがって各地で設定されている土器型式が、それぞれ同様の人々のまとまりを背景に持つと考える必要はないわけである。しかしながら一方で、土器型式がある種の社会関係と一対一の関係になることもないわけではない。土器の形態が、その社会関係の象徴としての意味を有していた場合などでは、土器型式の設定当初においてその点が考慮されていなくとも、偶然ある種の社会関係と一致することは十分考えられるのである。そして南関東地方の弥生時代後期の土器には、このような一致を見せる土器型式が幾つか存在しているように見えるのである。

弥生時代後期の南関東地方では、宮ノ台式土器の流れをくむ久ヶ原式土器の他に、東海地方や中部高地などの系譜を引く土器型式が成立する。と同時に久ヶ原式土器の中にも地域差が明瞭になりはじめ、南関東が土器の形態差によって幾つもの地域に分割される状況を見て取ることができる。そしてこの小地域の土器群で注目されるのが、時に隣接地域の土器であっても、その全体あるいは一部の属性に対して強い排他性を持つことが多い点である（安藤 1996）。

川崎・横浜市域に分布する久ヶ原式土器と朝光寺原式土器の間にも、この土器の形態上の排他関係が明瞭に現れている。久ヶ原式土器と朝光寺原式土器は、川崎市域・横浜市域北部にそれぞれ分布の中心地を持ちながらも、両者の中間地帯においてはどちらが主体とは言えないような状況で混在しつつ出土する。このように両型式の制作者集団は、密接に交流を繰り返していたことは間違いないのであるが、その一方で土器の形態の上では、いわゆる折衷土器が生み出されることなく、明確に互いの要素を排除しつつ両者の系統の中で変化し続けるのである。

当時の土器が、一般のムラ人たちによって作られていたものとすれば、この密接な交流がありながらの強い排他性の背景に、それぞれの土器を作る集団へ帰属意識が強く働いていたことは間違いないものと思われる。土器制作者が自らを同じ土器を作る集団の一員と考える意識が、どのような社会関係を背景に生じていたのか、具体的なことは全く判らない。しかしながらそこに、他集団の土器とは違う、同じ土器を作る人々のまとまりとしての「社会」が存在していたことだけは確かなのである。

引用参考文献

安藤広道　1991　「弥生時代集落群の動態－横浜市鶴見川・早渕川流域の弥生時代集落群を中心に－」調査研究集録　第８冊　横浜市埋蔵文化財センター

安藤広道　1996　「南関東地方における「台付甕形土器」の展開」『鍋と甕そのデザイン』第４回考古学フォーラム

入門講座５

三浦半島の弥生時代後期の社会

中村　勉

１．三浦半島の位置

三浦半島は神奈川県南東部に位置し、県内で唯一海に囲まれた土地である。半島の西は相模湾を隔てて伊豆半島を望み、東は東京湾、さらには浦賀水道をはさんで房総半島を目の前に眺めることができる。また南は相模灘をへて遠く大島をも視界に入れることができる。

三浦半島の範囲をどこにおくかは、きわめて地理学的考察が必要となるであろうが、ここでは逗子市・葉山町・横須賀市・三浦市の通常『三市一町』とよばれる行政区分に従うことにする。この範囲における三浦半島の面積は約167ｋ㎡で、神奈川県に占める割合は、わずか７％ほどにすぎない。半島は南北幅は最大で約21㎞、東西幅の最も広い部分で約15㎞、逆に狭い部分では2.8㎞ほどである。地形的には逗子市から横須賀市にかけては、二子山 (標高208m)、大楠山 (標高242m)、武山 (標高200m) の３列の山並みがつくる複雑な丘陵地であり、横須賀市と三浦市との境から南にかけては標高標高50mほどの平坦な海蝕台地が広がり、その周囲には無数の浸蝕谷が発達している。

このように三浦半島は面積的にきわめて狭く、また平坦な土地も少ない。さらに大きな川も逗子市の田越川、横須賀市の平作川をあげるにすぎない。しかしこの半島の大きな特徴は、どこからでも海を眺めることができるということであり、また丘陵の高い所に登れば、周囲の海をすべて視界にとらえることができるということである。

２．遺跡の分布

三浦半島で発見されている弥生時代の遺跡は、およそ100ヵ所を数えることができる。これらの遺跡は逗子市では田越川流域、横須賀市では古久里浜湾周辺・小田和湾沿岸・鴨居湾周辺・北下浦沿岸、さらに三浦市では三戸海岸の背後にある台地一帯の６ヵ所にそれぞれ集中的に分布している。これらの遺跡の多くは20～50m以上の標高をもつ台地上にあり、周囲に湧き水のある谷戸をひかえる位置にある。そして何よりも特徴的なことは、いずれも海岸部に面した位置にそれぞれ分布していることである。また海岸部には、縄文海進時において形成されたとする海蝕洞穴が数多くあり、そのうちの数ヵ所に弥生時代の人々が利用した跡が残されているなど、三浦半島の弥生時代遺跡のあり方は海との関係を抜きにしては語れないものがある。

遺跡数を時期的にみると中期の遺跡は少なく、後期になって急激に増加している。横須賀市内では80％、また三浦市内では90％近くが後期に属する遺跡であった。このような遺跡数の増加は、集落内においても反映されている。横須賀市鴨居上ノ台遺跡では、中期に属する住居址が12軒、後期に属するものが84軒確認され、このうち中期は２時期に、また後期は大きく４時期にわけられると考えられており、相対的に集落内においても後期において住居が増加したことがわかる。この傾向は三浦市赤坂遺跡においても確認されており、中期宮ノ台期の住居数に対し、約３倍の多さをもって後期の住居址が発見されている。

遺跡の増加は標高100mを越えるような場所にまでその範囲を広げて、横須賀市大楠山山中にある大平遺跡や杉本遺跡など農業はほぼ不可能と思われる土地に遺跡が残されている。岡本孝之氏はこれらの遺跡を高地性遺跡として認識している。また、標高70～80mの位置にある横須賀市住吉遺跡や腰巻遺跡からは住居址も検出され狭い谷間を利用した小規模な水田経営も実施される

ようになったと考えられる。したがってこの時期に遺跡は水平的にも垂直的にも拡大していったことがうかがわれるのである。

台地上の遺跡数の増加と連動するように海蝕洞穴利用もきわめて活発化し、海蝕洞穴に特有なあの炭と灰の互層も後期の時期に形成され、この時期に農業や漁撈活動のピークがあったことを知ることができる。

3．後期に用いられた道具について

三浦半島での後期の土器は、口辺部に数段の輪積粘土帯を巡らし胴部をナデによって調整された甕形土器と、沈線によって平行あるいは山形に区画された内部を細縄文によって充填する文様を施文した壺形土器を基本的なセットとした所謂久ケ原式土器である。先記した上ノ台遺跡では、住居址の切り合いおよび住居形態から後期を少なくとも（A～C_2）の４つの小期に分割し、土器の漸移的変化をたどることを試みた。その結果、住居形態は楕円形Ａから円形Ｂ、さらに隅丸方形（C_1～C_2）へと変化し、それとともに甕形土器も基本的に最大幅が口辺から胴部へと推移していくこと、また壺形土器の文様も細縄文の他にＳ字結節あるいは網目撚糸文が新たに登場してくることなどが判明した。そして住居がより方形に近づくにしたがって、甕形土器の胴部調整に刷毛目を用いたものや、あるいは他地域のものと考えられる輪積粘土帯をもたず、器面すべてが刷毛目によって調整された土器が従来の甕形土器と共伴し出す。さらにＳ字口辺の甕形土器や高坏・器台など新しい器種も現われ、在地的土器と非在地的土器との混在化が一般化する。この時期をC_2段階とよび、一つの画期となる時期である。上ノ台遺跡での結果をその後新たに発見調査された遺跡と比較すると、いくつかの新しい見解を導くことができる。それは東京湾側での甕形土器は平底が主体であるのに対し、相模湾側では台付のものを多くみることができる。さらに壺形土器の器形において、胴下半部に稜を認めることのできるものがやはり数は少ないながら存在することである。このような器形をもつ壺形土器は、上ノ台遺跡ではみられないものであった。このように東京湾側と相模湾側とでは、土器のつくりに差があることが指摘できるのである。この甕形土器の平底の傾向は房総半島においても顕著にみられるものであり、一方、台付のものは相模湾沿岸から東海地方にかけて主体をもつ器形で、三浦半島内において二つの地域の影響が強く現われていることを知ることができる。

さらに三浦半島の弥生時代後期の特徴として、石器の消滅と金属器の普及をあげることができる。現在までのところ後期に属する石器の例はなく、この時期において大陸系磨製石器群は消滅したといってよい。一方、金属器の発見は数は少ないものの多様なものがある。鉄器に関しては鉄斧・鉄鏃・鉄剣・アワビオコシ鉤・刀子など、青銅器には銅鏃・銅環・銅釧・有鉤銅釧・釣針などがある。さらに海蝕洞穴から出土する骨角製品は、いずれもその器面に残された痕から、金属器による加工痕であることが指摘されている。また相模湾側にある溝尾遺跡での火災住居址から、東海系曲柄鍬の炭化したものが出土しているが、これらの木器の加工にも金属器の使用が考えられ、後期における金属器の使用はかなりの程度の普及をみていたと推測されるのである。

4．人々のくらしと祈り

後期における遺跡数の増加は、水稲耕作を中心として食料生産の一定程度の高まりを背景に生じたと考えられる。上ノ台遺跡、赤坂遺跡から検出された炭化米、あるいは溝尾遺跡から発見された木製農具などはそれを裏書きするものであろう。

三浦半島における集落の多くからは、網に使用されたと考えられる土錘が出土している。上ノ台遺跡からは、土錘の他に鉄製アワビオコシ鉤とよばれるものが出土している。民俗例から東北地方との関係の深いものであるといわれている。また赤坂遺跡からは、鹿角製と思われるヤスや

それに伴って魚骨や魚歯の検出が認められ、彼らのくらしのなかで農業以外に漁撈も主要な生業であったことがうかがわれるのである。漁撈に関して忘れることのできないことは、海蝕洞穴に残されたくらしの跡であろう。三浦半島に数多く発見されており、現在までそのうちの15の洞穴から、弥生時代の遺物を検出している。洞穴のひろさは４～５人程度の人々がやっと暮らせるほどの空間で、中に残された貝塚やそこから出土する遺物は、台地とはまた違った人々のくらしを伝えてくれる。ここではアワビ・サザエを主に採集し、また海鳥の捕獲も行なわれて、縄文時代の様相とは異なるものがある。アワビやサザエは明らかに潜水による採集が考えられ、魏志倭人伝中の「今倭の水人好んで沈没して魚蛤を捕え」という一節があるが、洞穴を利用した人々と倭の水人とがどう結びつくのか興味あるところである。洞穴内には鹿や猪の肩甲骨や肋骨に小さな点状の焦げ痕を残す占いについて、やはり魏志倭人伝中に「すなわち骨を灼きて卜し、以って吉凶を占い、先ず卜する所を告ぐ」という一文に紹介されている。弥生時代の卜骨は現在北海道から長崎県の範囲で発見されており、このような占い法が地域をこえて普及していたことは、この時代の精神文化が同質化の方向へ進んでいたことを知ることができる。

一方墓制についてみてみると、特徴あることが指摘できる。現在までのところ後期に属する方形周溝墓の例はない。この点は中期および古墳時代初頭に属する例があるところから、今後発見される可能性をもつものと推測される。それに対し横須賀市住吉遺跡や枇杷山遺跡で発見された再葬墓と考えられる土器棺、あるいは三浦市大浦山洞穴・雨崎洞穴などの洞穴内にみられる集骨墓がある。土器棺や集骨墓は中期から古墳時代初頭にかけてみられることから、両者とも伝統的な葬法といえるが、台地上と洞穴での葬法の異なりが何を意味するのか今後の課題ともいえる。

５．変わりゆく後期の社会

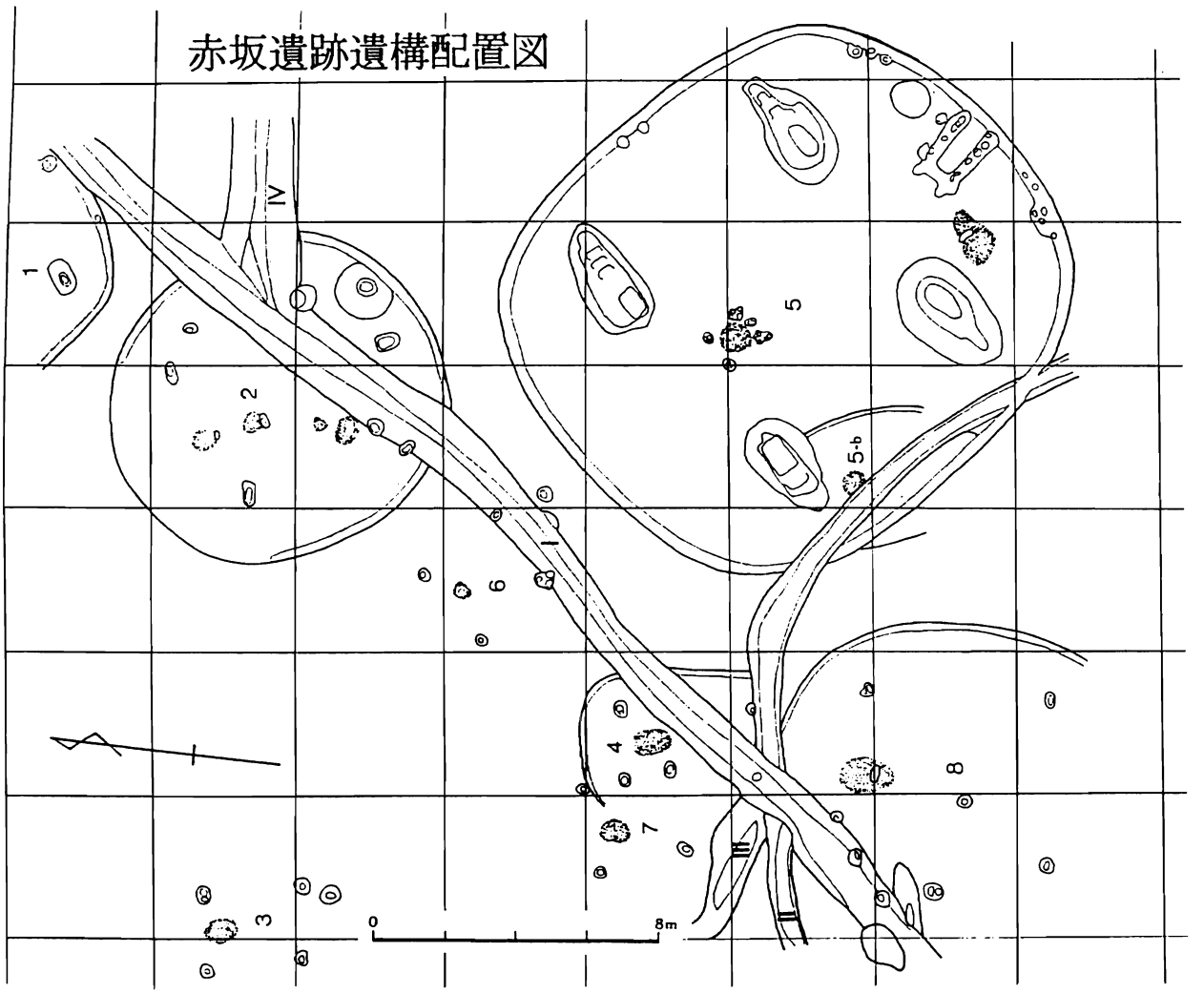
東京湾に望む上ノ台遺跡と相模湾を一望する赤坂遺跡とでは、同じ地域の中核的集落といってもその内容に違いのあることを指摘することができる。

後半にいたって赤坂遺跡では台地上に溝が構築され出し、それとともに住居がつくられなくなっていく。それに対し上ノ台遺跡では、古墳時代初頭にいたるまで集落が維持されるのである。赤坂遺跡で発見された溝は、台地各所に方向を違いながら数条あり、その幅・深さもそれぞれ異なる。そのうち最も規模の大きなものは、長さ50m、幅は最大1.7m、深さ1.4mを測り、台地から谷間にかけて構築されている。断面は台形で、溝中からはタタキ目をもった甕形土器片などが出土している。この溝が環濠とよばれるものかどうかは、面積的にまた溝の規模から今のところ判断を保留せざるをえないものがある。上ノ台遺跡でも土器の内容に変化が生じ、伝統的な器種のかわりに刷毛目台付甕・Ｓ字口辺甕・器台・高坏などが非連続的にセットとして使用されている。この新しい器種をみれば、いずれも相模湾さらにその西方にある所謂東海地方の影響をもったものであることはまちがいない。

三浦半島の後期の様相をながめてみるならば、次のようにいえるかもしれない。各遺跡群は、それぞれが面している方向すなわち西部の遺跡群は相模湾側の、また東部の遺跡群は東京湾および房総半島との関係を反映しているようにみえる。そして後期後半にいたってこの地縁的ともいえる関係が崩れ、それよりも遠くに位置する東海地方の影響が顕在化してくるのである。それに伴っての地域的混乱があったのかは今のところ不明であるが、大平遺跡や杉本遺跡を高地性遺跡と認め、赤坂遺跡における溝をそれと関連する性格と考えるのであるならば、相模湾側の遺跡群に一定の緊張関係が生じたのかもしれない。しかし少なくとも東京湾側においてその痕跡は認められないことから、この緊張はきわめて短時間のものであった可能性が高い。そしてその直後、三浦半島の東海化が進んでいく。

参考文献

赤星直忠　1953 「海蝕洞窟―三浦半島に於ける弥生式遺跡―」神奈川県文化財調査報告 20
持田遺跡調査団編　1975 『持田遺跡発掘調査報告　本文篇』逗子市文化財調査報告書第 6 集
井上義弘　1979 「南関東弥生時代の集落立地」『どるめん』23
神澤勇一　1979 「南関東地方弥生時代の葬制」『どるめん』23
上ノ台遺跡調査団編　1981 『鴨居上ノ台遺跡』横須賀市文化財調査報告書第 8 集
滝沢　亮　1984 「2．横須賀市溝尾遺跡の調査」相武古代研究 1
溝尾遺跡については、この他に稲村繁からの説明をうけた
中村　勉　1988 「第二編　農耕の開始と発展」横須賀市史上巻
岡本孝之　1991 「相模湾岸の高地性遺跡」湘南考古学同好会会報 42
山本暉久　1995 「付編一　池子遺跡群」逗子市史　別編Ⅱ
中村　勉　1996 「8．三浦市赤坂遺跡」第 20 回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨



入門講座６

高地性遺跡からみた弥生時代後期の社会

岡本孝之

１．はじめに

関東の弥生文化は歪んでいるという評価が森本六爾（1930）によって与えられ、坪井清足は弥生の意味を理解できなかったという。これは有角石器に関連してそれぞれ述べているところである。この見解は佐原真らによって継承されている。

しかし、これらの見解は、東日本の地域を一まとめとして弥生文化と認識しようとする無理、あるいは弥生文化の本質とは何かという問題に西日本、近畿の研究者は依然として無頓着、無定見であることを示している。有角石器が弥生の石器であると主張するかぎり、森本、坪井の東日本弥生観は克服できない。

関東の弥生は、その南部において、鉄製品、銅製品、磨製石器群、環壕集落、方形周溝墓などの存在から中期後半の宮ノ台期に成立すると主張したことがある(現在では東海大学の調査による平塚市王子ノ台遺跡の時期－中期中葉の「須和田式」の時期－からとさかのぼった）が、それに高地性遺跡を加えることができるようになった。そして有角石器とは無縁な磨製石剣、石戈そのものが近年多数発見されるようになり、森本、坪井らの系統観は成立できなくなってきた。

２．低地性遺跡と高地性遺跡

研究史をながめると、高地性遺跡は常に西日本、特に瀬戸内地方、近畿地方の話題であった。これは高地性遺跡が集成されたとき、いま国史跡に指定され公園化されている大塚遺跡が取り上げられたこともあるが、南関東の遺跡はみな台地上にあり、高地性遺跡としての特殊性は指摘できないことから南関東では高地性遺跡は無いということにされてきた。北関東では最近調査されて話題になった中瀬古観音山遺跡のすぐ近くの遺跡が高地性遺跡として合田芳正さんらによって指摘されていた。

これは関東の弥生遺跡の低地遺跡への関心がほとんど無かったこととも連動していた。最近の調査では砂丘や自然堤防上にある低地の弥生遺跡が調査されるようになってきた(小田原市三ッ俣遺跡、逗子市池子遺跡群など)。対応して高地性遺跡が注意されることになったのである。

３．高地性遺跡の分布と性格

神奈川県の相模湾沿岸では相模トラフの潜り込みによって南側が崖状となった丘陵が発達している。小田原、二宮、大磯の大磯丘陵、茅ケ崎の高座丘陵、藤沢、鎌倉の片瀬丘陵などであり、これらの丘陵の頂部に遺跡が存在する。（第１・２図、第１表）

標高は、低地との比高は50m以上を想定している。周辺に低地の遺跡のある地域であることを条件としたい。（藤沢市稲荷台地の石名坂、引地脇遺跡も比高差のある遺跡である。）高麗山（八俵山）の山頂でも土器を採集した。高麗山、吾妻山などには前期古墳の存在も可能性がある。

時期は、宮ノ台以前となるものが、江ノ島の山頂で発見されている。宮ノ台期の遺物も茅ケ崎、小田原で発見されているが、大半は弥生後期から古墳時代前期のものである。

性格は、通信施設を想定したい。高麗山は相模平野のほぼ全域から目視できる。また海岸部から丘陵の北側の平野部への連絡ルートが確保できる。丘陵上の東西の連絡も可能である。（第３図）

4．南関東後期弥生社会の特性

このような遺跡が必要とされた弥生時代の性格を考えたい。中期、後期の限定した時期に必要とされたのではなく、中期から古墳時代前期にかけて本質的な問題として高地性遺跡はあった。「倭国乱」は、時期を限定せず、西日本・東海に限定されず、弥生時代の本質的性格であり、南関東までを含んだ問題であった。そして古墳時代前期には東北中南部を巻き込んだ問題である。

このとき、北関東、東北は弥生文化の領域ではなく、縄文土器文化（大森文化）の領域であり、現在の利根川を挟んで対立的に存在していたと考えることにおいて説明できるのである。

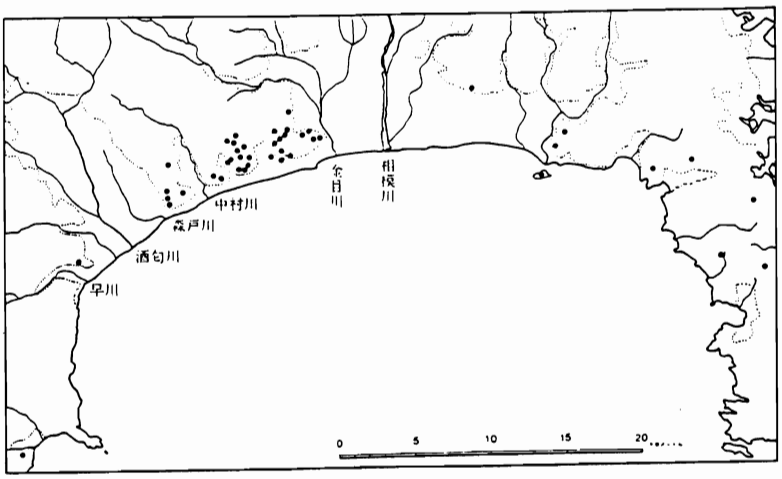
環壕、高地性遺跡は、弥生文化内部の争乱の問題に対応していただけではなく、その周辺の異文化に対応した、異文化を意識した弥生文化の所産なのである。このことの注意を換気したい。日本人の悪いくせとしてある目先の問題に振り回されるのではなく、時代状況を認識する目を養いたい。（第４図）

課題として、発掘調査を実施して、高地性遺跡の諸施設、火焚き場、などの確認が必要である。高地性遺跡は、三浦半島にも存在しているが（横須賀市吉井・池田地区遺跡群など）、東京湾の対岸の千葉県での存在を確かめたい。銅鐸などの出土した草刈遺跡は低地との比高差のある大規模集落である。東京都では、東京湾に面した武蔵野台地の先端にある弥生町遺跡などの比高差のある遺跡群に注目したい。

南関東にも高地性遺跡が群として存在すること、弥生の成立期から終末期（古墳時代前期）まで存在すること。これは南関東の弥生文化が歪んだものではなく、弥生体制そのものとして存在していたことを示す。南関東の弥生文化を見る目が歪んでいたのであり、実は弥生文化そのものが、歪んだ文化であることを認識すべきなのである。現代文化の歪みの根源は、ここにあるのである。

参考文献

岡本孝之　1991　「相模湾岸の高地性遺跡」『湘南考古学同好会々報』42
岡本孝之　1994　「大磯丘陵の高地性遺跡」『考古論叢神奈河』３
森岡秀人　1986　「高地性集落」『弥生文化の研究 7 弥生集落』
森本六爾　1930　「関東有角石器の考古学的位置－青銅利器に関係ある石器の一考察－」『考古学』１－１

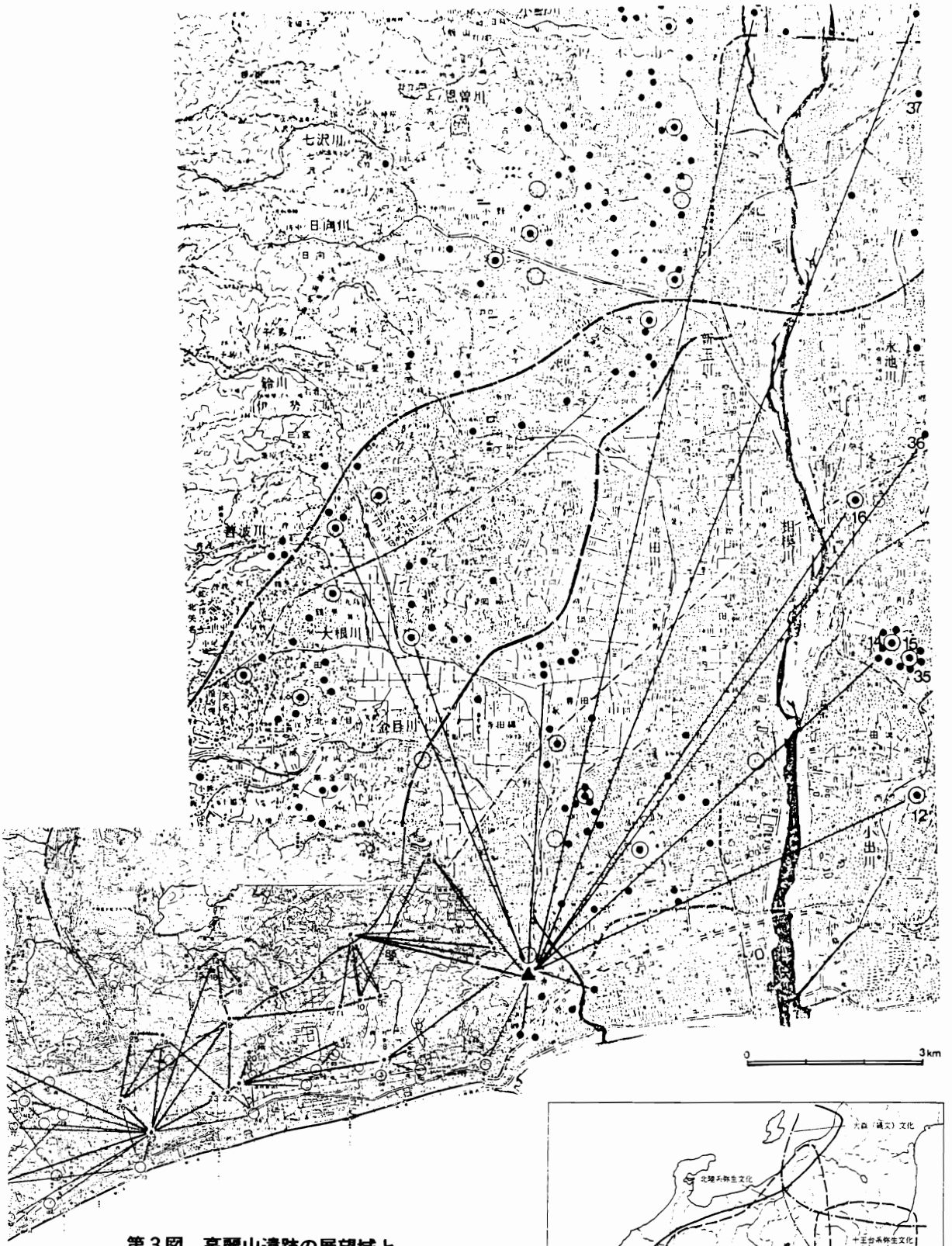


第１図　相模湾岸の高地性遺跡の分布

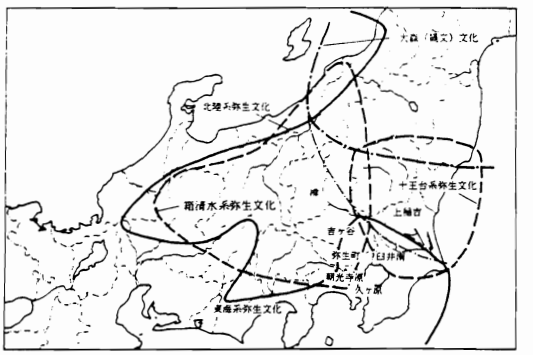
第2図　大磯丘陵の高地性遺跡

第1表　大磯丘陵における弥生時代～古墳時代前期の高地性遺跡

No.	遺跡名	遺跡No.	所在地	標高	比高	時期	文献	備考
1	高麗山遺跡		大磯町高麗	153m (10m)	140m	KZ		
2	浅間山遺跡		平塚市高根	167m (10m)	160m	H		
3	越地遺跡	83	高根	60m (10m)	50m	KZ	金子他1974・赤星他1979	
4	鳥谷戸・新山遺跡	84・288	高根	70m (10m)	60m	YH	金子他1974・安藤文1986	発掘
5	日向岡遺跡	31	日向岡	75m (10m)	60m	YH	金子他1974・小島他1987	発掘
6	本郷山遺跡	156	大磯町西小磯	60m (20m)	40m	H	大磯町1979	
7	上ノ山遺跡		西小磯	70m (20m)	50m	Z		
8	金久保遺跡	143	西小磯	70m (30m)	40m	YH	神奈川県1971	
9	万台遺跡	158	西小磯	100m (20m)	80m	H	大磯町1979	
10	向峰遺跡	146	寺坂	90m (20m)	70m	H	大磯町1979	
11	栗原Ⅱ遺跡	174	生沢	70m (20m)	50m	YH	大磯町1979・鈴木一1983	発掘
12	祇園塚山遺跡	142	国府本郷	76m (15m)	60m	H	大磯町1979	
13	寺坂本堂遺跡	123	寺坂	100m (20m)	80m	Z	大磯町1979	
14	黒岩山王台遺跡	150	黒岩	140m (70m)	70m	Y	神奈川県1971	
15	虫窪上飛戸遺跡	167	虫窪	150m (70m)	80m	H	大磯町1979	
16	虫窪上舟窪遺跡	164	虫窪	120m (70m)	50m	Y	神奈川県1971	
17	虫窪栄山遺跡	151	虫窪	110m (60m)	60m	Y	神奈川県1971	
18	虫窪谷坂遺跡	110	虫窪	100m (50m)	50m	H	大磯町1979	
19	虫窪西谷沢遺跡	149	虫窪	108m (60m)	50m	YZ	神奈川県1971	
20	石神台遺跡	127	国府新宿	82m (20m)	60m	K	宮本他1975	発掘
21	山王山遺跡	128	国府新宿	105m (20m)	85m	YH	神奈川県1971・杉山1990	
22	二宮山王台遺跡	20	二宮町二宮	108m (20m)	85m	YZ	神奈川県1969・杉山1990	
23	二宮稲荷台遺跡	1	二宮	60m (20m)	40m	Y	神奈川県1969	
24	中里峰山遺跡	53	中里	85m (20m)	60m	YH	杉山1990	
25	一色遺跡	9	一色	70m (30m)	40m	Z	鈴木保1980	発掘
26	平台遺跡	10	山西	82m (20m)	60m	Y	杉山1972	発掘
27	吾妻山遺跡		山西	136m (20m)	110m	YZ	岡本1991	
28	大台畑遺跡		小田原市前川	155m (10m)	140m	YZ		
29	割山遺跡	179	小竹	100m (30m)	70m	Z	神奈川県1971・杉山他1971	
30	会下遺跡		国府津	130m (20m)	110m	Z		
31	宝金剛寺山遺跡	5・126	国府津	100m (10m)	90m	CY	神奈川県1971・赤星他1979	
32	国府津駅裏山遺跡	7	国府津	88m (10m)	80m	YZ	岡本1991	
85	寺坂若宮遺跡		大磯町寺坂	105m (29m)	85m	Z	赤星他1979	



第３図　高麗山遺跡の展望域と
高地性遺跡間関係（左下）



第４図　弥生後期の文化圏

入門講座７

土器の移動からみた弥生時代後期の社会

立花　実

１．はじめに

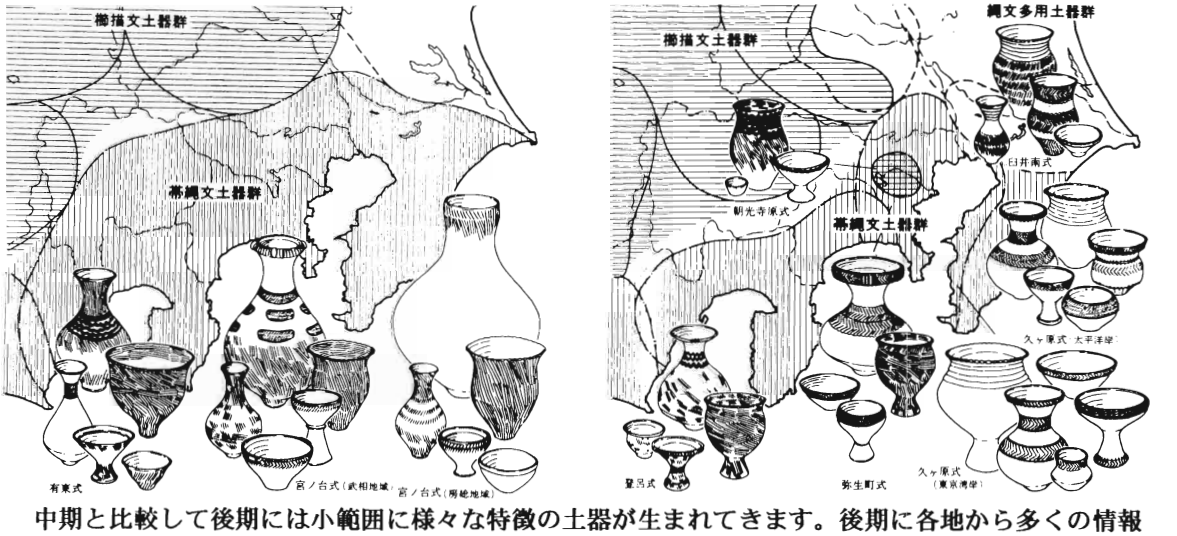
神奈川県の弥生土器は以前から東海地方の影響が強いと言われてきました。しかし、それは土器の模様に、東海地方特有の櫛描模様が多く見られるという程度の認識にとどまり、東海地方のどこの影響を、いつ、どのように受けているのかという実態把握はなかなか進みませんでした。一方、県内で大規模な弥生時代後期の集落を調査している担当者たちの間では、弥生時代中期（宮ノ台式）に連続する後期前半の土器が見つからないこと、近距離にありながら遺跡ごとに土器の様相が大きく異なることが、説明のつかない大きな謎となっていました。

近年、東海地方西部（主に愛知県）の土器編年が整備されるにつれ、関東地方の西の玄関口である神奈川県はその成果の検討に積極的に取り組む立場となり、両者をつなぐ鍵として県内の東海系土器が再びクローズアップされてきました。そしてそのことは、同時に長い間横たわっていた謎の解明にも新たな進展をもたらすこととなったのです。

２．神奈川県の弥生土器

神奈川県の弥生時代後期の土器を語るために、まずは中期後半の土器に触れておくことにします。弥生時代中期後半は、南関東に稲作を中心とした本格的な弥生文化が浸透した時期といわれています。この時期の土器は宮ノ台式土器と呼ばれ、静岡県東部から太平洋岸沿いに神奈川県、東京都、埼玉県の南部、千葉県にまで分布しています（第１図左）。壷の模様や甕の脚台部などに各地域で多少の違いはありますが、ほぼ同質の土器と考えられています。

これに対し弥生時代後期になると、各地に様々な特徴をもった土器が生み出されてきます（第１図右）。県内の様相は、相模川の西側では西隣の駿河（静岡県東部）との関連が深く、相模川東



中期と比較して後期には小範囲に様々な特徴の土器が生まれてきます。後期に各地から多くの情報がもたらされた結果ですが、土器の分布を見る限りそれは均質に浸透したわけではないようです。
設楽博己1991「関東地方の弥生土器」『邪馬台国時代の東日本』六興出版から一部改変して転載

第１図　弥生時代中期後半（左）と後期（右）の土器分布

岸では東へ行くほど東京湾西岸の久ヶ原式の比重が高まってきます。同じ東京湾西岸でも三浦半島は、対岸の千葉県、上総との関係が深いようです。また、横浜市北部から川崎市、町田市の一部にかけての狭い範囲には朝光寺原式土器という全く別の土器が分布しています。これは長野県や北関東の土器と親類関係にあり、神奈川県に北からも情報が入ってきたことを物語っています。

このように、弥生時代中期後半には同質の土器であったのが、後期になると各地域に違う特徴をもつ土器が現われるということからは、土器づくりの情報が均質にもたらされない、またはそれを拒否する、あるいは選択して受け入れるといった状況が考えられます。これは程度の差はあるにせよ、土器づくり以外の情報についても同様であったと考えざるをえません。つまりこの背後には、こういった情報の流れ方が不自然になる社会的要因があったということになります。

また、中期後半（宮ノ台式）との関係という点でも県内の後期の土器には大きな違いが見られます。久ヶ原式土器が分布する東京湾西岸地域（川崎、横浜、三浦半島）においては中期との連続性に問題はありませんが、それのない相模のほとんどの地域では宮ノ台式との間に大きなギャップが生じています。相模と様相が似ている駿河（静岡県東部）でもこの時期の資料はごくわずかしかなく、より西の遠江（静岡県西部）でも似たような状況がみられるといいます。この時期の土器は本当に無いのか、無いとすれば中期終末の人たちはどこへ行ってしまったのか、それともまだ見つかっていないだけなのか、さまざまな疑問が湧いてきます。このように、弥生時代中期から後期にかけての神奈川県は、土器から見ただけでも激しく揺れ動いていたことが想像されます。

3．東海系土器の実態

東海系土器とは東海地方の特徴を備えた土器のことをいいますが、その程度にも色々あります。向こうで作られて運ばれたもの、つまり“本物”から、こちらで見よう見まねで作ったものまで様々です。次に神奈川県にもたらされた東海地方各地の土器の実態についてみていきます。

a．駿河

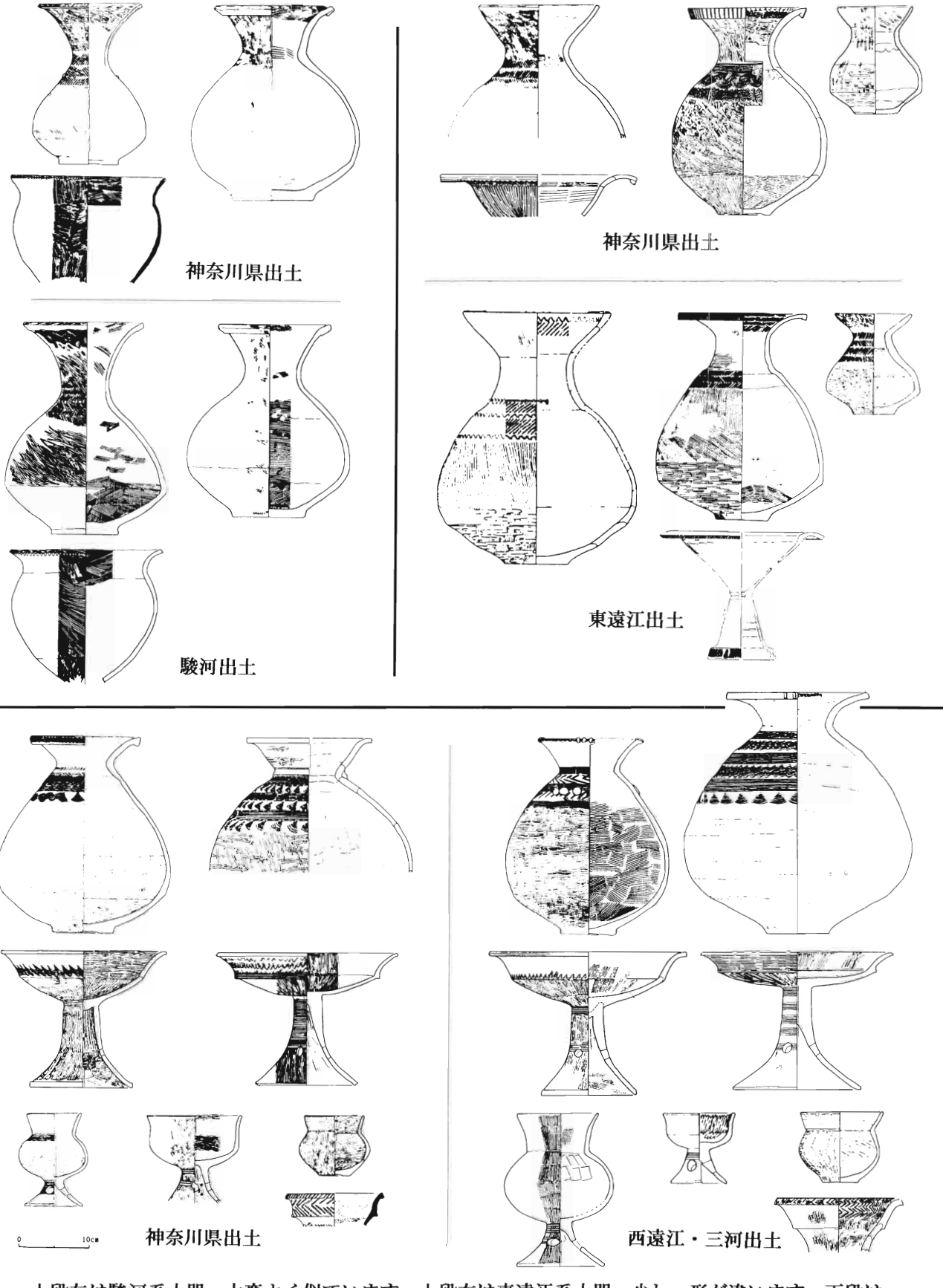
先にも述べたとおり、駿河と深い関係をもつのは相模川西岸域の土器です。中には違う部分を探すほうが難しいものもあり、相模と駿河を同じ地域と考える人もいるくらいです。後期前半はお互いに資料が少ないのですが、その少ない資料もよく似ています。相模川西岸域の土器のベースは駿河と同じ、または非常によく似ているといえそうです（第２図上段左）。ですから後期後半になって、東京湾西岸域にこういった土器が混ざるようになってもすぐに目につきます。しかし、それが相模か駿河かを判断するのはなかなか難しいようです。

b．東遠江（菊川式系）

東遠江は静岡県の西部、天竜川の東岸の地域です。ここの後期土器は菊川（きくがわ）式と呼ばれ、神奈川県では平塚市、伊勢原市、秦野市を流れる金目川とその支流域に集中しています。その多くは、“本物”に比べると多少崩れがみられますが、中にはそっくりさんもいて、密接なつながりをもっていたことがわかります（第２図上段右）。集落では平塚市赤坂遺跡、伊勢原市三ノ宮・前畑遺跡などで、方形周溝墓からは平塚市王子ノ台遺跡でまとまった数が出土しています。その双方から出土が見られたのが、平塚市原口遺跡（環濠集落）と海老名市本郷遺跡（同）です。土器はほとんどが壷ですが、わずかに高坏が確認されています。これらの菊川式系土器は、古くは後期前半の終わり頃から見られ始め、そのほとんどは後期後半に位置付けられます。

c．西遠江（伊場式系）・三河（寄道式系）

西遠江は静岡県の西部、浜名湖の東側の地域、三河は愛知県の東部、静岡県寄りの地域です。尾張（愛知県中央の低地部）の山中式の影響を受けた伊場（いば）式と寄道（よりみち）式はよく似ており、わずかな土器の特徴といくつかの器種の有無に違いがみられる程度です。これらの土器が最も強い影響



上段左は駿河系土器、大変よく似ています。上段右は東遠江系土器、少し、形が違います。下段は西遠江・三河系土器、これはそれまでの県内の土器製作技術では作り得ない土器です。おそらく西遠江、三河の土器づくりに熟練した人の手によるものと考えられます。

第２図　神奈川県出土の東海系土器と各地方出土の“本物”との比較

を与えたのが相模川の東岸域です（第２図下段）。そして、その代表が環濠集落である綾瀬市神崎遺跡です。その土器は95％が伊場式、寄道式そのものといえるものであり、熟練した製作者以外には作り得ない土器と考えられます。つまり神崎遺跡は西遠江、三河から直接来た人たちのムラである可能性が高いといえます。土器の細かい観察からは西遠江よりは三河とより強い関係があったと考えられ、当地の編年では後期前半の終わり頃に位置付けられます。この他にも西遠江系の土器が出土した遺跡としては、海老名市本郷遺跡（環濠集落）、寒川町大蔵（おおぞう）東原遺跡（同）、茅ケ崎市篠山遺跡があり、三河系としては寒川町高田遺跡（同）があげられます。相模川西岸域でも西遠江系には厚木市子ノ神遺跡（同）、愛甲宿遺跡（同、石田・峯遺跡と同一）、伊勢原市石田・細谷遺跡（同）があり、三河系としては厚木市御屋敷添遺跡（同）があります。また、両者が混在する遺跡として、厚木市宮の里遺跡（同）をあげることができます。西遠江系、三河系土器のあり方には大きな違いは見られないため、両者は連動して動いたと考えられます。また、全般的には相模川西岸より東岸の方がより“本物”に近く、まず東岸、次にそこから西岸に拡散といった図式が想像されます。

ここで以上の東海系土器のあり方についてまとめてみると、

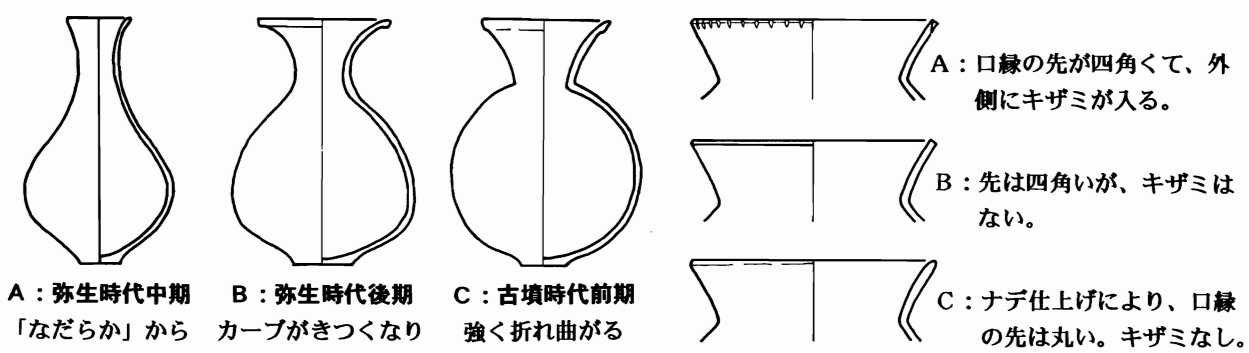
a　：駿河系は後期後半の相模川西岸域の土器のベースとなっている

b　：東遠江系は後期前半の終わりを始めとし、主に後期後半にかけて金目川流域付近に入り、それは“本物”をまねて作ったものが多い

c　：西遠江系、三河系は後期前半の終わり頃に相模川東岸を中心に入り、それは“本物”と変わらないものである、そしてその後は拡散し、独自の変化を遂げる

というふうに集約できそうです。

次にやや細かな話になりますが、東海系土器が県内の土器に与えた影響について例をあげておきます。弥生時代中期から後期、古墳時代にかけて壷の胴部と頸部（首の部分）は第３図左のような変化をとげます。そして、神奈川県ではＣのように明瞭に屈曲するのは古墳時代になってからと考えられてきました。同様に、甕の口縁部もキザミがあるものから無いものへと変化し（第３図右）、ナデによって仕上げられるのは古墳時代の特徴とされてきました。確かに神奈川県にこれらが定着するのは古墳時代になってからです。しかし、弥生時代後期前半に位置付けられる神崎遺跡には、既にこれらの特徴を備えた土器が含まれています。そして周辺に分布するやや崩れた高坏が、神崎遺跡のような移住者のムラから拡散した結果だとすれば、これら二つの特徴を含む土器製作技術も当然周囲に広がったはずです。現に在地の土器にこれらの技術を取り入れたと考えられる土器も見つかっており、それらは古墳時代を待たずして、頸部が屈曲する壷、キザミをもたない甕となります。つまりこのことは、頸部の屈曲や口縁部のキザミがその土器の時期を判別する絶対条件にはならないこと、それが弥生時代にもたらされたものなのか、古墳時代の到来を告げるものなのかという系譜を識別しなければならないことを意味しています。そして、東海系土器はこれらの特徴以外の部分にも影響を与えていると考えられ、それを見い出し、その系



第３図　壺頸部の接合方法と甕口縁部の仕上げ方法の変化

譜を明かにしていくことがこれからの最大の課題といえます。

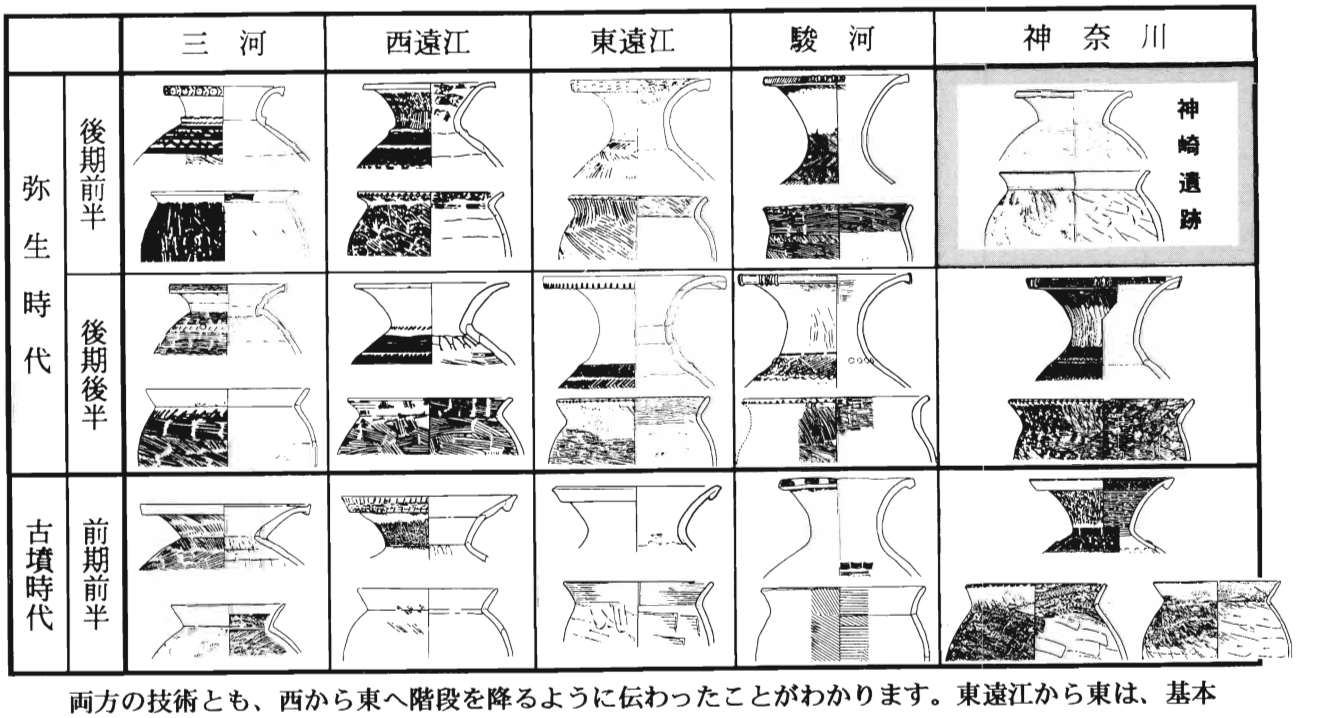
このように東海系土器は、発信地、受信地、時期を異にしながら神奈川県に影響を与えており、それは県内にも濃淡をもちつつ広がっていったと考えられます。そして、それが繰り返された結果、濃淡の上にモザイクをかけたような情報の不均衡状態を生み出したのでしょう。さらに東京湾西岸や北関東といった多方面からの情報が加味されていきます。遺跡ごとに違うといわれる複雑な土器様相はここにその一因があるのです。

4．東海系土器と環濠集落

最後に東海系土器と本題であります環濠集落の関係について触れておきます。東海地方からの移住者のムラといわれる神崎遺跡が環濠集落であり、また、県内に東海系土器をもたない環濠集落がないことからも、東海系土器と環濠集落に深いつながりがあることは確かなようです。しかし、そのあり方は一様ではありません。例えば後期前半の終わり頃に造られる環濠集落は、いずれも西遠江、三河系の土器をもっています。むしろ、それらが集中する遺跡は必ず環濠をもつと考えられそうなほどです。そして、それらは後期後半には環濠を放棄してしまいます。一方、東遠江系土器は、資料の少ない後期前半の終わりの段階では、今のところ環濠集落との関係を認めることはできません。そのかわり、後期後半になっても環濠をもつ集落があるのは（平塚市原口遺跡など）おもしろい事実です。さらに、後期後半の東遠江系や在地系（駿河系）土器をもつ集落には規模にかかわらず、環濠をもたないものもが多く見受けられます。

このように、東海系土器のあり方と環濠集落の消長には何らかの関係があり、おそらくはいくつかの類型にまとめられると考えられます。不十分ではありますが、現状での様相を巻末にまとめてあります（資料編44頁の表）。さらに資料が蓄積されれば、こういったアプローチからも地域史の１ページを書き加えることができると思います。

神奈川県に移動する東海系土器は、私たちにまだまだたくさんの情報を提供してくれるはずです。それを読み取り、その背景にある社会情勢にまで迫ることが、これからの研究には不可欠な姿勢だと思います。そしてそれは、今まで解説してきたような土器の細かな観察から積み上げた膨大な量のデータが基礎となるのです。この作業なしに、歴史の解明はありえないことを、私たちは改めて認識する必要があるのではないでしょうか。



両方の技術とも、西から東へ階段を降るように伝わったことがわかります。東遠江から東は、基本的に古墳時代にならないとこれらの技術は浸透しないようです。しかし神奈川県の神崎遺跡は、地域を飛び越えて後期前半にこれを知っています。その波紋は周辺に伝わらなかったのでしょうか。

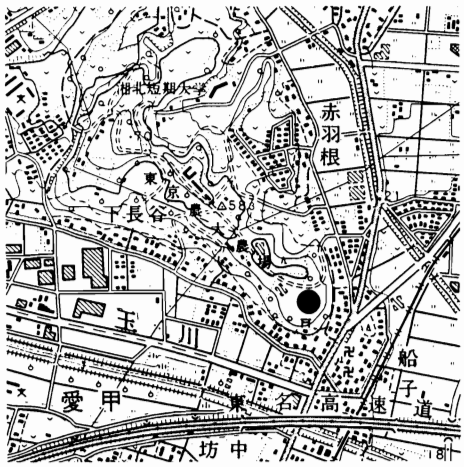
第４図　地域別に見た壺頸部の接合方法と甕口縁部の仕上げ方法

事例報告１

厚木市　宮の里遺跡について

河合英夫

１　遺 跡 名　宮の里遺跡（みやのさといせき）
２　所 在 地　厚木市船子字宮の里 1565-2 ほか
３　調査年月　1987.5～1988.2
４　調査組織・担当者　宮の里遺跡調査団 浅川利一
５　発見された弥生時代後期の遺構　竪穴住居　192 軒
環　濠　　２条
溝状遺構　　１条
６　遺跡概要　本遺跡は愛甲台地の南東、玉川と恩曽川に挟まれた長谷丘陵先端部の南向き緩斜面に立地する。調査の結果、弥生時代後期を主体とする環濠集落であることが判明したが、その主要部分は調査区に隣接する東京農大の敷地内に及ぶため全容は明らかでない。



第１図　遺跡位置図（1/25000）

当該期の遺構は、竪穴住居址 192 軒とそれらを取り囲む新旧２条の環濠、それに溝状遺構からなる。環濠は緩斜面の中腹を、南東側では同心円状に一定の間隔をおいて二重に巡る。環濠の断面は内濠が逆台形で外濠がＶ字形となる。南西側は外見は１本の濠であるが、少なくとも３回以上の掘り直しが行われ、その断面形からは逆台形からＶ字形の変遷がたどれる。両者がつながるものとすれば、環濠は内濠から外濠に環濠内の専有面積を拡大したことになる。

環濠の規模は内濠で東西約 115ｍを有するが、２条の濠がどう延びるか明らかでない。ほぼ地形に応じて変形していくのであれば、南北約 170ｍ、東西約 130ｍの範囲を長円形に取り囲む環濠と推定される。両濠とも広狭はあるが、ほぼ同規模で、遺存状態の良好な箇所で幅 2.5～３ｍ、深さ 1.5～２ｍを有する。また集落への出入口と推定されるピットが、濠の底面から確認されている。ピットは対をなすことから橋の固定杭の痕とも考えられるが、もし板橋であるとすれば、軍事的緊張に対する防禦の意味をもつものとなろう。丘陵突端という見晴らしの利く立地であることも関係してこよう。環濠で囲まれた内域には後期の竪穴住居址 192 軒が検出され、すべて内濠の内域に分布する。竪穴は密集し、かつ複雑に重複している。その中に倉庫址の存在も予測される。竪穴の平面形は、小判形、胴張隅丸長方形、隅丸長方形とバラエティに富むが、主体は胴張隅丸長方形である。それらの中には、数の上では少ないが10ｍを超える大型住居が数箇所に分布する。拡張された場合の連続的重複と断続的重複の二つの型があるが、その分布は特定の地点で竪穴の築造を繰り返した結果、生じたものと見られ、集落構成の中で一定の位置が予測される。焼失家屋が数次に及ぶことと関係する。

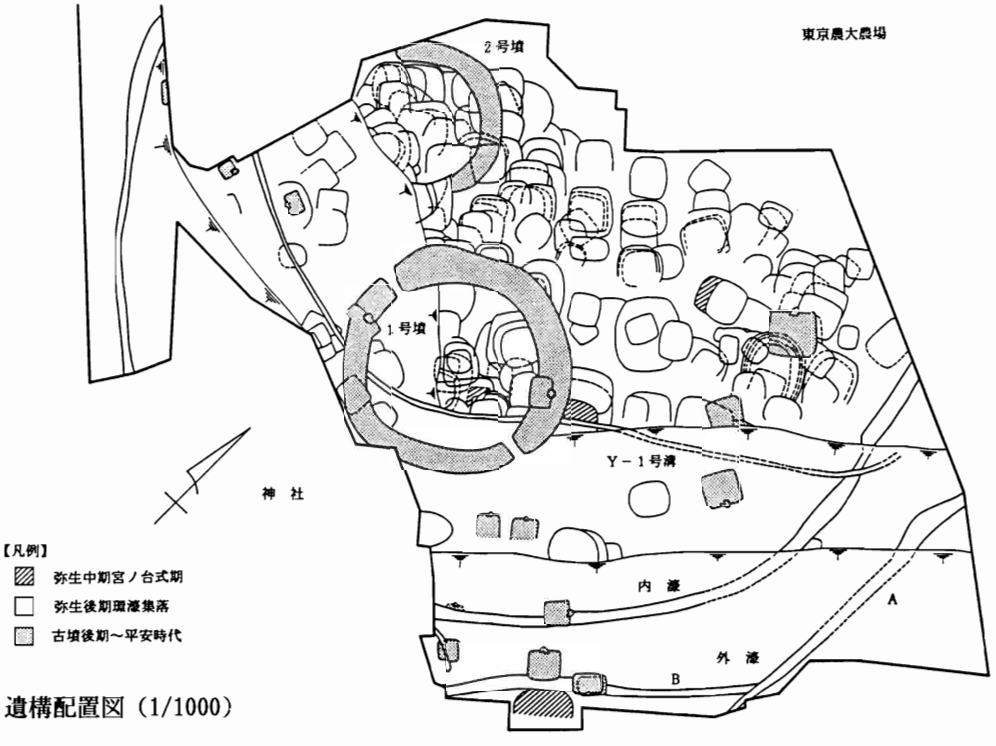
環濠と集落との関係では、環濠の掘削と埋没完了はいずれも後期のうちに収束し、溝状遺構の出現を契機に居住域が丘陵の頂部へ移るが、集落は縮小して古墳前期を待たずに廃絶する。

最後に本遺跡における弥生時代後期の土器様相について、内濠出土の一括資料を提示する。これら資料は、相模川中流域西岸特有の、いわゆる相模湾岸系の土器様式を示す一群であり、一定の地域的様式圏を形成するものと考えられる。各器種は器形・文様・調整など他地域に起源をもつ要素の参入が顕著で、その最たるものは三河・遠江系の土器であるが、東京湾西岸の久ケ原系土器も少なくない。他地域との並行関係では広義の山中式の系譜上にあるものと考えられる。

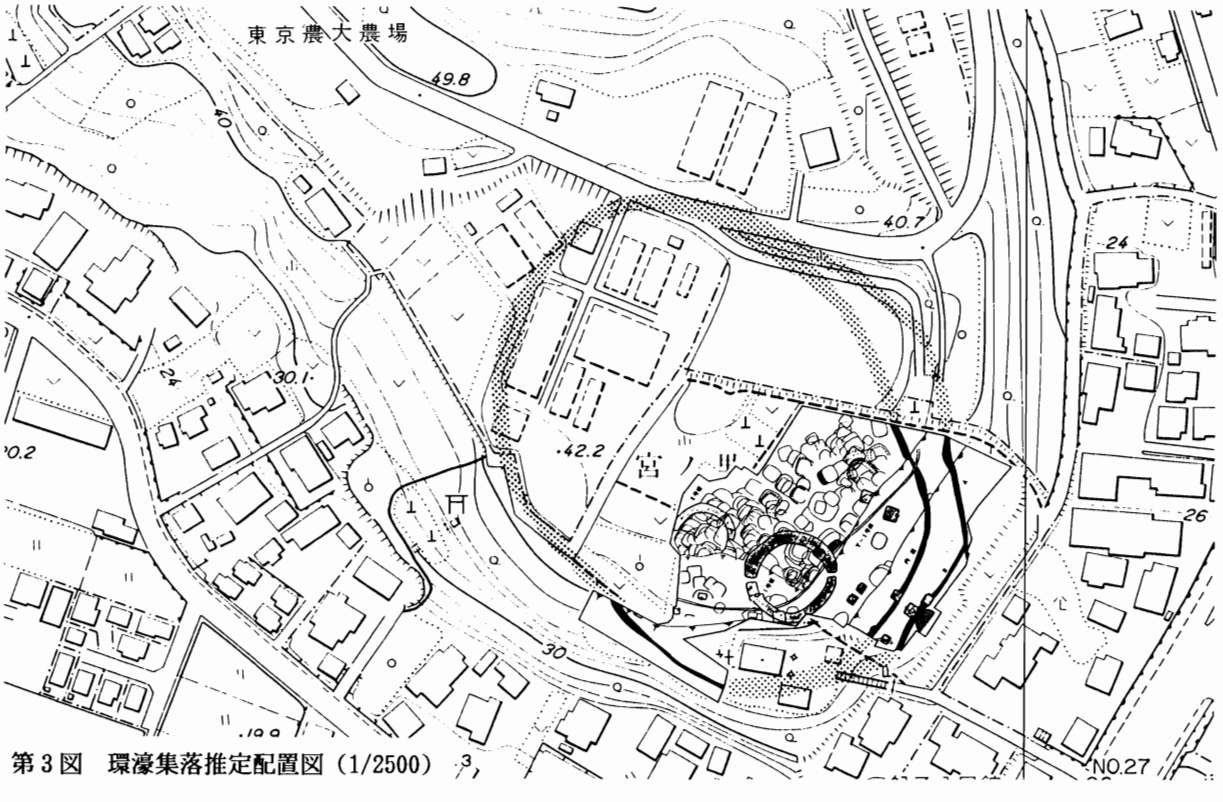
7　文献

河合英夫ほか　1988　「厚木市宮の里遺跡の調査」『第12回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨』第12回神奈川県遺跡調査・研究発表会準備委員会

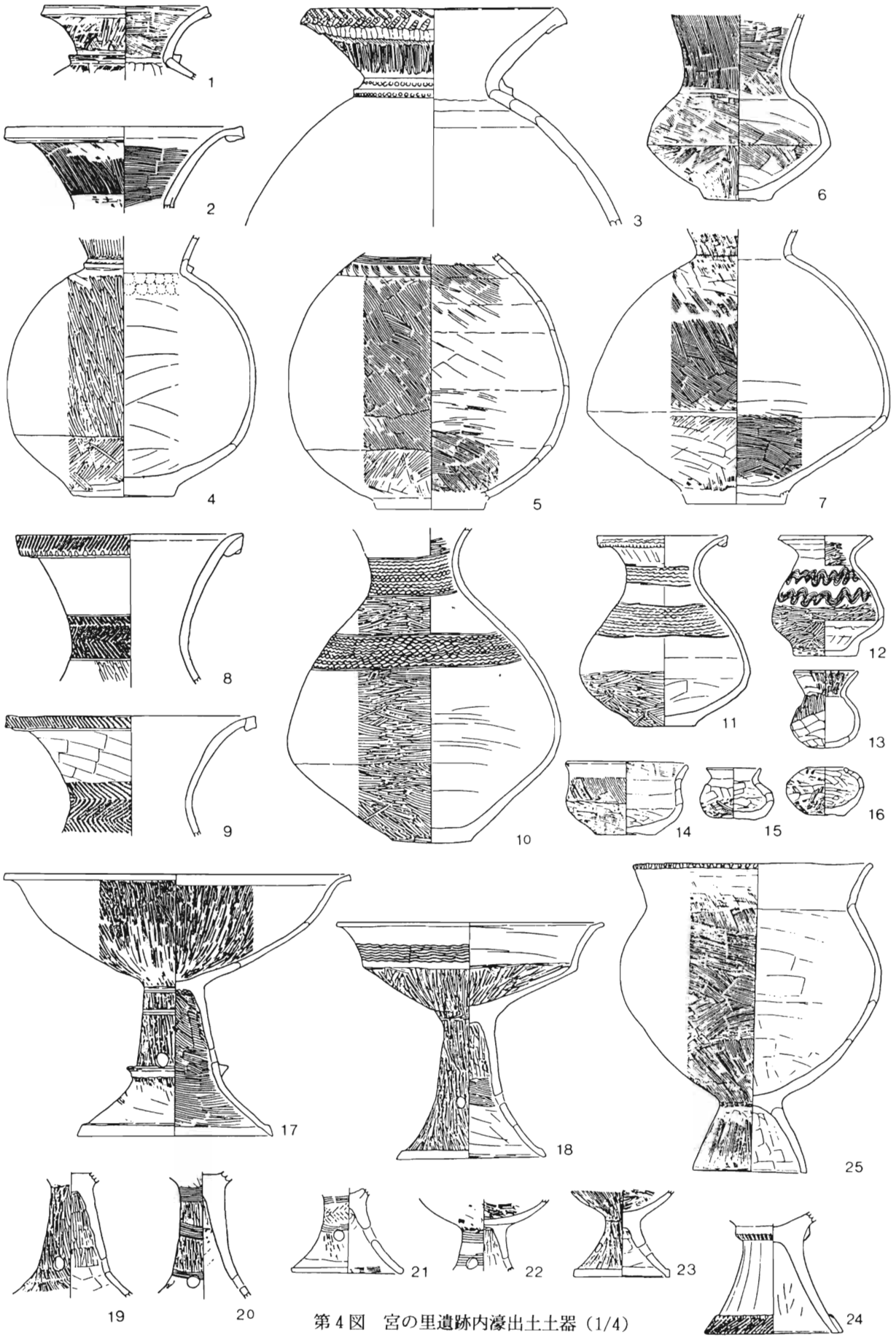
田村良照　1993　「宮の里遺跡」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会



第2図　遺構配置図（1/1000）

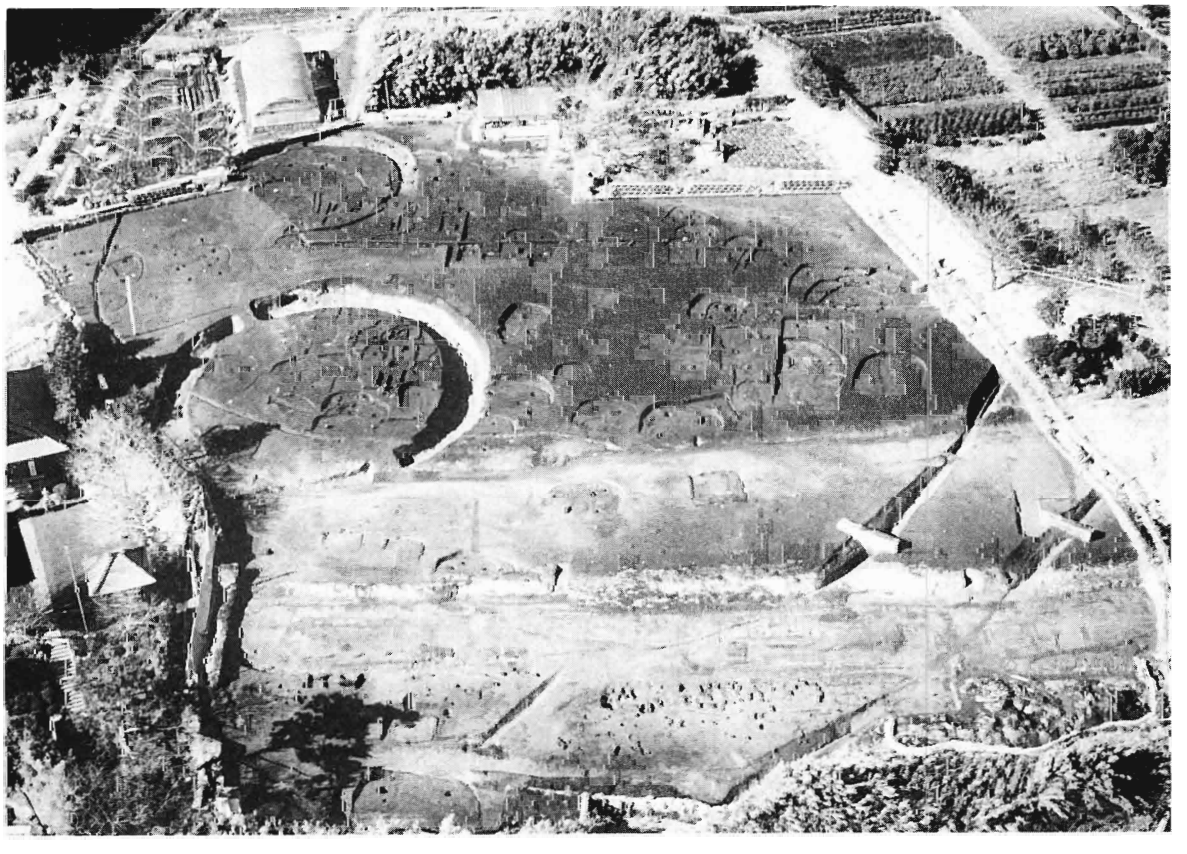


第3図　環濠集落推定配置図（1/2500）



第４図　宮の里遺跡内濠出土土器（1/4）

丘陵部平坦面における竪穴住居址密集状態



二重に巡る弥生時代後期の環濠集落

事例報告２

横浜市　赤田地区遺跡群について

渡辺　務

１　遺 跡 名　赤田地区遺跡群（あかだちくいせきぐん）
２　所 在 地　横浜市青葉区あざみ野南
３　調査年月　1985．3～1988．9
４　調査組織・担当者　赤田地区遺跡群発掘調査団
大川　清・青木健二・吉田好孝・渡辺　務
５　発見された弥生時代後期の遺構　竪穴住居跡　79軒
掘立柱建物　３棟
土器棺墓　１基

あざみ野
荏田北一丁目
荏田北二丁目
荏田北三丁目
荏田北四丁目
荏田北五丁目
荏田北六丁目
荏田北七丁目
荏田北八丁目
荏田北九丁目
荏田北十丁目
荏田北十一丁目
荏田北十二丁目
荏田北十三丁目
荏田北十四丁目
荏田北十五丁目
荏田北十六丁目
荏田北十七丁目
荏田北十八丁目
荏田北十九丁目
荏田北二十丁目
荏田北二十一丁目
荏田北二十二丁目
荏田北二十三丁目
荏田北二十四丁目
荏田北二十五丁目
荏田北二十六丁目
荏田北二十七丁目
荏田北二十八丁目
荏田北二十九丁目
荏田北三十丁目
荏田北三十一丁目
荏田北三十二丁目
荏田北三十三丁目
荏田北三十四丁目
荏田北三十五丁目
荏田北三十六丁目
荏田北三十七丁目
荏田北三十八丁目
荏田北三十九丁目
荏田北四十丁目
荏田北四十一丁目
荏田北四十二丁目
荏田北四十三丁目
荏田北四十四丁目
荏田北四十五丁目
荏田北四十六丁目
荏田北四十七丁目
荏田北四十八丁目
荏田北四十九丁目
荏田北五十丁目
荏田北五十一丁目
荏田北五十二丁目
荏田北五十三丁目
荏田北五十四丁目
荏田北五十五丁目
荏田北五十六丁目
荏田北五十七丁目
荏田北五十八丁目
荏田北五十九丁目
荏田北六十丁目
荏田北六十一丁目
荏田北六十二丁目
荏田北六十三丁目
荏田北六十四丁目
荏田北六十五丁目
荏田北六十六丁目
荏田北六十七丁目
荏田北六十八丁目
荏田北六十九丁目
荏田北七十丁目
荏田北七十一丁目
荏田北七十二丁目
荏田北七十三丁目
荏田北七十四丁目
荏田北七十五丁目
荏田北七十六丁目
荏田北七十七丁目
荏田北七十八丁目
荏田北七十九丁目
荏田北八十丁目
荏田北八十一丁目
荏田北八十二丁目
荏田北八十三丁目
荏田北八十四丁目
荏田北八十五丁目
荏田北八十六丁目
荏田北八十七丁目
荏田北八十八丁目
荏田北八十九丁目
荏田北九十丁目
荏田北九十一丁目
荏田北九十二丁目
荏田北九十三丁目
荏田北九十四丁目
荏田北九十五丁目
荏田北九十六丁目
荏田北九十七丁目
荏田北九十八丁目
荏田北九十

ていた。本遺跡は縄文時代から近代にかけての複合遺跡で、遺構密度が高かった。弥生時代後期の遺構は竪穴住居跡18軒で、このうち１軒は長軸約９ｍの大形住居であった。住居跡は朝光寺原式土器を出土するものと東京湾岸系土器（久ヶ原式土器、弥生町式土器）を出土するもの、そして後期末の東京湾岸系土器（前野町式土器）と非在地系土器（前野町式土器とは異なる他地域の土器、またはこれを模倣した土器）を主体にするものとに分けられる。

No. 7 遺跡

No. 6 遺跡とは小支谷を挟んで南東側に隣接し、丘陵頂部に立地する。調査面積は1650㎡。本遺跡は縄文時代から古墳時代にかけての複合遺跡で、No. 6 遺跡と共に遺構密度が高く、弥生時代後期の遺構は竪穴住居跡14軒。このうち１軒は長軸13ｍと大形住居であった。

No.10 遺跡

赤田谷戸中央近くの南側で、丘陵頂部から斜面に立地する。調査面積は2100㎡。本来の遺跡はさらに南側に展開していたものと思われるが開発により既に消滅していた。本遺跡は縄文時代から弥生時代にかけての複合遺跡で、弥生時代後期の遺構は竪穴住居跡５軒。住居からはいずれも朝光寺原式土器が出土しており、特にNo. 1 遺跡と共に壺・高坏、また鉄器の出土が注目される。

No.11 遺跡

赤田谷戸の奥近く、丘陵頂部から斜面に立地する。調査面積は4950㎡。本遺跡は縄文時代から弥生時代にかけての複合遺跡で、弥生時代後期の遺構は竪穴住居跡４軒。住居からはいずれも朝光寺原式土器が出土した。集落のほぼ全域を調査した。

No.14 遺跡

赤田谷戸の最も奥、No.11遺跡とは谷を隔てた西側の丘陵頂部から斜面に立地する。調査面積は4100㎡。本来の遺跡はさらに北西側に展開していたものと思われるが開発により既に消滅していた。本遺跡は縄文時代から弥生時代にかけての複合遺跡で、弥生時代後期の遺構は竪穴住居跡６軒。住居跡は朝光寺原式土器を出土するものと後期末の東京湾岸系土器を主体にするものとに分けられる。

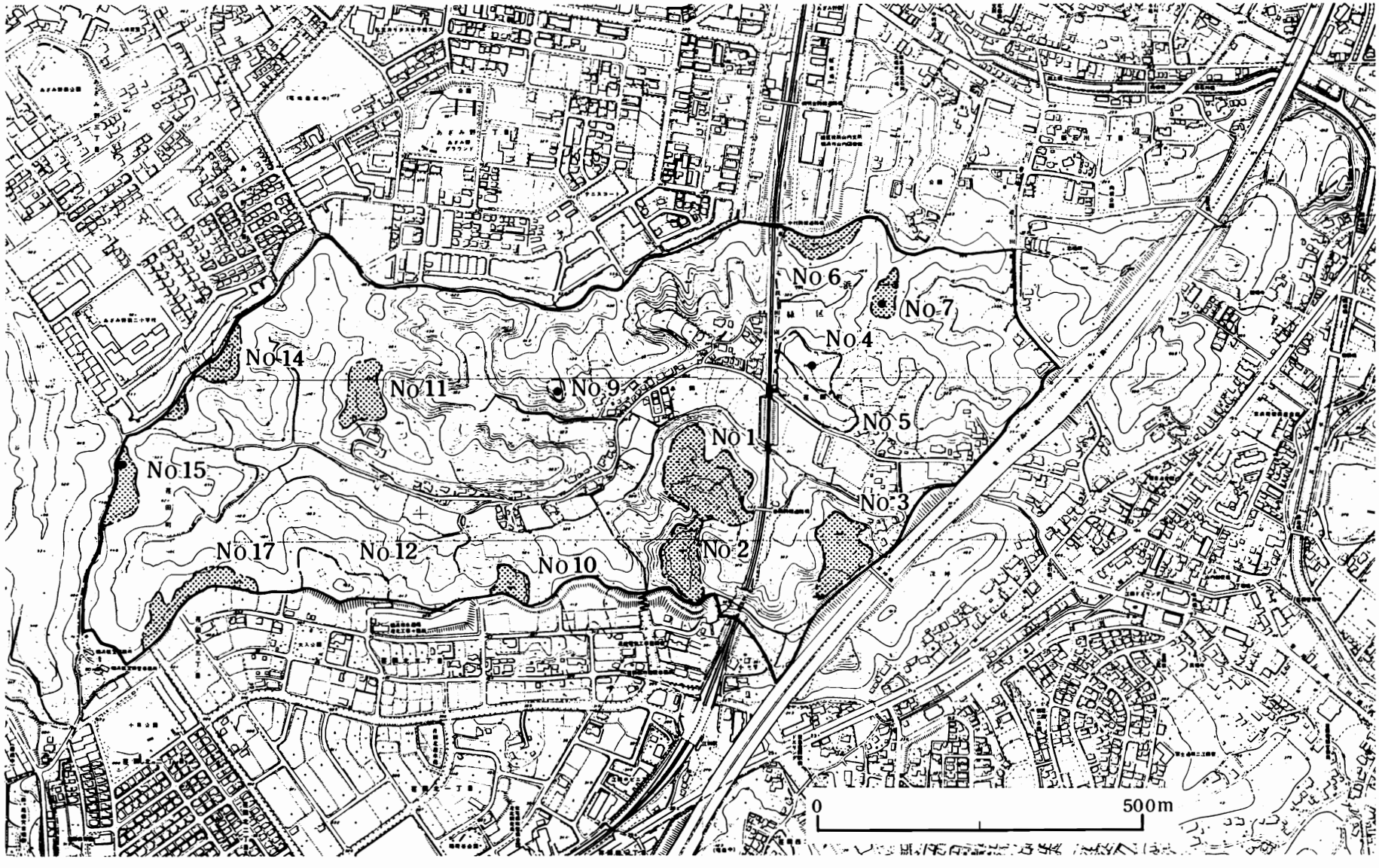
No.15 遺跡

No.14 遺跡の南側に尾根続きで立地し、調査面積は4300㎡。本来の遺跡はさらに西側の開発区域外へと展開している。本遺跡は縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡で、弥生時代後期の遺構は竪穴住居跡７軒と掘立柱式建物跡３棟。住居のうち１軒は長軸８ｍ以上の大形住居であった。掘立柱式建物跡は類例が多くないだけに貴重である。

No.17 遺跡

赤田谷戸の最も奥、No.15遺跡とは谷を隔てた南側の丘陵頂部から斜面に立地する。調査面積は3850㎡。本遺跡は縄文時代から弥生時代にかけての複合遺跡で、弥生時代後期の遺構は竪穴住居跡11軒。このうち２軒は長軸約８ｍの大形住居であった。本遺跡は昭和45年に調査された「小黒谷遺跡Ⅰ・Ⅱ地区」の北側残存部で、前回の調査で竪穴住居跡32軒が確認されているため、合計すると43軒となり規模の大きな集落といえる。また前回調査の住居跡のうち３軒は長軸８ｍを越える大形住居で、合計５軒が大形住居であったことになる。なお２回の調査で集落のほぼ全域の調査を実施した。

本遺跡群の特徴をまとめてみると、１．谷戸内部に面する遺跡は朝光寺原式の集落で、開口部付近や早淵川に面する遺跡は東京湾岸系の土器を主体に使用したり、朝光寺原式土器が混在する集落である。２．朝光寺原式の集落はNo17遺跡を除き、いずれも小規模で継続期間は比較的短いものと思われる。３．異なる土器を使用する集団が集落内に同時に存在している。４．朝光寺原式の集落内には埋葬施設が見当たらない。以上の点が指摘できる。


No 6
No 7
No 4
No 14
No 11
No 9
No 5
No 1
No 15
No 3
No 17
No 12
No 10
No 2
0
500m

第２図　遺跡群全体図

7　文献

赤田地区遺跡群発掘調査団　1988. 1　『赤田地区遺跡群発掘調査概報』
赤田地区遺跡群発掘調査団　1988.12　『赤田地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ』
大川　清・渡辺　務　1994　『赤田地区遺跡群　集落編Ⅰ』日本窯業史研究所報告第45冊

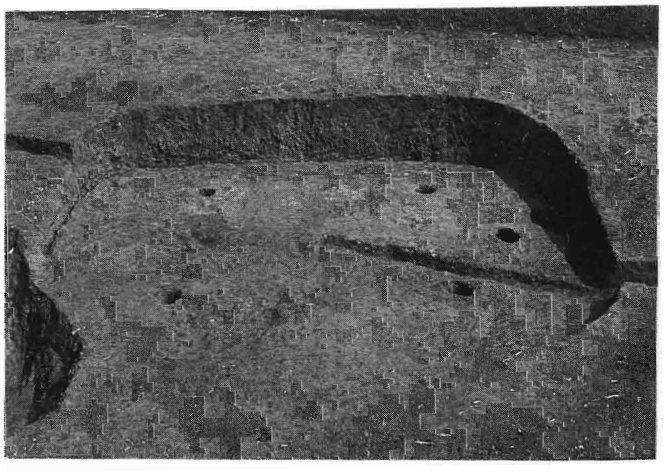


写真1　No.17遺跡　ＹＴ－１

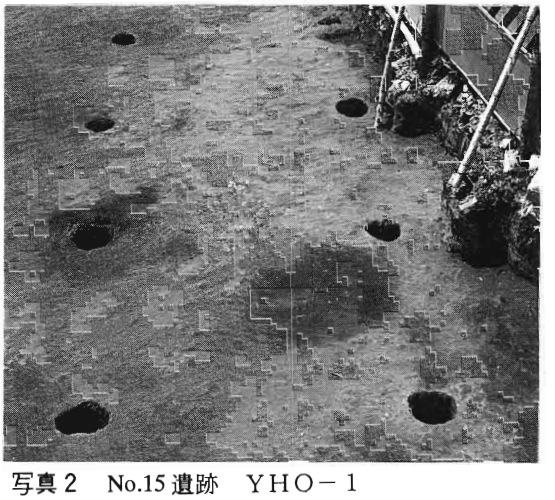


写真2　No.15遺跡　ＹＨＯ－１

写真3　No.15遺跡

資　料　編

用語集

【遺物　土器】

宮ノ台式　みやのだいしき　神奈川県・東京都・千葉県および埼玉県の大宮台地以南に分布する中期後葉の土器。標式遺跡は千葉県茂原市の宮ノ台遺跡。なお標式遺跡とはタイプ・サイトの訳で、土器型式命名の元になった遺跡のこと。

足洗式　あしあらいしき　茨城県に分布する中期後葉の土器。標式遺跡は北茨城市の足洗遺跡。

栗林式　くりばやししき　北信を中心とする長野県に分布する中期後半の土器。標式遺跡は中野市の栗林遺跡。

山中式　やまなかしき　尾張・三河・西遠江の後期前半の土器。標式遺跡は愛知県一宮市の山中（みずほ）遺跡。狭義では尾張のものだけを指し、これは瑞穂式とも呼ばれた。

寄道式　よりみちしき　三河の山中式。標式遺跡は愛知県豊橋市瓜郷町西寄道・東寄道の瓜郷遺跡。

伊場式　いばしき　西遠江の山中式。標式遺跡は静岡県浜松市の伊場遺跡。

菊川式　きくがわしき　東遠江の後期全般の土器。古・中・新に分けられる。静岡県菊川町あたりを流れる菊川流域に多く分布するためにこの名称となった。

登呂・飯田式　とろ・いいだしき　駿河の弥生後期の土器。後期前半が登呂式（標式遺跡は静岡市の登呂遺跡）、後半が飯田式（標式遺跡は清水市の飯田遺跡）。

相模湾岸様式　さがみわんがんようしき　相模の弥生後期全般の土器。根丸島（ねまるしま）式（秦野市根丸島遺跡）とか相模式とも呼ばれたこともあった。

東京湾岸様式（久ヶ原式・弥生町式）　とうきょうわんがんけいしき（くがはらしき・やよいちょうしき）　東京湾沿岸の弥生後期全般の土器。初期が久ヶ原式（標式遺跡は大田区の久ヶ原遺跡）、中・後葉が弥生町式（標式遺跡は文京区本郷弥生町の向岡貝塚。この遺跡が「弥生」時代命名のもととなった）。

朝光寺原式　ちょうこうじはらしき（ちょうこうじっぱらしき）　横浜市・川崎市の北西丘陵部を中心に分布する後期全般の土器。標式遺跡は横浜市青葉区の朝光寺原遺跡。

吉ケ谷式　よしがやつしき　埼玉県北部を中心に分布する後期の土器。標式遺跡は東松山市の吉ケ谷遺跡。

箱清水式　はこしみずしき　長野県（北信・東信）に分布するほぼ後期全般の土器。標式遺跡は長野市の箱清水遺跡。

十王台式　じゅうおうだいしき　茨城県北部に分布する後期後葉の土器。標式遺跡は十王町の十王台遺跡。

上稲吉式　かみいなよししき　茨城県南部に分布する後期後葉の土器。標式遺跡は千代田村の上稲吉西原遺跡。

Ｓ字状口縁台付甕（Ｓ字甕）　えすじじょうこうえんだいつきがめ（えすじがめ）　口縁部の断面がＳ字状に屈曲している甕。器壁が1～2mmと非常に薄い作りをしたもので、愛知県一宮市を中心とした地域で作られ始めた。東海地方に広く分布し、神奈川でもまれに見られる。図１参照

瓢形土器　ひさごがたどき　瓢＝瓢箪（ひょうたん）の形をした土器。

１．欠山（かけやま）式（東海地方の後期後半の土器。標式遺跡は愛知県小坂井町の欠山貝塚）から元屋敷（もとやしき）式（東海地方の古墳時代前期の土器。標式遺跡は愛知県一宮市の元屋敷遺跡）に特徴的な口縁部が内湾（ないわん）（内側に向かって湾曲すること）気味の長頸壷。図２参照

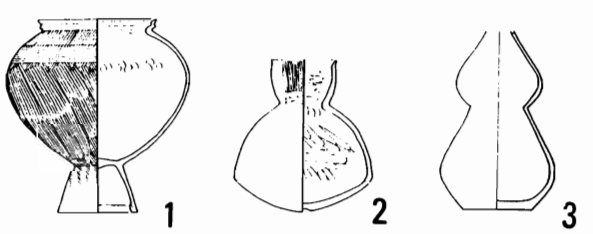
２．単に瓢箪にそっくりな土器。例：横浜市神奈川区神之木台遺跡　図３参照

東海系土器　とうかいけいどき　東海地方の影響を残した土器の総称。神奈川では山中式や元屋敷式の影響を受けたものが目立つ。

北陸系土器　ほくりくけいどき　北陸地方の影響を残した土器の総称。弥生時代末から古墳時代前期に北陸の玉作り技術とともに流入した。東海系に比べれば微量である。

【その他の遺物】

斧　おの　石製・鉄製がある。柄と平行に刃がつい



ているもの（縦斧・伐採斧　例：鉞など）と、直角に刃がついているもの（横斧・加工斧　例：手斧など）の二者に分けられる。中国・ヨーロッパなどでは武器専用のものも発達した。

剣　けん　真っ直ぐな身の両側に刃をつけた武器。片側だけに刃をつけたものは刀とする。青銅・鉄・石製のものがある。刀剣は一般的には長い刃と一端に柄をもつものを指し、用途は斬る・突き刺す・払うである。剣は突き刺すのが主目的であるが、日本では儀器・祭器化した青銅製のものも認められる。

戈　か　長い柄に直角に出刃包丁のような刃ものをつけた武器。長い柄の草刈り鎌を想定していただければイメージがつかめる。中国の商・周（前11～前3世紀）において戦車（軽車＝4頭並べ3人乗の二輪車ヨーロッパのチャリオット 特に 商～前漢の主力武器であったが日本には伝わらなかった）戦で弓とともに使われた。用途は甲に打ち込んだり、引っかけて手前に引いて斬るもの。日本では青銅・鉄・石製があり、儀器・祭器化した青銅製のものも認められる。ちなみに弥生時代後期当時のの中国での主戦長兵器は戟のみである（戟は戈と同じような「援」（枝とも言う）と矛と同じような「刺」を組み合わせたもので、東周～随の主力武器であった）。図4参照

有角石器　ゆうかくせっき　有角石斧・足洗型石器ともいい、有角石剣と呼ばれたものも含む。中期後葉から後期にかけて、茨城県を中心とした関東・南東北に分布する。用途は不明。図5参照

有孔石剣　ゆうこうせっけん　上記有角石器のうち剣状の形態のため有角石剣と呼ばれる一群があり、そのなかでも穴のあいているもの。図6参照

大陸系磨製石器群　たいりくけいませいせっきぐん　太型蛤刃石斧（両刃　用途は伐採用）図7-1、柱状片刃石斧（用途は鑿）図7-2、偏平片刃石斧（用途は鉋・手斧）図7-3、石包丁（用途は穂刈）図7-4を指す。伐採斧は縄紋時代のものと同じ磨製石斧が継続して用いられ、太型蛤刃石斧（断面が丸い）はあまり普及しなかった。また神奈川では完全な形の石包丁は未発見である。

金属器　きんぞくき　弥生時代の金属製品のほとんどが**鉄器・青銅器**である。弥生時代前期に朝鮮半島からほぼ同時にもたらされた（中国大陸や朝鮮半島では青銅器のみの時代から青銅器・鉄器併用の時代へと移り変わる）。

【遺構】

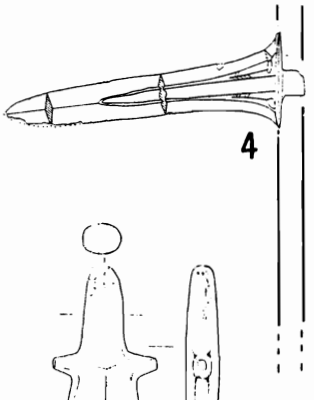
環濠集落　かんごうしゅうらく　**環濠**（濠＝太い溝を環らせたもの）をもつ集落。濠の断面形はV字や逆台形を呈することが多く、単に**V字溝**と呼ぶこともある。弥生時代前期に出現する。かつて杉原荘介先生が授業で板付遺跡の説明をする際に、飛び超えられるのが溝で、飛び超えられないものは濠だということを伺ったことがある。

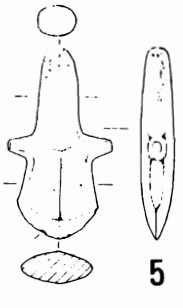
高地性遺跡　こうちせいいせき　1．一般の農耕集落が営まれないような山頂などの高所に作られた定住を目的としない集落遺跡。戦乱などでの緊急避難、物見・狼煙のための遺跡。

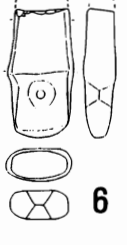
2．比較的高いところに営まれた遺跡。

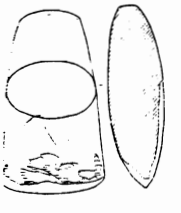
低地性遺跡　ていちせいいせき　高地性遺跡に対する用語。

前方後円墳　ぜんぽうこうえんふん　弥生墳丘墓（方形周溝墓・台状墓・四隅突出墓など）とは隔絶した規模を誇る高塚墳丘墓。定型化した最古のものとして奈良県箸墓古墳があげられる。それに若干先行する奈良県纒向石塚や千葉県神門3・4・5号墳については、古墳とする説と弥生墳丘墓と考える説に分かれる。

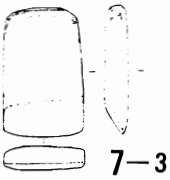

4

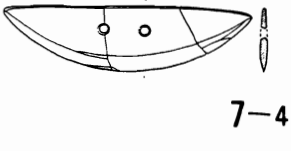

5


6


7—1

7—2


7—3


7—4

墳丘墓　ふんきゅうぼ　古墳時代以前で墳丘をもつ墓の総称。方形台状墓・四隅突出墓などを指し、方形周溝墓をこれに含める考え方もある。代表的なものでは岡山県倉敷市の盾築などがある。

方形周溝墓　ほうけいしゅうこうぼ　溝を方形に掘り、中央部に遺骸を埋める主体部を掘り込んだ墓。弥生時代前期に出現し、南関東に普及するのは中期中葉以降。県内の最古例は中期中葉の小田原市中里遺跡。また県内では古墳時代のものも含めて800基近く発見されている。

土壙墓　どこうぼ　墓壙（墓穴）を掘っただけのもの。遺跡からは数限りない穴が発見されるが、「この穴は墓である」と断定を下せるものは少ない。土壙墓が「野ざらし」に次いで普遍的な遺体処理方法であろうが確定例は少ない。穴に直接遺体を埋葬したものは特に分かりづらく、木棺に納められてから埋めたものではその痕跡から墓と確定できることもある。また副葬品と考えられるような遺物が出土した場合も墓と認定できる。

再葬墓　さいそうぼ　遺骸をいったん埋葬し、骨化した後に掘り返した骨を一部または全部土器に入れ、再び穴を掘り土器ごと埋葬したもの（土器棺再葬墓）。弥生時代中期中葉まで続いた。

【遺跡】

王子ノ台遺跡　おうじのだい・いせき　平塚市の東海大学校地内に所在する。弥生時代中期中葉の須和田式新相（池上式・王子ノ台期）と後期および古墳時代前期の集落・墓地（方形周溝墓）が多数発見された。以前は王子台遺跡と呼ばれていた。

纒向遺跡　まきむく・いせき　奈良県桜井市に所在。弥生時代の終末から古墳時代前期に営まれた都市とも呼べそうな規模をもつ遺跡。全国各地域の土器が持ち込まれている。

池上遺跡　いけがみ・いせき　埼玉県熊谷市に所在。弥生時代中期中葉（宮ノ台式の直前の須和田式新相＝池上式）の環濠集落。近接する行田市小敷田遺跡からは同時期の方形周溝墓群が検出されている。

【論説】

東海将軍説　とうかいしょうぐんせつ　東海・畿内・北陸および山陰系といった非在地系土器が関東地方の集落および初期古墳から広く出土する現象を、それぞれの地域の人々が兵士・移民として移動・移住してきた結果とし、前方後方墳は東海出身の東征将軍の墓とする高橋一夫の論究。なお東海将軍は『日本書紀』において崇神天皇10年に任命された四道将軍の一つで武淳川別とされている（他の三将軍は北陸将軍－大彦命、西道将軍－吉備津彦、丹波将軍－丹波道主命）。また古事記では三将軍となっている（高志道－大毗古命、東の方の十二道－建沼河別、旦波－日子坐王）。

東海難民説　とうかいなんみんせつ　廻間Ⅱ式（元屋敷式古段階）前半に東海系土器が大量に地域拡散する現象を、伊勢湾沿岸地域から大量に難民が排出された結果として捉え、原因を畿内と東海の緊張関係に求めた赤塚次郎による考究。赤塚はこの緊張関係を邪馬台国（畿内）と狗奴国（東海）になぞらえている。

弥生文化の三要素　やよいぶんかのさんようそ　A：縄紋文化の伝統を引き続き継承するもの、B：大陸・半島の文化を摂取したもの、C：弥生文化として新たに生み出され固有の発展を遂げたものの三種がある。

主な事例

A：竪穴住居址、土器製作技術、打製石器製作技術、狩猟・漁撈技術

B：稲作技術、大陸系磨製石器、鉄器・青銅器・ガラス製作技術

C：銅鐸、鉄釧、方形周溝墓、再葬墓

【国名】

邪馬台国　やまたいこく　『三国志魏書 烏丸 鮮卑東夷伝』倭人条（以下『魏志倭人伝』と略す）に記載されている女王卑弥呼・壱与が治めた国。場所については江戸時代以来各説が飛び交っている。

句奴国　くなこく　『魏志倭人伝』において邪馬台国と交戦した国として記載されている。王は卑弥弓呼。

【人名】

森本六爾　もりもと・ろくじ　(1803～1936) 奈良県出身　東京考古学会を主催　在野にあって弥生時代＝農耕の時代と位置づけ研究に邁進するが若くして病没。

杉原荘介　すぎはら・そうすけ　(1913～1983)　東京都出身　東京考古学会会員　明治大学教授　遠賀川・登呂遺跡等を調査。関東の弥生土器・土師器編年の大枠を作る（須和田・小田原・宮ノ台・久ヶ原・弥生町・前野町・五領・和泉・鬼高・真間・国分式土器等を提唱）。

講演者の要請により、講演時間の制約によって講演中に逐一説明できない用語について事務局で説明を加えました。また挿図の出典は省略させていただきました。図の縮尺は土器が8分の1、その他が6分の1です（文責　伊丹）。

遺跡の消長と東海系土器出土遺跡の類型

遺跡名	遺跡の消長 弥生後期 前半	後半	尾張 欠山式	三河 寄道式	西遠江 伊場式	東遠江 菊川式	東京湾岸 久ヶ原式	朝光寺原式	環濠	主な遺構
西相模										
根丸島		――			△	×			?	J
向原		――							×	J，H
原口		――				×	×		○	K，J，H
王子ノ台		――			×	○	△		×	J，H
比々多		――				×			×	J
前畑		――				○			×?	J
細谷	――				△		△		○	K
峯 ┐	――				○	×			○	K
愛甲宿 ┘	――				○				○	K，J
御屋敷添３	――			○					○	K
宮の里	…―	――		○	○		○		○	K，J（H）
子ノ神		――			○	×			○?	J
東相模										
篠山	――			△	○				－	不明
高田	――			○	△				○	K，J
大蔵東原	――				○		○		○	K，J，H
倉見才戸	――			○			△		○	K，J
本郷	…―	――	△	△	○	△	△		○	K，J，H
神崎	――			◎	△		×		○	K，J
三浦半島										
上ノ台		――					●		×	J
赤坂	…―	――					●		○?	J，H
横浜・川崎										
殿屋敷	――				×		●		○	K，J
２号線№６	――	――					○	●	○	K，J，H
釜台上星川	――				×		○		?	J
寺谷戸		――					●		○	J
赤田	――	――			△		○	●	×	J

凡例

遺跡の消長　――― ：遺跡の存続期間　・・・・・・・：遺跡の存続した可能性あり
土器の量　●：在地の土器　◎：極めて多量　○：多量　△：少量　×：微量
環濠　○：有り　×：無し　－：不明
主な遺構　Ｋ：環濠　Ｊ：住居址　Ｈ：方形周溝墓

遺跡分布図掲載遺跡

Ⓐ。西相模　*1～17*

小田原市　1 三ツ俣遺跡

秦 野 市　2 砂田台遺跡　3 根丸島遺跡

平 塚 市　4 向原遺跡　5 原口遺跡　6 王子ノ台遺跡　7 赤坂遺跡　8 権現堂遺跡

伊勢原市　9 比々多遺跡　10 三の宮・前畑遺跡　11 石田・細谷遺跡　12 石田・峯遺跡

厚 木 市　13 愛甲宿遺跡　14 御屋敷添3遺跡　15 宮の里遺跡　16 子ノ神遺跡　17 南海道

Ⓑ。東相模　*21～37*

寒 川 町　21 倉見才戸遺跡　22 大蔵東原遺跡　23 岡田遺跡　24 高田遺跡

茅ヶ崎市　25 臼久保遺跡　26 篠山遺跡

藤 沢 市　27 小糸遺跡　28 西部209遺跡　29 西部223遺跡　30 慶応大学湘南藤沢キャンパス内遺跡　31 引地脇遺跡　32 稲荷台地遺跡群　33 石名坂遺跡　34 渡内

海老名市　35 海老名本郷遺跡

綾 瀬 市　36 神崎遺跡

鎌 倉 市　37 手広八反目

Ⓒ。三浦半島　*41～52*

逗 子 市　41 池子遺跡群

横須賀市　42 杉本遺跡　43 大平遺跡　44 住吉遺跡　45 溝尾遺跡　46 佐原泉遺跡　47 吉井・池田地区遺跡群　48 鴨居上ノ台遺跡

三 浦 市　49 赤坂遺跡　50 海外洞穴　51 大浦山洞穴　52 雨崎洞穴

Ⓓ。横浜・川崎　*61～86*

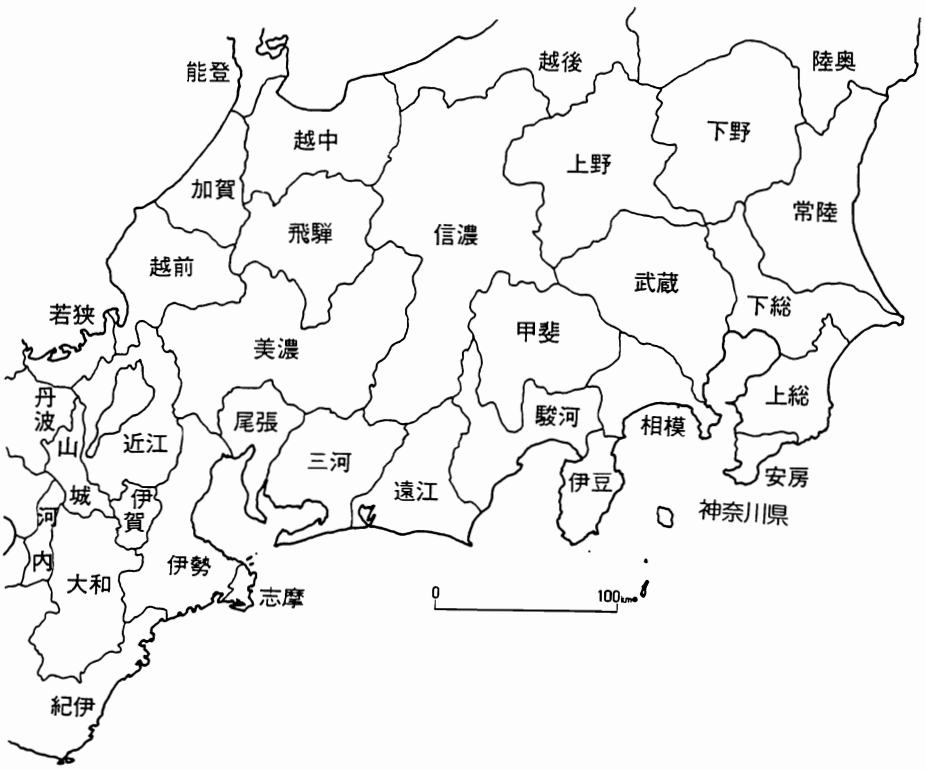
横 浜 市　61 本郷1丁目遺跡　62 東野台遺跡　63 そとごう遺跡　64 殿屋敷遺跡　65 横浜市道高速2号線No.6遺跡　66 釜台上星川遺跡　67 宿根東遺跡　68 折本西原遺跡　69 四枚畑遺跡　70 鹿ケ谷遺跡　71 赤田遺跡群　72 観福寺　73 大原遺跡　74 寺谷戸遺跡　75 森戸原遺跡　76 日吉台遺跡　77 山王山　78 菊名羽黒遺跡　79 新羽大竹　80 寺尾遺跡　81 上台遺跡　82 梶山遺跡　83 江戸山遺跡

川 崎 市　84 神庭遺跡　85 影向寺遺跡　86 末長遺跡

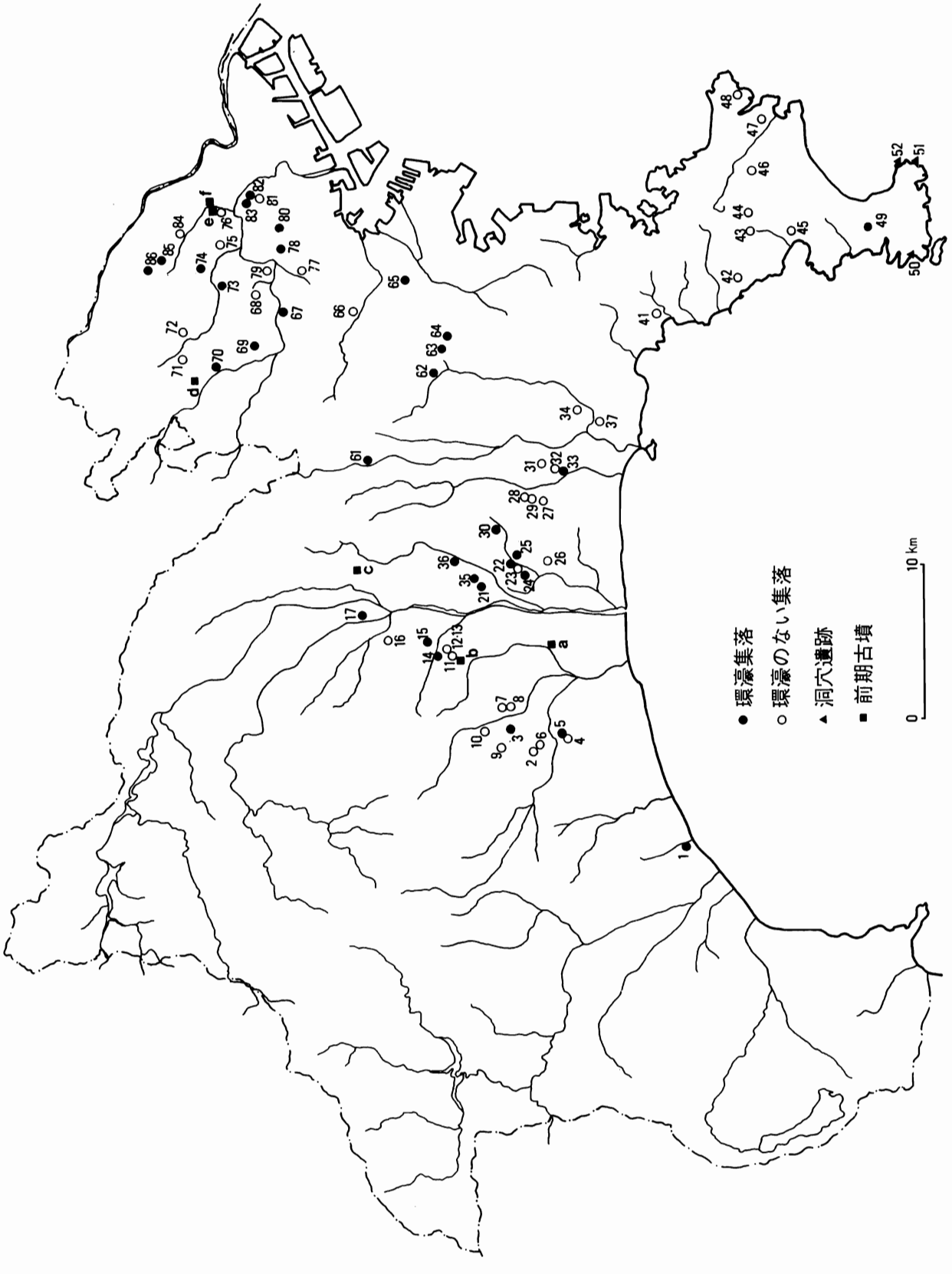
Ⓔ。前期古墳　*a～f*

a 平塚市真土大塚山古墳　b 伊勢原市黄金塚古墳　c 海老名市秋葉山古墳群　d 横浜市稲荷前16号墳　e 横浜市観音松古墳　f 川崎市白山古墳

旧国名地図



遺跡分布図

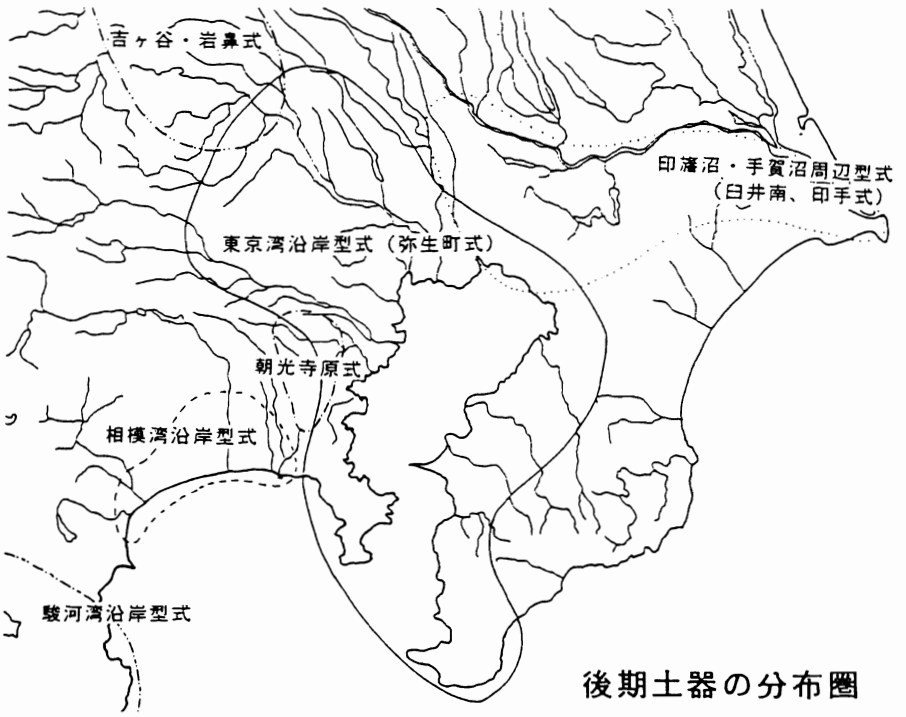


土器編年表

	近　畿	尾　張	三　河	西遠江	東遠江	駿　河	相　模	東京湾岸	南信濃	北信濃	北関東	東関東（茨城）
中期	Ⅳ様式	高蔵式	長床式	*一里田*	白岩式	有東式	宮ノ台式		恒川式	栗林式	竜見町式	足洗式
										吉田式		
後期	Ⅴ様式	山中式	寄道式	伊場式	菊川式	登呂式	相模湾岸様式	朝 久ヶ原式 弥生町式	座光寺原式 中島式	箱清水式	樽式	二軒屋系・東中根式 上稲吉・十王台式
		欠　山　式				飯田式						
	庄内式											
古墳前期		元　屋　敷　式			(+)	大廓式	(+)	(+)				

朝：朝光寺原式　　(+)：特に型式・様式名がついていないもの　*斜字*は代表的な遺跡名

土器分布図

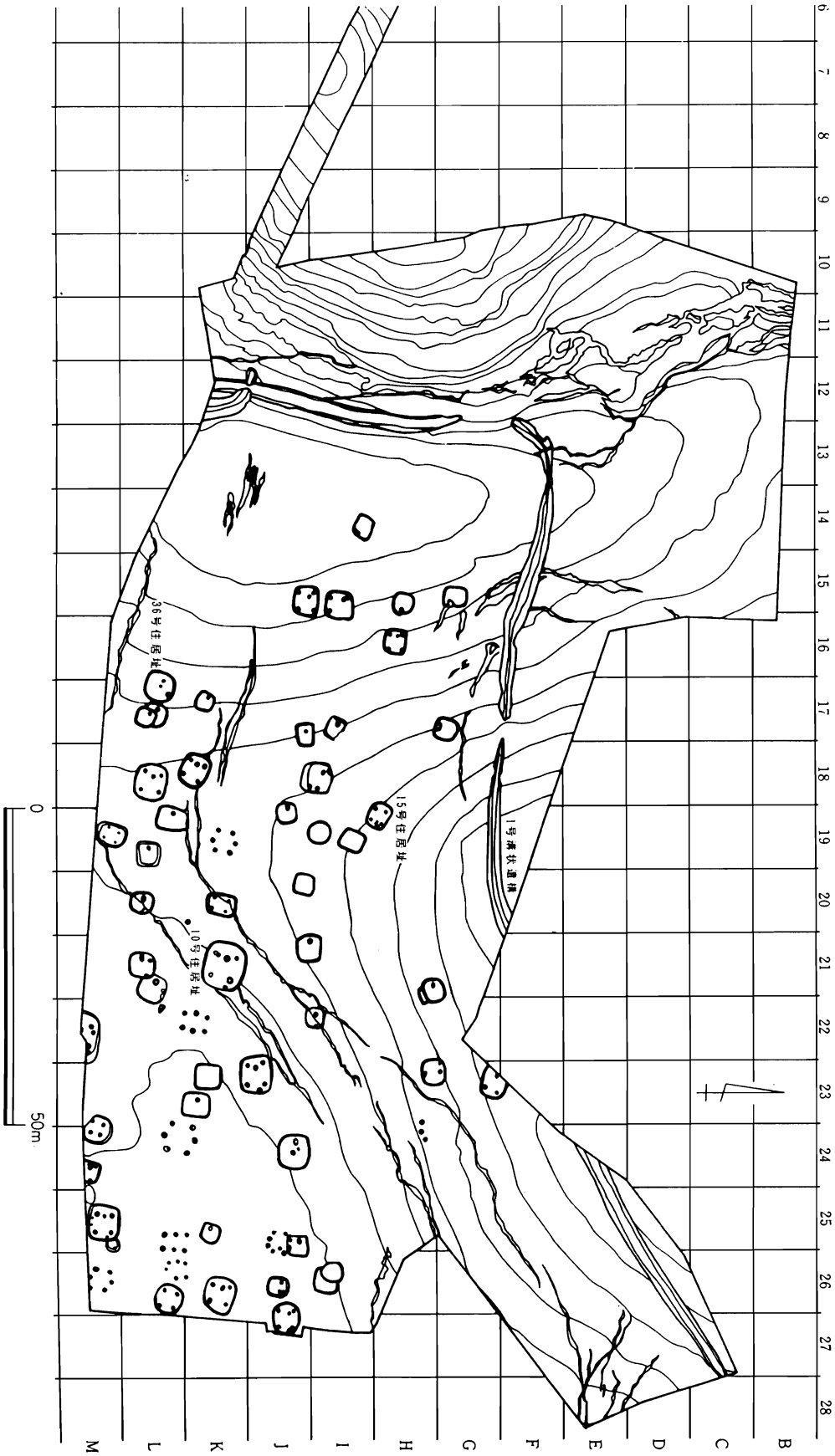


後期土器の分布圏

鉄器・青銅器出土遺跡分布図

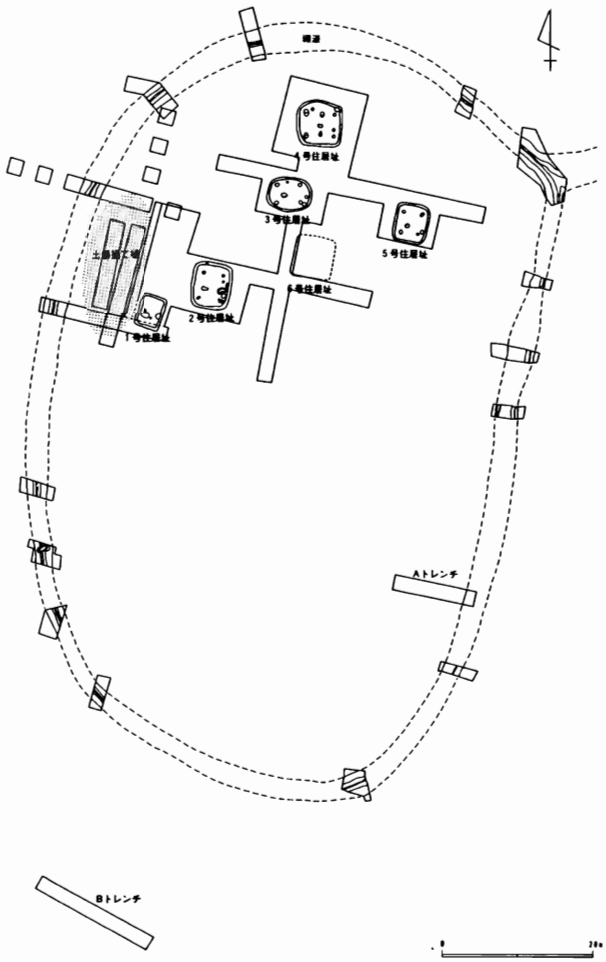
遺跡全体図

主要遺跡の全体図を掲げました。縮尺は原則として1,000分の1です。

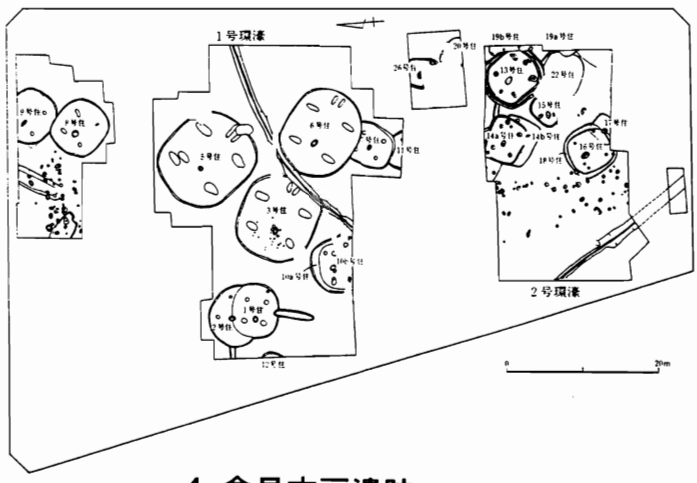


1. 臼久保A遺跡うすくぼ（1/1,000）

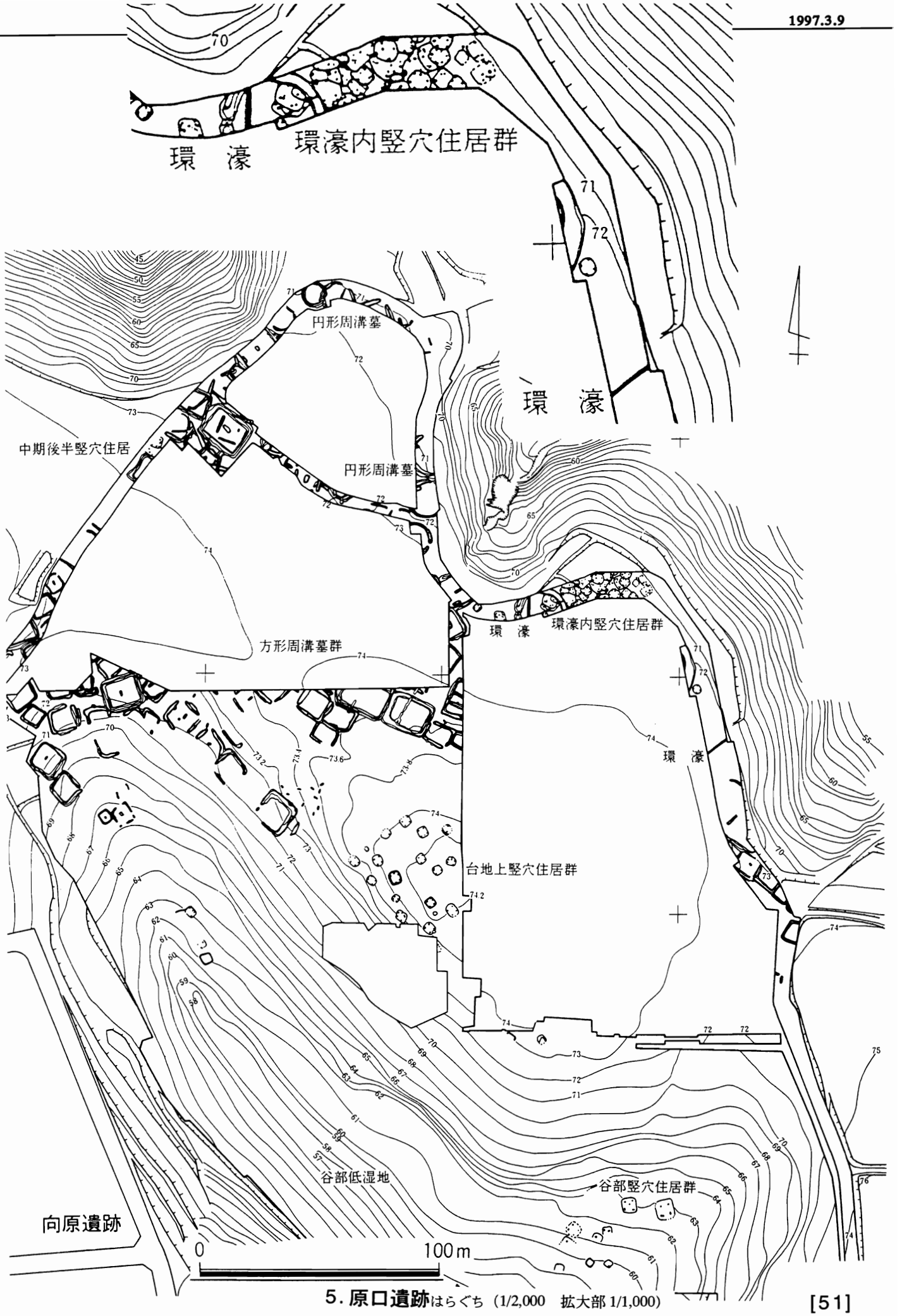
2. 海老名本郷遺跡えびなほんごう (1/2,000)



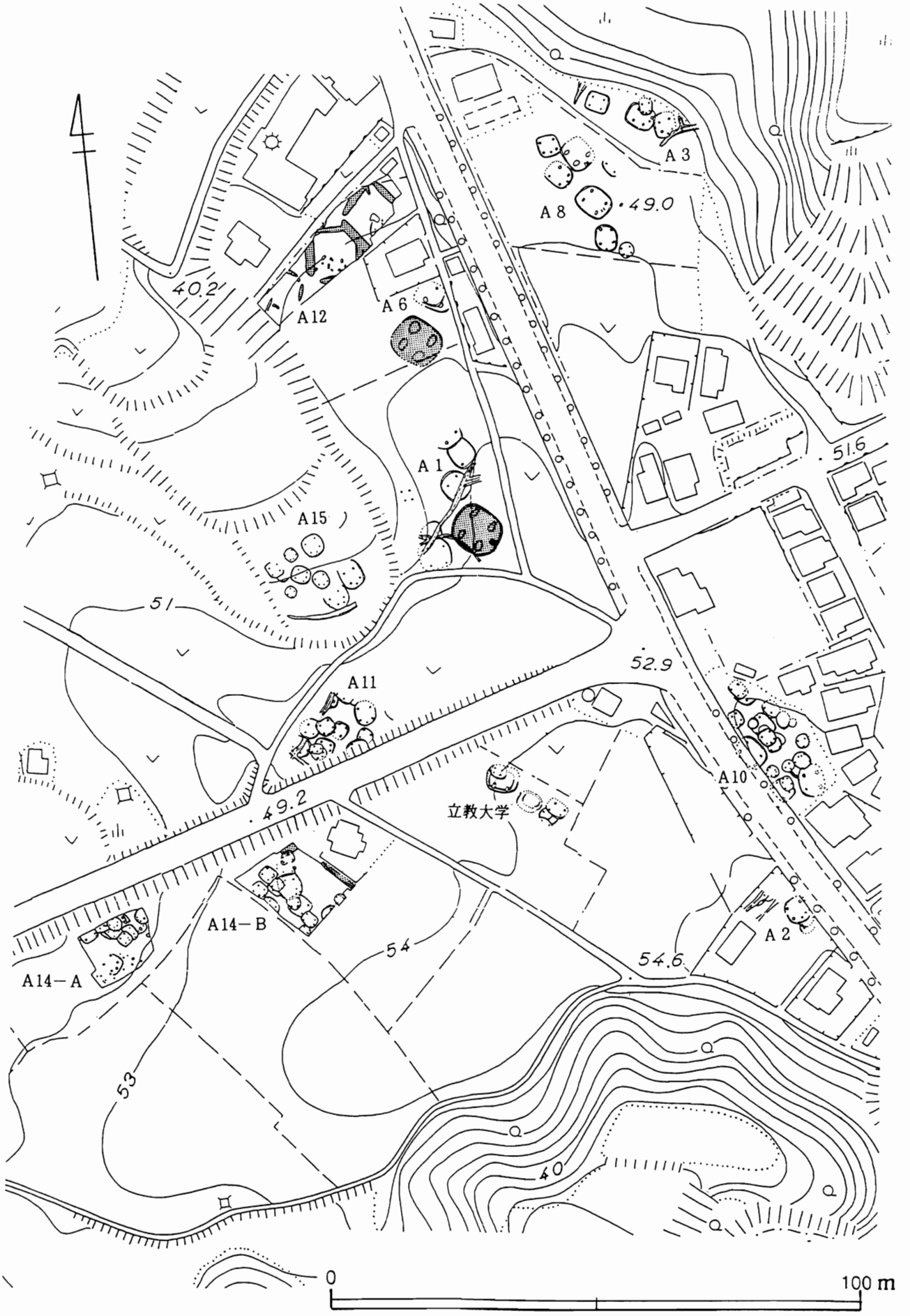
3. 神崎遺跡かんざき（1/1,000）



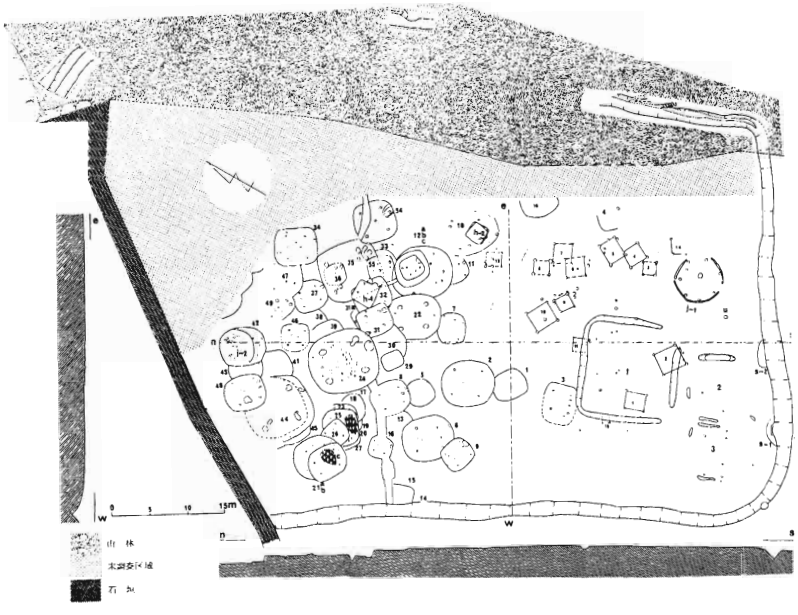
4. 倉見才戸遺跡くらみさいど（1/1,000）



5. **原口遺跡**はらぐち（1/2,000　拡大部 1/1,000）

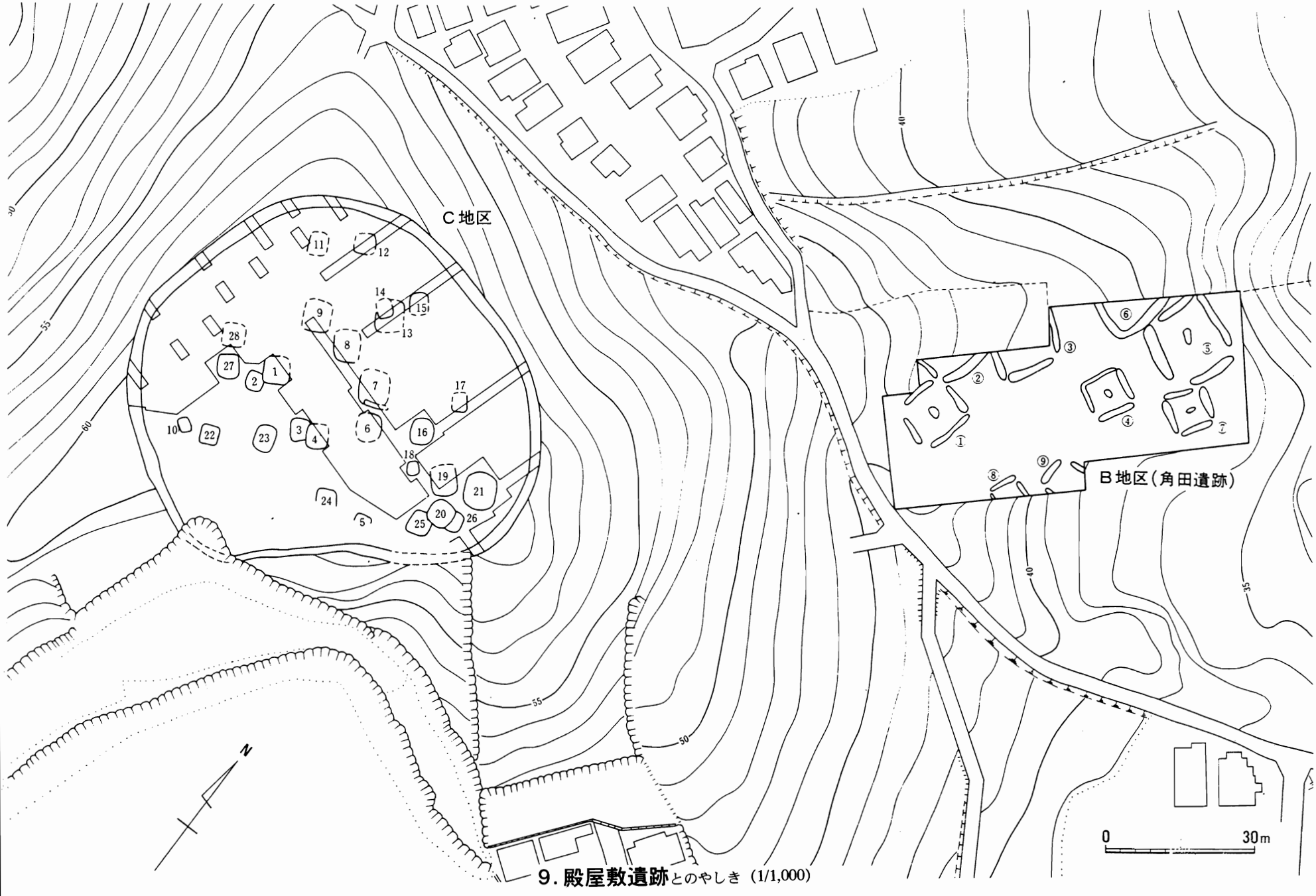


6. 赤坂遺跡あかさか (1/1,000)

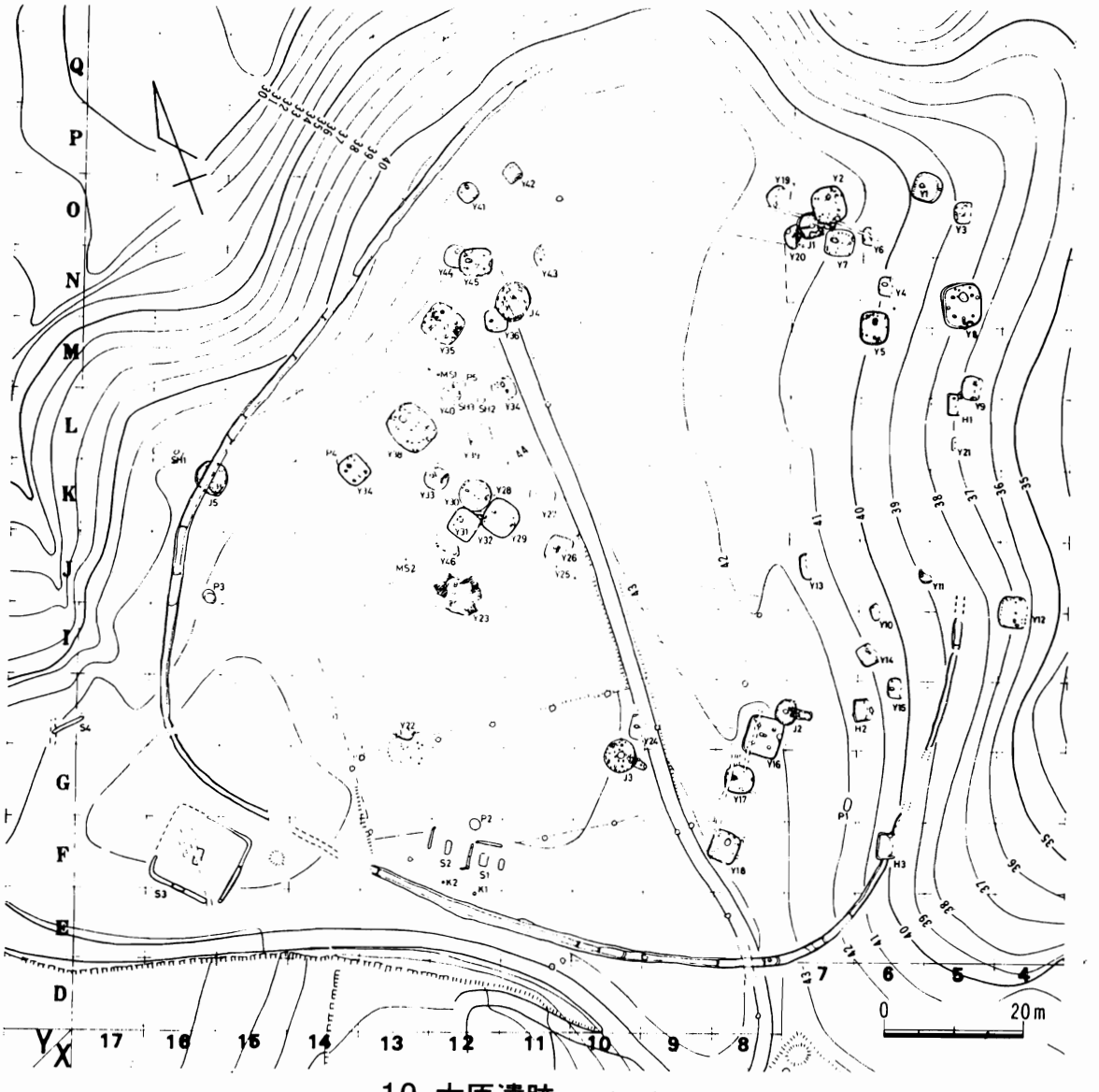


7. そとごう遺跡 (1/1,000)

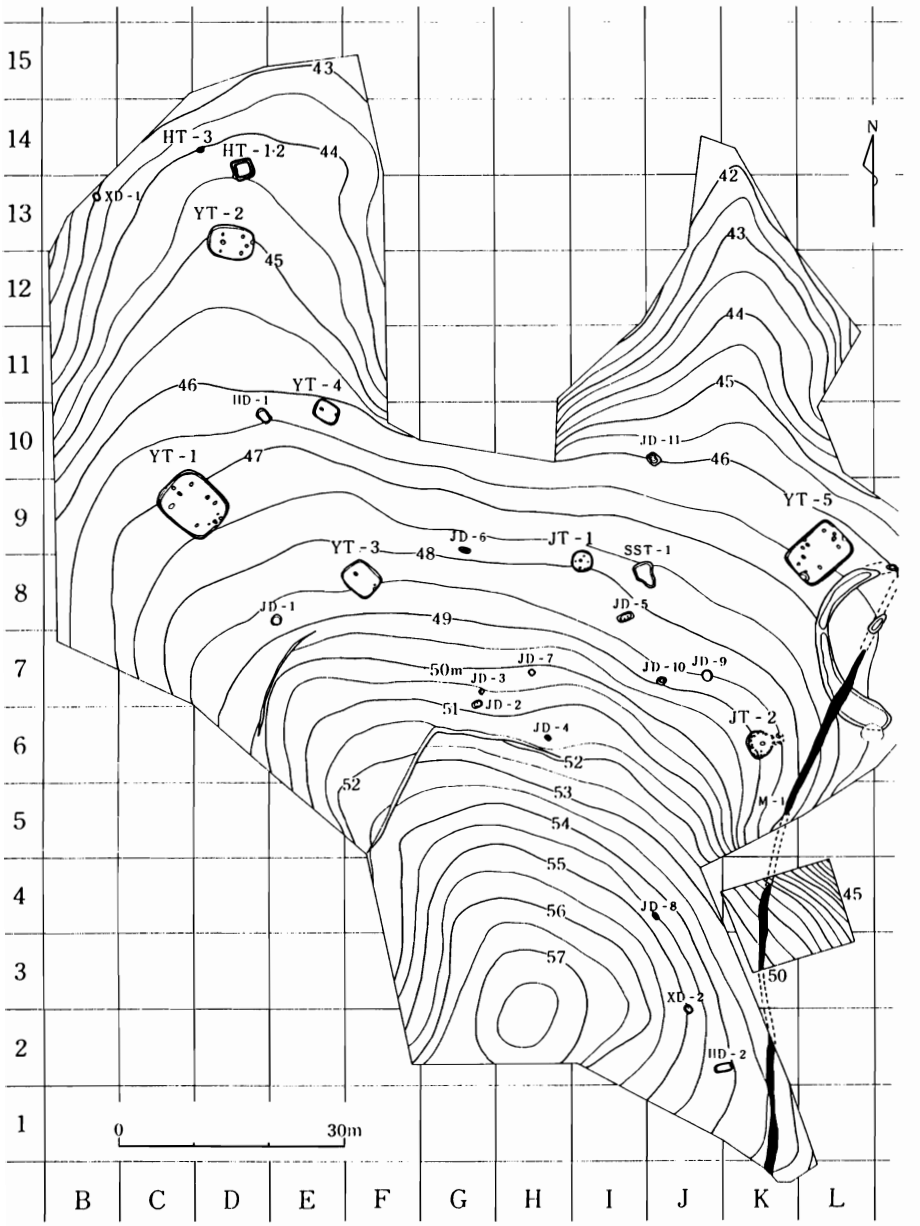
8. 四枚畑遺跡しまいばた (1/1,000)



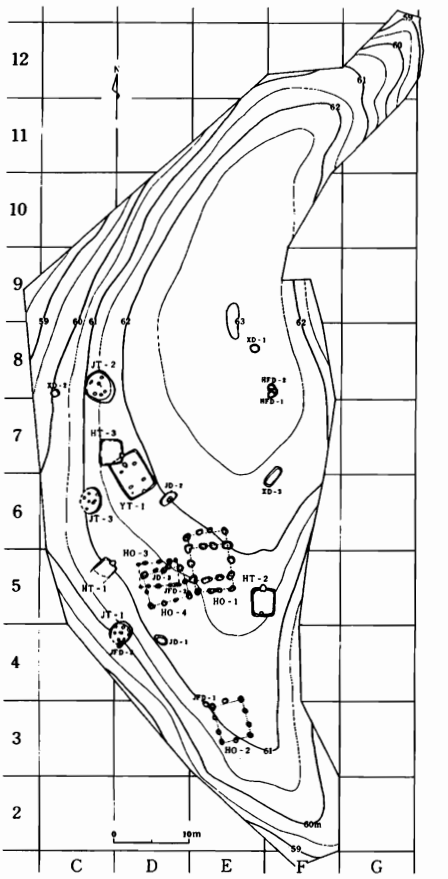
9. 殿屋敷遺跡とのやしき（1/1,000）



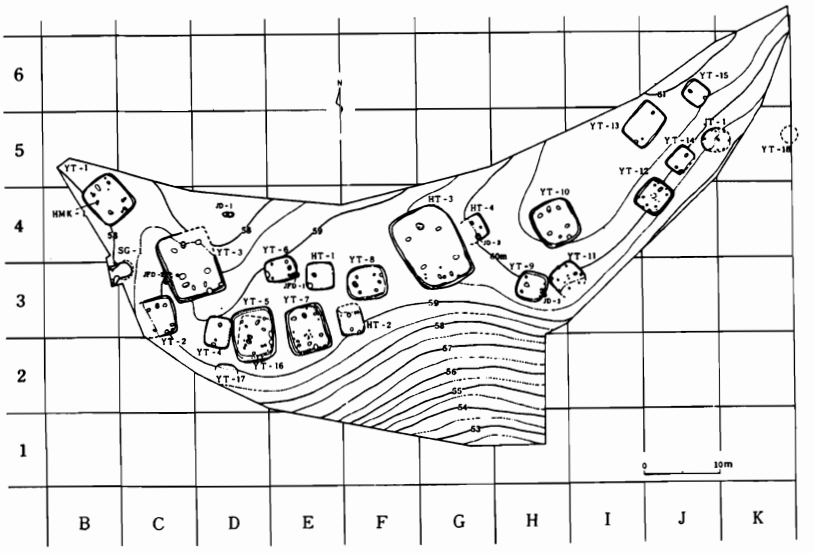
10. 大原遺跡おっぱら (1/1,000)



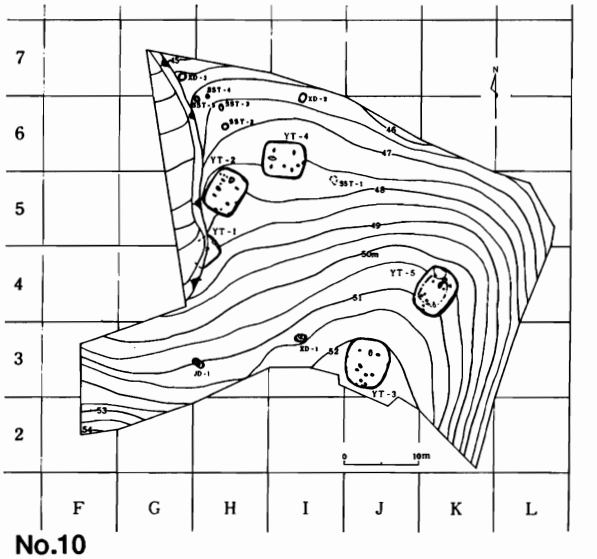
No.1



No.2



No.6

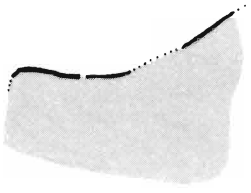


No.10

11. 赤田地区遺跡群あかだちく (1/1,000)

環濠集落の大きさ比較図

県内の後期の主な環濠集落　縮尺は5.000分の1
（安藤広道　1995『弥生時代のいくさと環濠集落』
横浜市歴史博物館　等から引用）



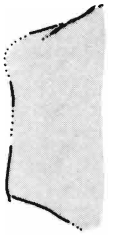
1. 臼久保Ａ遺跡

2. 海老名本郷遺跡

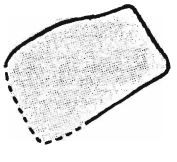
3. 神崎遺跡

4. 倉見才戸遺跡

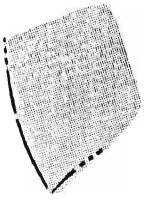
5. 原口遺跡



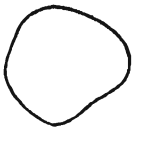
6. 慶応義塾湘南藤沢校地内遺跡



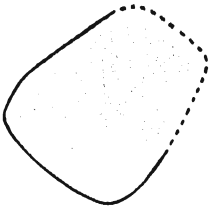
7. そとごう遺跡



8. 四枚畑遺跡

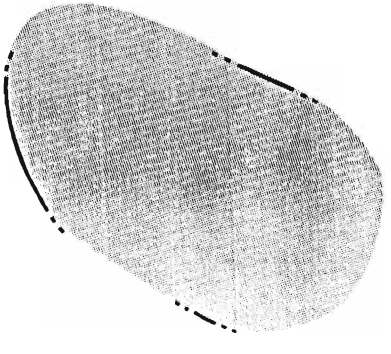


9. 殿屋敷遺跡

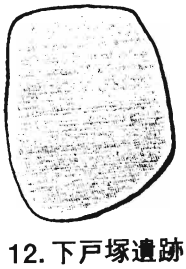


10. 大原遺跡

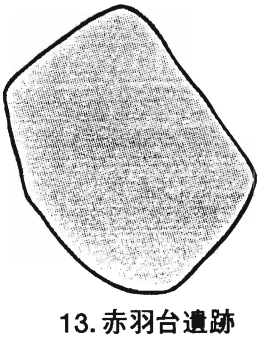
参　考



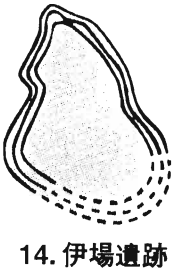
11. 寺谷戸遺跡



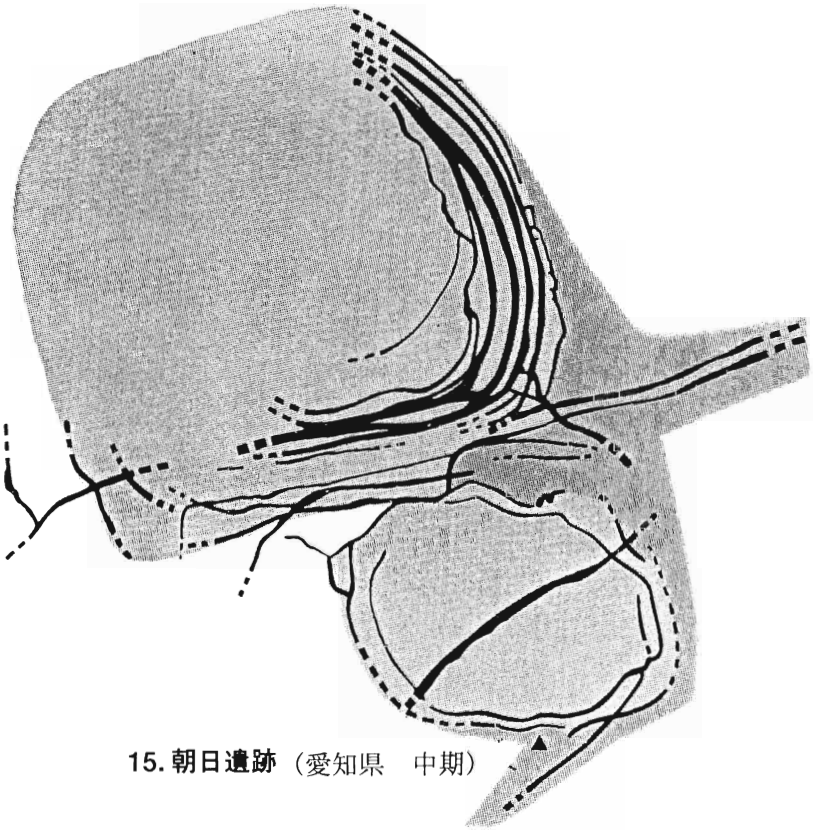
12. 下戸塚遺跡
（東京都　後期）



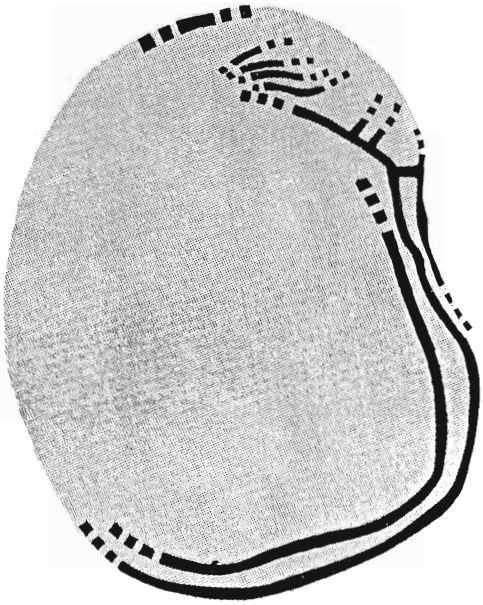
13. 赤羽台遺跡
（東京都　後期）



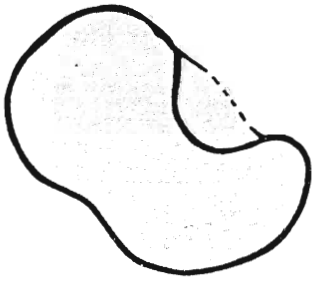
14. 伊場遺跡
（静岡県　後期）



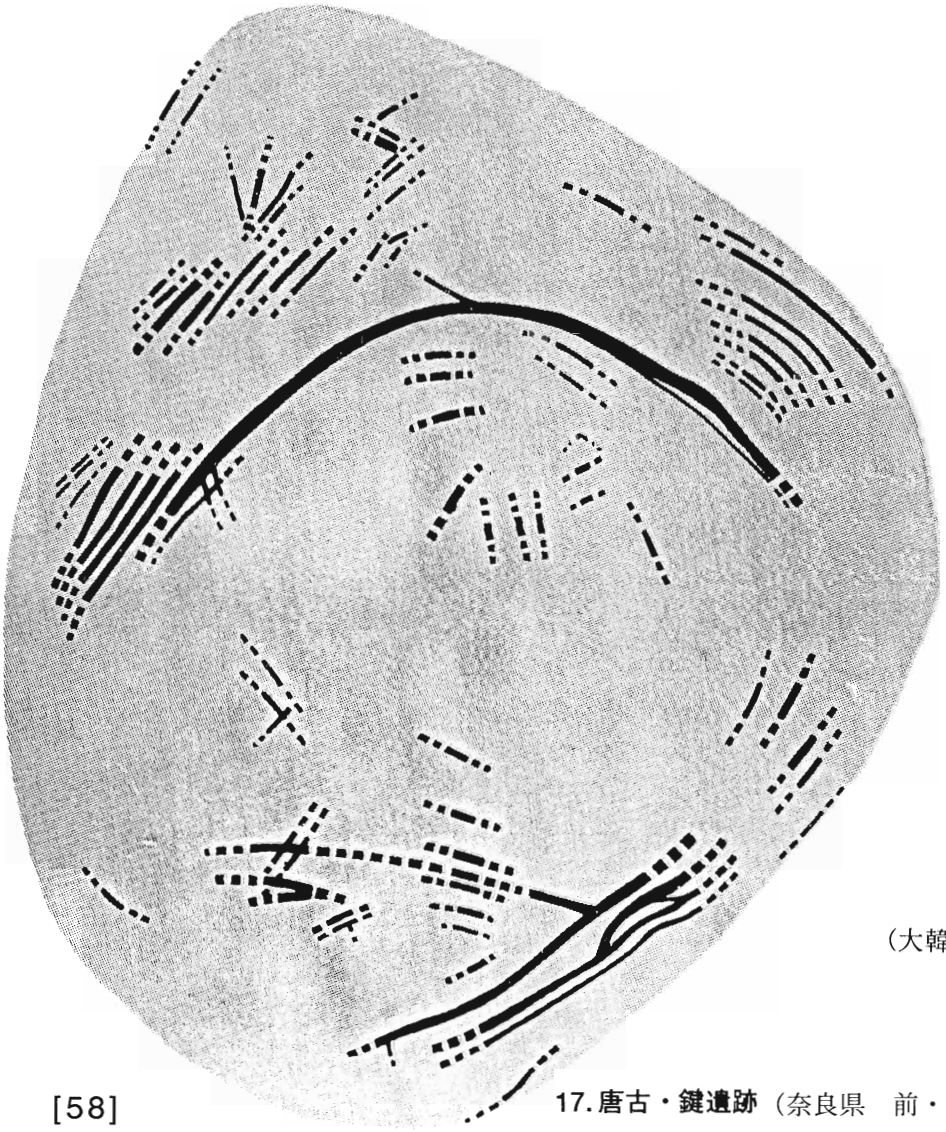
15. 朝日遺跡（愛知県　中期）



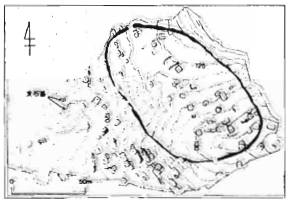
16. 池上・曽根遺跡（大阪府　中期）



18. 大塚遺跡（横浜市　中期）



17. 唐古・鍵遺跡（奈良県　前・中・後期）



19. 検丹里コムタンニ遺跡
（大韓民国慶尚南道　縄紋時代晩期併行）

平成８年度　考古学講座
かながわの弥生時代の社会
－後期の環濠集落から考える－
1997．3．9
神奈川県考古学会
会長　岡本　勇
平成８年度考古学講座事務局　神奈川県考古学会普及班
曽根博明・近藤英夫・降矢順子・土井永好・伊丹　徹・諏訪間順
編集　伊丹　徹
印刷　株式会社アルファ

神奈川県考古学会事務局　平塚市北金目1117　東海大学文学部考古学研究室内